
ライマー島放浪記

藤田文人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライマー島放浪記

【Nコード】

N0970A

【作者名】

藤田文人

【あらすじ】

長い戦乱によりすべてを失い、故郷を捨ててライマー島へ渡つて来たエルフの魔術師マギー。仲間はずっと頼りないけど夢と希望を胸にライマー島を駆け巡る！？

プロローグ

大陸は度重なる戦乱で荒れ果て、人々は理想郷を夢見ていた。

争いの続く大陸から遙かに遠く離れた場所に位置するライマー島。

別名“平和の島”と呼ばれるこの島は、住む者達が種族を越えて互いに友好的な関係を結んでいることからその名が付けられた。

そのため、慣れない冒険者達はこの島を“不思議島”とも呼んでいる。

大陸の常識が通じない島。

それがライマー島なのである。

冒険者達は、血で血を洗う戦いに正気を失い、狂気に走る者が続出した。

それほどまでに、大陸の争いは激化していた。

そのため、私達は戦乱の大陸から逃れ、このライマー島へやって来た。

航海術の発達していないこの時代、私達は戦乱を避けるべく過酷な航海に乗り出したのだ。

大陸では生き延びられない。

そう、私達は逃げたのだ……。

英雄でも勇者でも賢者でもない私達が生きるには、大陸は危険過ぎたのだ。冒険者失格と言われても、私は無駄死にするわけにはいかなかったのだ……。

私の名はマーガレット・メロウスイート。

エルフ族にして大陸にある小国の貴族の娘であった。

大陸でも類稀な美貌を誇った私は、ある時長い戦乱により滅びかけた国から政略結婚の道具になる事を命令された。

しかし、メロウスイート家はその命令を断固拒否、反逆の罪を着せられお家断絶、平たく言えば一族は処刑されたのだった。

それから国からは反逆者の汚名を着せられるわ、その国はもう滅びそうだわ、私の美貌に目が眩んだ人間達に追われるわで大陸で生き抜くのが困難になった。

その時、戦士のドム・ドボンと昔からの親友で魔術師であるコンスタンス・レグマールの二人は、私と共に大陸を出る決意をしてくれた。

だから、私は誰に何を言われてもこのライマー島で生き抜く決心をしたのだ。

長い航海の果てに辿り着いたライマー島。私達の冒険は、これから始まる……。

第一話『求む！冒険者』

街で唯一の酒場“アクアブレス”には、多くの冒険者達が疲れを癒すべくテールブルを囲っていた。
よく見れば様々な種族がいる。

この島は他の島々よりも小さかったために各種族で領地を分配するという常識ではあり得ない平和的手段で各種族の領地が分けられていた。

これは、種族に合った土地がはつきりと分かれていたために行われたらしい。

二つある森は清らかな森と妖気に汚れた森しかなかったので、エルフ族とゴブリンなどの妖魔族は争う事なく、それぞれの領地が決まった。

山岳地帯はドワーフ族が領地とし、特殊な結界により常時、夜の闇に包まれた領土はトロール族やヴァンパイア族が所有する事になった。

人間族は余った地域をその領土とする事ができたので一切の争いは起きなかった。

平たく言えば己の領地以外、住み心地が悪いので争ってまで奪おうとは各種族とも思わなかったのだ。

そんな経緯もあってか、この島のパーティーは異種族混合パーティーがほとんどだった。

かく言う私達のパーティーも異種族混合パーティーである。

ちなみに私達のパーティーは、大陸から来ているので異色のパーティーと言ってもいい。

よく人間達が噂する様に、エルフ族とドワーフ族は仲が悪い。

私の種族であるエルフ族は、優雅で華麗で知性に満ち溢れ、なおかつ繊細な感性を持った高貴な種族。

下品で酒樽みたいな知性の欠片もないドワーフ族とは生来わかりあ

う事など出来ないのだ。

ちなみに私の仲間にもドワーフ族が一人いる。
もちろん仲は悪い。

確かに腕力はあるし、頑丈だし見た目とは裏腹に手先も器用だけど、
とことん性格が合わない。

まあ、冒険者としての実力は認めるけどね。

テーブルの向かいに座ってお酒を飲んでいるドワーフ、戦士のドム
はそんなドワーフ族の中ではまだまともな方だった。それでもあま
り話したくないが。

「ドム、飲み過ぎよ。少し控えなさいよ」

私は底無しに酒をあおるドムを見て、胸やけを起こしそうになった。
隣に座るコンスタンスが水をくれた。

「……ありがとう、コンスタンス。それにしてもドムは、よく食べ
てよく飲むわね？ 転んだら起き上がれないんじゃないの？」

私は皮肉たつぷりに文句を言った。ドムが食事の手を止め、私を睨
みつける。

「……なんだよ、マーガレット。なんか文句あるのか？ 戦士は体力
が肝心なんだ。食うのも仕事なんだよ」

ドムは勝ち誇った様に私に向かってウインクする。

（……酒樽のくせに！ 転んで起き上がれなくなってしまえ！）下品
な言葉を口に出すわけにもいかず、私は黙って食事する事にした。
ここで言い争っても疲れるだけだ。

とは言っても私達のパーティーは三人しかいなかったなので、冒険に
は出れなかったが……。

普通は五人くらいでパーティーを組むのが常識。

それでも私達も大陸にいた時は六人だった。

しかし、大陸に残った仲間達は危険を犯してまでこの島へ来てくれ
なかったのだ。

意見の食い違いによる離脱。

冒険者にはよくある事だった。

とにかく冒険に出るには人が足りない。

戦士のドムに魔術師の私とコンスタンス、この三人では冒険に出るのは無謀過ぎる。

（……この酒場、いい人材がないのよね。

でも、戦士が一人じゃね……）ドムは大陸でも知る人は知っていたそこそこの戦士。

それでも魔術師二人を守って戦う事はできない。

せめて、回復魔法の使い手がいれば……。

私は頭が痛かった。

この島は種族による分割統治が見事に成されている。

そのため争いが非常に少なく、必然的に冒険者達は大陸に渡っていた。

つまり、人材の現地調達が困難だったのだ。

しかもこの島に来る冒険者達は、戦いを捨てた者が観光に来る者しかいなかった。

私達は到着早々、難題にぶつかってしまったのだ……。

「……マギー、今日はこれからどうするの？」

綺麗に皿を空けたコンスタンスが水を一口飲んで言ってきた。

「……まさか、今日も見てるだけ？」

清純可憐を絵に書いた様なコンスタンスによる毒が私の胸をえぐる。

「……もしかして、何も考えてないの？」

笑顔で追い打ちをかけるコンスタンス。

この娘、見た目と違って言う事に容赦がなかった。

天然なのか、わざとなのか、彼女の言葉に私は口をつぐんでしまった。

確かにライマー島に着いてから酒場を出ていなかった。

一日中、冒険者のチェックするだけ。

どうやら、コンスタンスはそれに飽きた様だった。

私だってもう飽きてる。

良さそうな人に話しかけても、観光に来た冒険者だったり冒険をや

めた人だったりした。

しまいには冒険なんかやめて観光しよう、なんて言われる始末。

向こうから話しかけてきたと思ったたらナンパだったり、とさっぱり成果が上がらなかった。

幸い、軍資金はたくさんあったので時間を気にする心配はなかったが……。

「……なかなか見つからないわね……」

私は溜め息混じりに呟いた。

せっかくライマー島まで来たのに、そう思うと気ばかりが焦ってくる。ライマー島には、種族の管理外冒険スポットがいくつかある。

私はそれ目当てに来る冒険者を探したが、まったく言っていない程度興味を持ってくれる冒険者はいなかった。

「……問題は、人材不足だけじゃないわよね……私達にも、問題があるのよね……」

正直、私達のメンバー構成は冒険向きの編成ではなかった。

戦士一人に魔術師二人。

どう考えても戦士が足りないし、回復魔法の使い手がないのは命知らずもいいところだった。

端から見れば、観光に来たと思われても仕方な無事なのかもしれない……。だが、ここで引き下がるわけにはいかない！

私はコンスタンスの冷めた目に耐えてカウンターへ向かった。

「……マスター、掲示板使わせてもらうわよ」

私はマスターの許可を得ると昨夜考えた最終兵器に賭ける事にした。
それは……。

『求む！勇気ある冒険者！男女問わず募集。
戦士と魔術師二人のパーティーです。我と思う者はカウンターまで
！』

……求人募集の掲示だった。

これなら見た目で判断される事もないはず。
私の類稀な美貌を持っても、いや、私の美貌に目が眩み、まともな冒険者が見つからないので、もはやこの方法に賭けるしかないのだ！

「求人募集？……うまくいくのかしら？」

コンスタンスは首を傾げ、冷めた目で私の方を見る。

「……マスターに紹介してもらった方が早くない？」

（……身も蓋もない事を！今に見てなさいよお……）
とにかく、なんだかんだ言っても求人募集は採用された。
とりあえず、張り紙で様子を見る事にして一旦部屋に戻りとなった。

まだ冒険は始まったばかり。

急がず、焦らず、まずは仲間を見つけよう。

私は、未来への不安を抱きつつも、これから期待する事にした……。

第二話『衝撃の事実!』

……冒険者は来なかった。

いや、何人かは来たのだが私とコンスタンス目当ての冒険者しかいなかった……要するにナンパ。

私は、現実の厳しさを思い知った。

この酒場にはまともな冒険者はいないの!? 街で唯一の酒場でしょ!? 私は思わず叫びそうになった。

(……いけない、いけない。落ち着かなくちゃ……)

魔術師たる者、こういった時に冷静にならないと。

そう、すべてはこの類稀な美貌のせい……容姿端麗、才色兼備、その上優雅で華麗で知性に満ち溢れ、なおかつ繊細な感性を持った高貴な私と、ちよつと毒舌だが清纯可憐なコンスタンスの二人を見て心動かされない男なんて、酒樽戦士ドムしかいない!

(……美しさつて、罪よね……)

いけない、ちよつと自己陶醉しちゃった。危なく、目的を忘れるところだった……。

街で唯一の酒場であつても、毎日混んでいるわけではない。

特に今日は誰もいなかった。

二階にある宿泊施設は満員だったけど、朝から酒を飲む者は……ドムがいた。

「……おはよう、ドム。いくら仲間が見つからないからって、あまり飲んじゃダメよ?」

私はお約束の文句を言ってドムの隣に座る。

ドムは珍しくカウンターに座っていた。

「……マスター、おはよう。誰か来た?」

マスターは私の方をギロリと見た。

マスターはリザードマンだった。

リザードマンとは、平たく言えばトカゲ人間。目が赤くて舌が蛇で肌は鱗で覆われている。

生理的にあまり関わりたくない種族である。

マスターは水の入ったコップを私の前に無造作に置く。

「……サッパリ、来ナイゾ。今ハ、冒険スル奴ガ少ナイカラナ……」
抑揚のない返事が返ってくる。この状況を見ればよくわかる。
富や名声を求める者は、危険を犯しても大陸へ渡る。

この戦乱の時代、実力さえあれば一国の王になる事も十分に可能なのだ。実際、ある冒険者パーティーが圧政に苦しむ住民達を扇動し、国を攻め滅ぼした事件もあつたくらいだ。

今の大陸は冒険者にとって、様々な魅力でいっぱいだった。

実力さえあれば富や名声をその手に、己の野望を叶える事ができるのだから。

「マスター、他に冒険者がいそうな場所ってないのか？」

隣で酒を飲むドムが口を開いた。

「せっかく、ライマー島に来たんだ。ずっとこの街にいるわけにもいくまい。そこで仲間を探す旅に出たい」

（……それ、私が言おうと思ったのに！）

私のセリフが、ドムに取られた……ドワーフだと思つて油断してたわ！

「……ソレナラ、夜ノ都“ルターズ”二行ケ。北ニアル夜ノ領域ノナカニアル街ダ。ソコナラ、冒険者ガイルゾ……」

マスターはさらつと答える。

「……ルターズか、夜の街だな。マーガレット、どうする？あまり期待できそうもないが、ここにいるよりはいいかもしれんぞ？」
ドムは私を見た。

その顔には、勝ち誇つた様な視線も馬鹿にした様な素振りも一切なかった。

（……真面目に答えろ、ってことね……）

もちろん、答えは決まっている。悔しいが、私の『求人募集作戦』

は失敗に終わったから……。

「行くしかないわね。ここにいても見つからないもの。じゃあ、今日は出発の準備をして明日出ましよう。回復役がないから、薬草の買い出しと念のため情報収集もおきたいわ。それでいいかしら？」

ドムは納得したのか、頷くと席を立つた。その目には、力強さがみなぎっている。

「……わかった。じゃあ、俺は近くの海岸で剣の修行をしてくる。何かあったら来てくれ。夕方には帰ってくる」

そう言つてドムは、剣を取りに部屋へ戻つていった。それにしても、酒場には私以外に誰もいなかった。

（……よく潰れないわね。マスターも冒険者だったのかしら？）
マスターはグラスを拭いている。その表情からは何も読み取る事ができない。

（……冒険者同士は不干渉が鉄則。

深入りすると足元をすくわれる。知りたくても我慢、我慢……）
私は昔から興味を持ったらとことん追求するクセがあつた。

それは、まさに魔術師向きの性格とも言えなくはないが、私の場合は少し度を越えているらしい。大陸にいた頃は、その詮索癖のせいで余計な依頼を受けたり、事件に巻き込まれたりしたから。

（……わ、話題がない……この沈黙って、なんか重いわね……）
何日も泊まっていたのに、マスターと話す機会がなかったから何を話していいのかわからない。

マスターは相変わらずグラスを拭いていた。何も話さないつもりなのだろうか？

（……ちよつとマスターなんだから、客に何か話さないよ。居づらいでしょ！）

なんで私が悩まないといけないのよ！そう思うとだんだん腹が立ってきた。

我慢じゃないが、私に声をかけない男は滅多にいない。

声をかけないのは、ドムみたいに美的感覚が欠如した者だけだ。

（……もしかして私の事、冒険者として見てないの？）

なんか嫌な予感がした。もしかして、求人募集に来た人に……。

「……マスター、一つ質問するわよ。求人募集を見て来た冒険者に、私達の事なんて説明したのかしら？」

マスターはギロリと私の顔を見てグラスを置いた。

「……護衛ヲ探シテイル観光客……」

ああ、やっぱり！いくら私が絶世の美女でコンスタンスがそれなりの美女でも、冒険者に見えないなんて……張り紙の内容くらい見なさいよ！

私は、全身の力が抜けカウンターに突っ伏した。

それじゃあ、まともな冒険者なんて来ないわよね……。

「……マギー、何してるの？」

脱力し切った私に、コンスタンスが声をかけてきた。今頃起きたの？

「ドムから聞いたわよ。明日、いよいよ旅に出るのね？買い出しになら付き合っわよ？いつ出掛けるの？」

コンスタンスはマスターに朝食を注文して私を見た。

「マギーは食べないの？」

今、疲れてるのよ。少し休ませてよ。精神的ダメージが大きい。

いくら魔術師として鍛えられた精神力を持っとしても、この衝撃は大きかった。

「……知らない。出掛けるのは、昼食の後にするわ……」

私は部屋に戻る事にした。魔術書でも読んで、沈んだ気持ちを切り替えよう。

私も、まだまだ修行が足りないわね。でも負けないわよ！

その後、私の『いつか言い負かすリスト』にマスターの名を刻まれたのは言うまでもない……。

第三話『旅支度』

(……ちよつと贅沢だったかな?)

いくら軍資金があるとはいえ、個室にしたのは冒険者らしからぬ行動だったかもしれない。

これでは観光客と思われるでも仕方が無いかも……。

そもそも冒険者が贅沢をするなど、余程の事が無ければあり得ない話だ。

大陸にいた頃は、飲み食いにお金をかけても宿は大部屋だった。

『冒険者は、いつ何時非常事態に遭遇するかわからない。』

そのため、常に連携が取れる様、出来る限り行動を共にする事が望ましい』

国の訓練施設で学んだ『冒険者の心得』の一つを思い出した。

そうだった。個室に泊まったら、いざという時に対処できない。

(……マスターが観光客と思ったのも仕方無いわね……)

私は反省した。

いくら平和な島とはいえ、危機感を忘れるなんて冒険者失格だ……。

(……そろそろ、お昼かな?)

私は魔術書を閉じ、身支度して下へ降りた。だ一階の酒場にはコンスタンスしかいなかった。

一人しかいないのにカウンターではなく、テーブルに座って昼食をとっている。

彼女は無愛想なマスターを避けて、テーブルに移動したのだろう。

(……無愛想って言うより無表情? 黙られると、見た目も見た目だし怖いよね……)

おそらく、マスターは私達を観光客としか見ていない。

何故なら私達に対する態度にそれが現れているから。

はつきり言ってしまうえば対応が適当なのだ。

……冒険者としてこれほどの屈辱はない。

（……見てなさいよお。いつかその態度、後悔させてあげるわ！）
確かに、名の知られない冒険者が舐められるのは仕方が無い事だ。
それでも私はマスターの態度に腹が立った。何故なら、見た目で判断した違いないから。

私は、大陸にいた頃から見た目で損をしてきた。それは冒険者として接してもらえない、というある意味致命的なものだった。
その劣等感が、私を苛立たせた。

（……絶対、有名になってマスターを驚かせてやるわよ！）

私はいつもより早めに昼食をすませると、コンスタンスを連れて酒場を出た。外に出ると街は行き交う人々で賑わっていた。

もちろん、その中には冒険者もいる。

しかし、酒場での一件があったので、今さらスカウトする気にもなれなかった。なのでおとなしく薬屋へ向かった……。

薬屋“メイデンの店”には、様々な種類の薬草が置いてあった。

さすがに港町と言われるだけあって、ライマー島全土から薬草を仕入れているのだろう。

ここなら各地の情報にも詳しいと思った私は、情報収集もついでに
してしまおうと店主に声をかけた……。

「……する事が無くなったわね。コンスタンスはどこか行きたい所
ある？」

買い出しと情報収集を終えた私とコンスタンスは、近くの料理屋で
優雅な一時を過ごしていた。私の類稀な美貌に心奪われた薬屋の店
主が、薬草を半額で売ってくれたからお金に余裕ができたのだ。こ
の時間に酒場に戻ったところで、する事がないしドムの様に修行を
するといっても、魔術師である私とコンスタンスに出来る事は魔術
書を読むくらいしかできない。

「……マギー、“夜の領域”にあるルターズまでは、十日もあれば
着くのよね？」

「そうよ」

「……十日間、前線ドム一人で大丈夫かな？私達を一人で守るのは

大変よね……」

このコンスタンスの不安は私も思った。だが、大陸にいた時からドムは頼りがいのある戦士だった。

そのせいか、いかに初めての土地あってもドムなら守りきる、そんな安心感も私は同時に持っていた。

「……正直わからないけど、あれでもドムはそこそこの頼りになるんじゃない？まあ、資金に余裕はあるから無理せず宿を利用すれば大丈夫よ、きっと」

薬屋の店主によれば、盗賊の類は滅多に出ないという。

街道沿いに旅すれば危険な目に遭う事はないはず。ライマー島は種族による領域がはっきりしている。

だから、街道から外れない限りは比較的安全に旅ができるそうだ。もちろん、運が悪ければ襲われてしまうが……。

「……コンスタンス、ごめんね……私がお尋ね者にさえならなければ、こんな不安な旅をしなくてもいいのにね……」

本来なら、コンスタンスはライマー島に来る必要がなかった。

それなのに旅は道連れ、とだけ言って彼女は一緒に来てくれた。

それだけに、できるだけ彼女を危険な目に遭わせたくない。

「……このままだと暗い話になっちゃうわね？でも無理はしないでいくら親友でも、嫌になったら大陸に帰ってもいいからね？」

冒険者は、時に非情にならなければならない。いくら親友が相手でも。

「私、マギーと一緒に冒険したいの。大切な仲間ですもの。だから、私は帰らないわ」

コンスタンスの言葉が心に染みる。

（……仲間、か。ドムもコンスタンスも、人が良すぎるわよ、まったく）

私は、不覚にも泣きそうになった。二人とも、冒険者のくせに情が深い。だからこそ、信頼できるのかもしれない。

冒険者にとって、やっぱり『仲間こそが宝』なのだと、改めて知る

事ができた。

私には信頼できる仲間がちゃんという。そう思うと、明日からの冒険にも希望が持てた。

たとえ戦士のドムに魔術師のコンスタンス、同じく魔術師の私というパーティーでも、二人とはもう長い付き合いだ。

それだけに、他の冒険者パーティーに負けられないだけの連携は取れるだろう。

厳しい航海を乗り越えてきたんだ、それだけの自信はある。

（……きつと、大丈夫よ。何度も危機を乗り越えてきたんだから……）

確かに未知なる冒険に不安は拭いきれない。でも、それはいつだって同じだ。

不安のない冒険なんてない。だから、ドムだって剣の修行をして己を鍛え上げている。

そうやって自分の気持ちを強くして冒険に臨むのだ。

「……私を信頼してくれる様に、ドムの事も信頼してるでしょ？」
コンスタンスは頷く。

それは当たり前的事だ。そうでなければパーティーを組んだりはしない。

「もちろん信頼しているわ……そうだったわ、ドムはいつも盾になってくれたのよね……」

おそらく不安にばかり目がいつてしまったのだろう。

コンスタンスは少し恥ずかしそうにうつむいた。

「……いけないわ。不安な気持ちで仲間を疑うなんて……マギー、ごめんなさい。もう大丈夫よ」

どうやら気持ちが吹っ切れた様だ。これで明日からの冒険に何の支障もなくなった。

……明日から、いよいよ私達の冒険が始まる。

ライマー島で初めての冒険。それはきつと大陸とは違う旅になるだ

ろう。

だから、今夜は旅立ちに向けて景気良かいこう。

今夜だけは、ドムの深酒にも目を瞑って楽しく騒ぐと思う。

第三話『旅支度』（後書き）

いよいよ、次回から冒険に出るマギー達。ようやく冒険に出れる……でも、ちよつと長かったなあ（反省）それにしてもマギーはエルフらしくない。人間社会で育ってきた影響でしようか？こんなマギー達ですが、今後とも温かく見守って下さい（笑）長い後書きでしたけど、読んで下さってありがとうございます！

第四話『旅は道連れ』

……頭が重い。昨夜は少し飲み過ぎたかもしれない。

あまりお酒が強くないのに、ドムに張り合った事を私は後悔した。

(……ドムは、平気みたいね……)

前を歩くドムの足取りは軽い。その姿を見て、ドワーフ族の酒豪っぷりはさすがだと思った。

隣のコンスタンスも意外にお酒が強く、かなりの量を飲んだのに元気だった。

(……それに比べて私って……)

確かに昨夜はいつも以上に飲んでいる。

エルフの深酒が珍しいのか、おかげで場は盛り上ったが、その代償が二日酔いなんて情けない。

陽が昇る前に出発した私達は、街道を北西へ進んでいる。街道には他に旅をしている者が一人もいなかった。

「マーガレット、まだ酒が残ってるのか？」

前に行くドムが振り返る。

「……あまり無茶はするなよ、どうせ急ぎの旅じゃないんだ。少し休んでも構わんぞ」

私の顔色が悪かったのか、ドムはそう言って歩くペースを下げた。

「……大丈夫、ちょっと頭が重いだけよ。少し歩けば治るわ……」

まだお昼にもなってないのに休むなんてできない。

それに情報によれば、もう少し歩けば小さな村があるはず。

そこで休む事ができるのだから、こんなところで弱音なんか吐いてられない。

「……そうか。なら村までこのまま行くか」

ドムは私の言葉に納得して再び前を向いた。それでも私に気を使っ

たのか、歩くペースは遅いままだった。

ライマー島は、争いがほとんどないため街道整備が整っている。さらに大陸と違って荒らされる事もなかったので、二日酔いでも歩くのが楽だった。

少し気分が良くなったので周りを見渡すと、街道から離れたところに小さな林が点在していた。

そこから微かだが歌声が聞こえる。

だが、ドムとコンスタンスに反応がない。どうやら二人には聞こえないようだ。

(……これは、精霊の歌声ね……二人に聞こえるわけないわね……) それなら私にだけ精霊の声が聞こえたのも当たり前だ。

エルフは妖精に近い種族。精霊と会話する事ができるのだ。この島は余程自然に恵まれているのだろう。

しばらく歩くと集落が見えた。村に着いたのだ。

そこは情報通り、小さな村だった。酒場もなければ武器屋も道具屋もなかった。

私達は村の唯一の娯楽場である食堂へ入った。

村人達は皆仕事に出ているのか、中には食事をしている者は一人もいない。

「いらつしゃい、旅の人かい？」

奥からマスターらしき人が現れた。

一瞬、ドムの兄弟かと見間違える程、マスターは小柄でドムも顔負けの立派な髭をたくわえていた。

「……おっ？ドワーフの兄弟じゃないか？この島の者じゃない様だが、何のために来たんだ？」

マスターは私達をテーブルに案内して水を用意する。よそ者が来るのが珍しいのか、マスターは少し嬉しそうに見える。

「……最近は種族同士の争いも無くなり、冒険に出る者も減った……だがな、“平和の島”と呼ばれるライマー島もまだまだ捨てたも

んじゃないぞ？」

マスターは水の入ったコップを私達に手渡す。

「……君達も冒険に来たんなら、ゆっくり島を巡るといい。そうすれば、わしの言ってる意味がわかるぞ？」

随分と意味深な発言をする。

でもマスターの話が本当なら、ライマー島に来た事は決して無駄ではなかったという事になる。

「……そうか。それを聞いて安心した」

ドムはマスターの言葉に満足し、コップの水を飲んだ。戦う事が生業のドムとしては、安全過ぎるのも困りものなのだろう。

「……マスター、次の村には宿ってあるのかしら？」

ロープの裾を直しながらコンスタンスはマスターに質問する。

「私達、ルターズまで旅するんですけど、長旅になると思うので今日中に宿のある村まで行きたいの」

マスターは髭をいじりながらコンスタンスに答える。

「……宿かい？ここから先はすべての村に宿はあるぞ。それより、食事を出さないとな……」

そう言ってマスターはカウンターの奥へと消えていった。

ドワーフの割に気さくなマスターの料理を食べて私達はすぐに食堂を出た。

まだ陽は高い。

私の二日酔いも良くなったので歩くペースを上げて次の村まで行く事にした。

食堂のマスターの話によれば、ライマー島には地図にない小さな村や集落が数多く点在しているという。

そのため、街道を逸れて行けば何かしら泊まる場所は確保できるとも言っていた。それでも私達は当初の計画通り、街道をまっすぐ進むルートを取る事にした。

慣れない土地での旅。何かあっても対応するのが困難であるためだ。

「……このペースで行けば、夜までに着けそうね。思ったより進んでるんじゃない？」

私は手にした地図を見て、想像以上に進んでいる事に気付いた。それはおそらく、情報をくれた薬屋の店主が私達の歩行速度を一般レベルで考えていたためだろう。

（……確かに、私達が戦士並に歩けるなんて誰も想像できないものね）

何故なら、私とコンスタンスは魔術師の割に体力があったからだ。

『魔法は生命力だ。魔術師たる者、体力も鍛えねばならない』

……この言葉を残した偉大なる伝説の魔術師の教えを実践していた私達にとって、強行軍は朝飯前だった。

（……もしかしたら、中央都市ケールまで三日もあれば着けるかもしれないわね……）

私は、地図を見ながらライマー島の狭さを感じていた……。大陸出身者の私から見れば当たり前かもしれないけど。

しばらく歩くと前を歩いていたドムが急に立ち止まった。

「……誰かいるぞ。座り込んでいる。何かあったか？」

そう言うドムは、私達を置いて座り込んでいる誰かのもとへ走って行った。

「待ちなさいよ！」

仕方なく後をついて行く。

ドムは座り込んでいる人を介抱する。

「……あ、人間の子供だ……」

それは小さな男の子だった。服はボロボロ、所々傷付いていた。

男の子は恐怖に震えている。どうしようか？

「……マギー、この子を保護しましょう。可哀想だわ、こんなに傷付いて……」

コンスタンスは荷袋からフード付きのマントを取り出し、男の子に羽織らせた。

「……もう大丈夫よ。私達が守ってあげるわ……」

男の子はコンスタンスの言葉に黙って頷いた……。

「……僕は、ミッシェル。ケールから逃げて来ました……」

男の子はミッシェルと名乗り、ここに来るまでの経緯を話してくれた。

話によると悪徳商人に騙され人身売買にかけられたミッシェルは、ケールの商人に売られたという。

そして、そこでの生活に耐えられなくなり逃げ出したのだった。

「……むむっ、許せん！そんな奴、ぶった斬ってやる！」

ミッシェルの悲惨な境遇にドムは怒りを露わにする。

コンスタンスも唇を噛み、静かに怒りを堪えていた。

「……ミッシェル、ひとつ聞くわよ？あなた、このまま逃げる？それとも復讐したい？」

「……えっ？」

ミッシェルは私の顔をまじまじと見る。

「……私達は他の場所から来た冒険者なの。だから、あなたを安全な場所へ連れて行ってあげたくても土地なんてわからないの。でも、復讐の手伝いならできるわ……」

ミッシェルは私の言葉に戸惑っていた。私から目を逸らしうなだれる。

「……辛いよね？苦しいよね？……でも、ケリをつけなきゃ一生苦しいままよ？」

私にはミッシェルの気持ちはわからない。だけど彼の心を救う術は知っているつもりだ。

「戦うなら、私達は力を貸すわ……ミッシェル、男の子でしょ？男なら逃げないで戦いなさい！」

ミッシェルは自分の体を強く抱きしめ震えを抑える。

「……でも、僕は何も返せないよ？それでも……」

「構わん」

ミッシェルの言葉をドムは遮った。

「旅は道連れ、世は情けだ。それに、そんな外道は許せん！ミツシエル、お前のその勇氣、この剣に宿し、必ずやそいつに天誅を食らわしてやるう」

「……ミツシエルさん、私達に任せて下さい。悪い様にはしませんから……」

ドムとコンスタンスはやる気になっていた。もちろん、私もそんな外道を許すつもりは毛頭なかった。

「……ミツシエル、辛いのは今のうちよ……」

私はミツシエルを抱きしめ頭を撫でた。

この世の中、同じ目にあつてゐる子はたくさんいる。

いつの時代も泣きを見るのは弱者だ。

弱い者を食い物にする輩を、私達は許す事ができない。

冒険者として優し過ぎるかもしれないけど、私達はいつでも自分の信じる道を歩いてきた。

だから、悲惨な境遇から逃げ出したミツシエルを放っておく事などできなかった……。

私達は、とりあえず傷付いたミツシエルを休ませるべく次の村へ向かった。

中央都市ケール。

ここにミツシエルを売った悪徳商人と奴隷の様な仕打ちをした商人がいる。

当初の目的とは違ったケール来訪になるけど、私達の心は珍しくひとつになっていた。

第五話『前途多難!』

旅の途中、私達はミッシェルという少年と出会った。

悪徳商人に騙されてケールに売られたミッシェルは、その奴隷の様な仕打ちに耐えられず逃亡して来た。

……それは、この時代においてはよくある出来事だった。

だからと言ってそれを黙って見過ごす事などできない。何せ、関わってしまったのだから。

私達はミッシェルの手当てをするため、予定を変更し近くの村でしばらく滞在する事となった。

「……ミッシェルは別の島から連れられて来たのか……マーガレット、この件が済んだらどうする?……連れて行くか?」

私とドムは、近くの酒場で今後の対策を話していた。宿にはコンスタンスがミッシェルの面倒を見ている。

「ドム……あなた、何を考えてるの?危険過ぎるわ、そんなの……」
なんて単純なんだろう……私はドムの発想にあきれた。
いくらなんでも子供に長旅は危険過ぎる。

「……そうか?気弱そうだが、素質はありそうだぞ?」

そう言つてドムは空になったグラスを手にして酒の追加を頼んだ。

「どうせ行くあてもないんだ。しばらく連れて行った方が良くないか?」

それは、私も考えた。

この島の子供なら家まで送つてあげる事もできたが、危険な航海をミッシェルにさせるのも気が引けたから。

しかし、何が起きるかわからない冒険に連れて行くよりは、航海の方が安全な気もするのだ。

「……確かに、あの海を航海させたくないわね。でも冒険も危険よ

？戦士はドム一人だし、私達は自分の身を守るので手一杯よ？とて
もミッシェルまで守り切れないわ……」

「うむ……」

二人は考え込む。

しかし、ミッシェルはよくあの海流を乗り越えて来られたものだ。

そもそも、わざわざ危険を犯してまで人身売買などするのか？

そんな事を考えていると、ドムはおもむろに口を開いた。

「……マーガレット、やはり連れて行こう。ルターズで仲間を見つければミッシェルは守れる。たとえ航海させるにしても、少し鍛えた方がいい。でなければ、あの海流を越えて行くのは難しいからな……」

どうやら、ドムはミッシェルを連れて行きたい様だ。それほど素質を感じたのだろうか？

中央都市ケールから夜の都ルターズまでは五日もあれば行けるはず。無謀な航海をさせるよりは、三人で守る方が安全かもしれない。

「……わかったわ。ルターズまで一緒に行きましょう。でもドムはミッシェルだけに気を取られちゃ駄目よ。ミッシェルは私が守るから、ドムはしっかり盾になってよ？じゃないと、私達全滅しちゃうから」

（……でも、まずはケールの事が優先ね……）

商人とはいえ、護衛くらいはいるはず。

いくら大陸で戦い抜いたからって気を抜くわけにはいかない。

まだ、ライマー島の冒険者の実力を知らないのだから……。

結局、ドムに押し切られる形になったが、ミッシェルの安全を考えれば一緒にいた方がいいのかもしれない。

宿に戻り部屋をのぞくと、ミッシェルはコンスタンスと一緒に眠っていた。

この村の宿屋には大部屋がなかったので部屋を二つ借りている。ちなみに私はドムと同じ部屋だった。

ドワーフ族のドムにしてみれば、エルフである私は『まったく魅力を感じない』そうだ……とりあえず身の危険はなかったが、つくづくドワーフ族の美的感覚を疑ってしまう。

私は部屋に戻り、ローブを脱ぎ寝間着に着替えた。その間、ドムは見向きもしない。

（……ちよつと悔しいわね。眉ひとつ動かさないなんて……）

この輝く様な黄金の髪にも、澄んだ空の様な青い瞳にも、思わず触れたくなる様なみずみずしい白い肌にも、そして強く抱き締められたら壊れそうな華奢な体にもまったく反応しないなんて……女として、少しシヨックだった。

（……種族の違いね）

別に、ドムに襲われたいわけでもなかったので気にしない事にした。所詮、ドムにはこの美しさを理解できないのだから。

私は、心の中で負け惜しみっぱい言い訳をしてドムと同じベッドに入った。

「……ドム、襲ったら殺すからね」

私の言葉に、隣のドムは鼻で笑った。

「……そんな貧弱な体に欲情なんかするか。くだらない事言っで、さつさと寝てしまえ」

（酒樽のくせに！わかってても、やっぱり悔しいなあ……）

しばらくの間悔しい気持ちでいっぱいだったが、種族間の異性の好みは違うのでおとなしく眠る事にした。

「……お、重い！ドム、何してんのよ！どきなさいよ！」

朝起きると、ドムは私の胸を枕代わりにして眠っていた。

（……私の胸は枕じゃないのよ！）

ドムの頭を叩いてどかせる。まだ早い時間だったのでドムは寝ぼけている様だ。

「……すまん、ちようどいい高さだったもんだから……」

「……胸無くて悪かったわね！」

私はベッドから起きて着替える事にした。また枕にされたら気分悪すぎる。

私は気持ちを切り替えるため、魔術書を読んで気分を落ち着かせた。

この宿は泊まるだけの設備しかなかったため、私達は近くの酒場で朝食をとった。

ドムは起きてから一応謝ってきたので、今朝の件は許す事にした。

「……ミッシェルさん、辛いでしょうけど相手の名前を教えて下さい」

コンスタンスは優しく質問する。ミッシェルを売った商人と酷い仕打ちをした商人の名前を私達は知らなかった。

これではケールに潜入しても身動きが取れない。

「……ローエン、と……アトラ……だよ……」

ミッシェルは顔を赤らめコンスタンスの問いに答えた。

（……ローエンとアトラね……）

後で調べておこう。

「……ありがとう、ミッシェルさん……」

コンスタンスもミッシェルの顔を見て顔を赤くしていた。

（……この二人、まさか……いやいや、それよりも情報を集めよう。

あの状態じゃコンスタンスは駄目ね……）

「それじゃあ、コンスタンスはミッシェルの面倒を見て。ドムは私と商店で情報収集よ」

それだけを言うとドムを引っ張り酒場から出た。

（……人間っておかしいわ……ミッシェルはひどい目に遭ったっていうのに、出会ったその日になんて……）

私は、人間という種族に対して認識が足りなかった事を痛感した。若い男女を同じ部屋に泊めてはいけない。

私は知った。人間は欲望に忠実なのだ、と。

私とドムは村の商店で情報を集めた。ローエンとアトラの二人は中

央都市ケールでも有名な商人だった。

ローエンは、遙か遠くにあるリンデン大陸から貿易をしているという。

魔法技術の進んだリンデン大陸なら、厳しい航海を乗り越えられるだけの船を出す事は可能である。

ローエンは、魔法のかかった船で様々な商品を運んでいるのだろう。アトラはケール出身の商人で、その評判はかなり悪かった。

金さえ出せばなんでもする、と住民は皆嫌っていたのだ。

しかも人身売買にも手を出していて、アトラの屋敷には多くの奴隷がいるとも噂されている。さらにローエンとアトラはこの時期、ケールにあるアトラの屋敷で各種族の商人を招待し、毎日の様にパーティーを開いているという情報を入手できた。

(……パーティーをしている、って事は護衛の数はもちろん多いってわけよね……)

当たり前だが、正面からの潜入はまず無理だろう。やはり魔法を使つて潜入するしかない。

(……でも、ローエンはリンデンの出身。魔法対策は、きっと怠らないだろうな……)

よりによって、魔法が一般的に認識されているリンデン大陸の出身とは……もし、ローエンが魔法国家ルーン・マナスの出身なら魔術師は役に立たなくなる。いや、それどころか足手まといになるだけだろう。

『魔法国家ルーン・マナスの人達は皆、魔術師と同じだけの魔力を持っている。』

そのため、彼等は呪文を必要としない。

彼等と戦う時は、魔法以外の“力”が無くは決して勝てない』

魔術学院で習ったリンデン大陸の脅威についての言葉が浮かんでくる。魔法以外の“力”……筋力？信仰心？私には、さっぱり意味がわからない。

戦士はドム一人。魔術師である私達はおそらく戦力外。ミッシェル

に至っては問題外だ。

この戦力では戦えない。つまり、前途多難としか言いようがないわけだ……。

「……情報も仕入れた事だし、そろそろ戻りましょう……」

ここで考えてもしようがない。

私とドムは、二人がいる酒場へ戻る事にした……。

「……というわけよ。だから、あまり魔法はあてにならないと思うわ……」

私達は、酒場で食事しながら情報をまとめ、対策を話し合っていた。

「……ごめんなさい……成り行きで、こんな事に……巻き込んだじゃって……」

ミッシェルは話を聞いてうつむく。それを見て隣に座っていたコンスタンスが慰める。

「……ミッシェル、くよくよしないの。私達は別に負けると言ってるわけじゃないのよ？」

私は自分で言って、むなしい気持ちになった。

魔法の使えない魔術師は、ただの足手まといだと知っているから。それでも、何かできる事があるはず。

私は魔法戦における戦術を思い出そうと必死に考えた。

（……戦いはまず相手を知る事から始まる……情報戦で外から攻めるしかないわね……）

相手は悪名高い商人だ。外から切り崩して、手薄にしてから攻めるしかないだろう。

相手は私達を知らない。そこを上手く利用すれば、なんとかするかもしれない。

「……マーガレット、ケールで情報を集めよう。もしかすると、奴等を失脚させようとする輩と接触できるかもしれないぞ……」

そう言ってドムは、酒を飲み干し追加を注文した。
……幸い、ミッシェルに対しての追っ手は来ていない様だった。

私達は詳しい情報を得るべく、ミッシェルの正体を隠し中央都市ケールへの潜入を決めた。この村からケールまでは一日で着く。

ミッシェルを宿に置いておけば、私達はケールを自由に歩き回る事ができる。

……まずは情報だ。

まだローエンが“ルーン・マナス”の出身であるかもわかっていないのだ。

(……不安になるのは、まだ早いわよ……)

私は冷静に考える事にした。

魔術師たる者、常に冷静に物事を分析し、的確な判断を下さなければならぬ。

魔術師の基本精神を繰り返し唱え、気持ちを落ち着ける。

(……やっぱり、私には精神力が足りないわね……)

そんな事を思いながら、私は宿に戻って眠る事にした。

第六話『異邦人、上陸!』

マギー達が中央都市ケールに潜入してから三日が過ぎた。

情報を集め対策を練るも、これといった決め手に欠き身動きが取れずにいた……。

時は戻る。

ライマー島唯一の港町ローカスに二人の旅人が上陸した。

一人は、異国情緒溢れる着物の様な服を身にまとった、燃える様な紅い瞳と髪が特徴的な長身の女剣士。

もう一人は対照的に、ローブを身にまといフードで顔を隠していた。外見からすると魔術師だろうか？

二人は船を降り、まっすぐ街唯一の酒場“アクアブレス”の中へ入っていった……。二人はカウンターに座る。

「……繁盛してるかえ？」

女剣士は、マスターに話しかけた。声をかけられたマスターは、ギリと女剣士を見る。

「……懐かし顔ヲ見タ。何シ二来タ？」

どうやらマスターの知り合いの様だ。しかし、その表情は変わらない。い。

「相変わらずじゃのお、ガザン殿は。今回は急務で来たのじゃ」

女剣士は出された酒を口にした。

「……リリト様、早く情報の確認をしてケールへ向かいましょう……」

女剣士の隣に座っていた魔術師らしき人物は、そう言ってフードを取った。その中身は女性だった。

彼女は黒く長い髪を整え、女剣士・リリト・の方に体を向ける。

「お主は真面目じゃな、アリス。わかっておる、そんなに怖い顔を

するでない……せつかくの美貌が台無しじゃぞ？」

リリトはアリスの肩に手を置き肩を揉んだ。

「……ガザン殿、ゆるりとしたかったがそうもいかぬのでな、さっそく本題に入るぞえ」

リリトは着物の袖から束になった書類を取り出した。マスターは差し出された書類に目を通すが、意味不明な文面に頭を傾げるだけだった。

「……ナンダ、コノ変ナ文書ハ？」

リリトはマスターから書類を受け取ると着物の袖の中へと戻す。

「今回の任務じゃ……ところでガザン殿、戦士を一人雇いたい」

その言葉を聞いてアリスが驚きの声をあげた。

「リリト様！ケールは街道をまっすぐ行けば辿り着けます！ですから案内などいりません！」

リリトはアリスの言葉を無視してマスターに話しかける。

「できれば、この文書の真の意味を理解できぬ者が良いぞ。誰かおらぬか？」

「……オマエ好ミノ馬鹿ガ一人、泊マツテイル……ソロソロ、飯ヲ食イニ来ルハズ……アイツダ……」

マスターはそう言って階段の方を指した。

その先には、一人の少年がいた。

寝起きなのか、大きなあくびをしてカウンターへやって来た。

「……おはよう、マスター」

少年はリリトの隣に座ると、出された水を一気に飲み干した。

「……お姉さん達もおはよう……あ、その腰の物、業物だね？」

少年は、リリトの腰に差された刀をまじまじと見つめた。その表情は好奇心でいっぱいだった。

「……お主、若いのに良い目をしておる……うむ、気に入ったぞ。

ガザン殿、この少年がわらわ好みの戦士かえ？」

「……リリト様……」

感心するリリトの横でアリスは頭を押さえた……。

少年はリリトの刀をしばらく見ていたが、お腹の虫が鳴り出したためマスターの方に向き直った。それを見てリリトは細く微笑む。

「……少年よ、お主の名はなんと申す？もし良ければ、わらわに雇われてみる気はないかえ？」

リリトはこの少年に興味を覚えた。若いのに冒険に慣れている、彼女の直感がそう告げているのだ。

少年は笑顔で頷く。

「おいらはネロ、よろしくね。ちょうど迷宮に飽きたところだったから、お姉さん達に付き合うよ」

ネロはそう言つて、リリトとアリスに軽く頭を下げた。ネロは屈託のない笑顔で二人を見る。

「……二人とも戦士なんだ？そっちのお姉さんは帯剣してないけど、まさか素手で戦う人？」

アリスはネロの言葉に絶句した。

素性を隠すため、ローブを身にまとい偽装していたのに、ネロが一目で戦士と見抜いた事に驚きを隠せなかったのだ。

「……お主、よくぞアリスの偽装を見抜いたのお？アリス、わらわはネロを連れて行くぞよ」

リリトは、完全にネロを気に入った様だった。

（……リリト様のお目になうなど、この少年……只者ではない）もはや、反論の余地はなかった。

何故なら、アリスもこの少年を気に入り始めていたから……。

「……ネロや、わらわはリリト・ステイグマイヤー。彼女はアリス・ペレット。リンデン大陸から所用で来ておる。」

リリトはそう言つて着物の袖から束になった書類を取り出した。

そして、ネロに渡そうとする。しかし、ネロはそれを読まずにリリトに返した。

「……見てもわかんないからいいよ。それより、ご飯食べていい？さつきから腹の虫が鳴ってるんだよね……」

ネロは照れた様に笑うと、少し冷めた食事に手を付けた。その食べ

つぷりは若いだけあって、料理は見る見るうちに無くなった。隣でその様子を見ていたリリトは書類をしまい酒を口にする。

(……書類は必要なかった様じゃな。

ま、それもまた一興……旅の楽しみも増えた事だし、今回は早めに仕事を片付けるかのお……)

任務を果たすために、わざわざ遠くから来た者とは思えないセリフを心の中で呟く。

彼女にとって、任務は旅の口実でしかないのだろうか？

そう思える程、リリトは緊張感のない表情でネ口を見ていた……。

中央都市ケール。

ライマー島の真ん中に位置するだけあって、街は人通りが多く活気に満ち溢れていた。数日前に潜伏したマギー達は宿に身を潜め、酒場を中心に情報を集めていた。

ミッシェルは人目につくとまずいので宿にいる。

コンスタンスもミッシェルのそばを離れようとしないので、仕方無く宿に置いて来ている。

よって、酒場にはマーガレットとドムの二人しかいない。

「……ドム、人間って、どうしてあんなに変わるわけ？」

私は、コンスタンスとミッシェルの仲に疑問を持っていた。

おそらく、二人は出会ったその日に関係を持ったに違いない。

その後、二人は日に日に仲を深めていくのが目に見えてわかった。

何故？あまりの展開に、人間という生き物がわからなくなりそうだ。

「……マーガレット、嫉妬か？親友が取られて悔しいのか？」

ドムは平然と痛い事を言い、酒の入ったグラスを手にした。

「本人同士が幸せなら、別にいいんじゃないか？」

そう言っただけドムは酒を飲む。

(……確かにそうだけど……)

ドムの言う通り、私は嫉妬している。

親友のコンスタンスがミッシェルにばかり構うのが悔しくてたまらなかった。

「……マーガレット、まさか私情を挟んでやめるとか言うんじゃないだろうな？」

ドムは私の顔をいつになく真剣に見ている。

「それなら大丈夫よ。ローエン達の行為を許せない気持ちは、あなたと同じよ……」

確かに複雑な思いは否定できない。

しかし、ローエン達の道を外れた行為は、とても許せるものじゃなかった。でなければ、わざわざ危険を覚悟でアトラの屋敷に侵入しようなんて思わない。

私とドムは、しばらく話をした後で別行動を取った。

私は商店街を、ドムは装備関連の店で情報を集める事にした。

（……気分が乗らないから、一息つけよう……）

まだ引きずっている。いい加減、気持ちを切り替えなきゃ。

私は気分転換にお茶を飲もうと一軒の店に入った……。それが、この先の私達の運命を大きく変える事も知らずに……。

第七話『偶然の出会い』

「リリト様、信じられませんか！何故“妖魔の森”なんですか？しかも迷子！」

アリスは抗議の声をあげる。

それもそのはず、街道をまっすぐ行けばいいものをリリトが近道を探そう、と“妖魔の森”に入り込んだのだ。

しかも道に迷い、今朝ようやくケールに到着したのだった。

これではアリスが怒るのも無理はない。大事な任務で来ているのに、寄り道で支障をきたすわけにはいかないのだ。

「……わらわが悪かった……だからそんなに怒るでない、しっかり任務は果たすから許してたもれ？」

アリスは反省の色をまったく見せないリリトを見て溜め息をついた。
(……リリト様に監視が付く理由が、なんとなくわかった気がする……)

アリスは、リンデン大陸の商人ギルドからの依頼を受けたリリトの監視役として、ナム・ラマ聖王国の命を受けてリリトの任務に同行していた。

その任務とは『盗みだされた“魔法の杖”の奪取』と『“魔法の杖”を盗んだ商人ダイトナ・ローエンの処刑』、それと『要人の救出』である。

ダイトナ・ローエンはアルカーマ共和国出身の大商人で、十年前に終結した“統一戦争”の際に多くの難民を他の大陸に売った奴隷商人だった。

しかも魔法の品や盗品を不法に輸出し、莫大な利益を上げ私利私欲の限りを尽くしていた極悪人である。

極秘の調査によりダイトナ・ローエンの不法行為が明らかになった時には、すでに一族を捨ててライマー島に逃亡していた。

商人ギルドはその失態を払拭するため、そして商人達への“見せしめ”のためにリリトに依頼をしたのだった。

(……いくら見せしめのためとはいえ、リリト様に依頼するとは……)

…商人ギルドも大げさ過ぎるわ……)

アリスはこの任務に多少の疑問を持っていた。

しかし、達人と称されるリリトの腕前を間近で見られるという事もあり、余計な詮索はしないでいた……。

中央都市ケールに着いたリリト達は、宿で部屋を借りて情報収集する事になった。護衛で同行していたネロは、ケールまでの護衛の依頼を果たしたのでリリト達と別れ、食堂で食事をとっている。

しばらくはケールに滞在してからライマー島を回るという。

アリスは任務が監視だけだったので、武器の携帯をしていなかった。そのため“妖魔の森”で思わぬ危険に遭遇したので、念のため護身用の武器を買いに装備関連の商店に出掛けている。

リリトは『雅な時間を堪能する』と言って、お茶のある店を求めて商店街を歩き回っていた……。

商店街の表通りにある“トラン・テア”は、異国の装飾を店内に施した少し異色の店だった。

気分転換で一息つけようとその店に入った私は、一人になりたかった事もあり店の離れの小さな個室で休む事にした。

部屋の中はテーブルもイスもなく、草を加工した敷物が敷かれているだけだった。

(……なんだかこの感じ、落ち着ける雰囲気ね……)

ここに来て正解だったかもしれない。この部屋の造りは、静けさを感じさせてくれる。

私はそんな事を思いながら、店員に出された飲み物を口にした。

(……に、苦い……)

これは、今までにない味だった。少しずつしか飲めないが、まずく

はない。

最近は、考える事があり過ぎてゆっくりする暇もなかった。

私はせっかくの機会なので、お茶を飲み静けさを堪能する事にした。ゆったりとした時間に目を閉じ、その不思議な雰囲気にも身を委ねる……。

「……ほお、ずいぶんと美しいおなじやのお……」

うつかり眠っていた私は、女性の声で目を覚ました。

女性は異国情緒溢れる服を着ている。

しかし、不思議とこの部屋の雰囲気によく似合っていた。

「……くつろぎの邪魔をしてすまぬな。わらわも雅な時間を堪能しようと思い、知らずに来てしまった。許されよ」

女性は変な言い回しで話しかけてきた。

異国の者だろうか？見た目からしてライマー島の者ではなさそうだ。

「……わらわの言葉が気になるのかえ？顔に出ておるぞ？これは国の方言じゃ、気にするでない」

疑問に思った事を先に言われてしまった。なかなか鋭い女だ……。

「“和の心”を知る者よ、わらわはリリト・ステイグマイヤーと申す。それにしてもお主、本当に美しいのお……」

女性はリリトと名乗り、私の容姿を褒めて座った。

「私はマーガレット・メロウスイート……旅人よ」

目の前の彼女は、私をまじまじと見つめる。

「旅人とな？この街は長いのかえ？」

「……三日前からいますけど」

彼女はうんうん頷く。よくわからない人だ。

「……そうか。では、少しは街の事は知っておるうな？わらわは人を探しにこの街へ来たのじゃが、ダイトナ・ローエンという商人は知らぬかえ？」

「……………」

なんたる偶然！彼女はローエンを追って来たのか？

私は驚きを隠せなかった。彼女も察したのだろう、私の顔を真剣に見ていた。

「……知っておるのじゃな？」

彼女は低い声で話しかけてきた。

その声には、さっきまでの雰囲気とは違った威圧感があった。

「……お主、ローエンを追って来たのか？それとも、仲間かえ？」

私は凄い重圧を感じていた。彼女はかなりの手練だ、私の直感がそう告げる。

（……正直に言っても大丈夫そうね……）

話の流れからして、彼女はローエンの敵の様だ。

もしかしたら、彼女は力を貸してくれるかもしれない。

「……ローエンを追って来たわ。彼は私達の敵よ」

私は彼女の反応を見る。彼女がローエンの敵なら、有力な情報を与えてくれるだろう。

もし違った場合は、私の命が危ういが……。

「お主、正直者じゃな？……普通なら、少しは誤魔化すぞよ？」

彼女は呆れた様に言うと共に笑顔を見せた。

おそらく、私の言葉を信じてくれたのだろう。

「……わらはリンデンから奴を追って来た。故あって訳は言えぬが、お主の味方と言えよう」

彼女もローエン追って来ている。

しかもリンデン大陸から追跡しているって事は、ローエンはお尋ね者なのだろうか？

彼女の奇抜な格好を見ると、かなり特殊な理由で追跡していると思われる。

それなら、彼女にローエンの事を聞いてみよう。

「……ローエンってルーン＝マナスの人？」

「いや、アルカーマの出身じゃ。……お主、もしか魔法使いか？」

私は頷く。

「……そうよ。私達、ローエンを追って来たんだけど、戦士が一人

しかいなくて……魔法が通じるかわからないから、手を打つ事ができないのよ……」

彼女は驚いた表情で私に言った。

「……無謀じゃな。お主、二人で攻める気だったのかや？いくらなんでも死に行く様なものじゃ……見てはおれぬな。わらわは三日後の夜にローエンを討つ予定じゃが、その時まで待てぬかえ？」

そう言うのと、彼女は着物の袖をひらひらさせながら私の反応を待った。

彼女は、答えは決まっているだろう？と言いたげな表情で私を見ている。

……利害は一致している。相手の情報も持っている。断る理由はなかった。

「わかったわ、共に戦いましょう。それで戦う時はどうすればいい？」

彼女が加わっても四人だ。

しかし、コンスタンスはミッシェルに気をまわすと思うから、正直言って今回は戦力としてはあてにできない。

冷たいけど、私情を挟んでは満足に戦う事など無理だと思う。

よって戦力は私とドム、そして彼女。

彼女に仲間がいるなら、戦略も立てやすいのだが……。

「言つまでもない。無論、正面から行くぞえ」

「……えっ？」

私は啞然とした。

私達には無謀と言っておいて、自分は正面から行くというのか？

「……わらわが正面から斬り込み、敵を引き付ける。お主らは隙を見て後から乗り込めば良い」

……すごい自信だ。

正面から行くと言うからには戦士の様だが、それほどまでに己の腕に自信があるのか？

確かにかなりの強さを秘めている様ではあるが、ローエンのいるア

トラの屋敷には多くの護衛がいるはず。

わざわざリンデン大陸から追跡するくらいだから、それくらいの芸当は可能だとも言うのか？

しかし、元々彼女は単独で斬り込むつもりだったはず。

それなら、信じてもいいのかもしれない。

疑問は残るが、ドムもいる事だし彼女の言う通りにしてみようと思う。

……話は決まった。

ドム達にも報告しなければならぬ。私は、彼女を連れて酒場へ行く事にした。

私達にとって、この偶然は大きい。話の流れでここまで来てのこの偶然。

コンスタンスの事もあり、偶然の出会いというものの与える影響力が、その人生をも変える事を私は知った。

だから、この偶然を生かさなければ、これからの冒険にも影響を与えると私は思うのだった……。

第八話『機は熟した?』

リンデン大陸からライマー島へ逃亡して来たローエンは、商人ギルドからの追跡を逃れ取引先だったケールの商人セバル・アトラの屋敷に身を潜めていた……。

「……アトラ殿、わしはもう終わりじゃ……」
顔面蒼白のローエンは、今にも泣きそうな表情で“杖”を抱きかかえた。

それは、リンデン大陸から持ち出した魔法の杖。
膨大な魔力を秘めたこの杖をローエンは護身用に肌身離さず常に持ち歩いていた。

「何を震えておる? 護衛もいるし、その杖もあるではないか?」
ローエンとは対照的に、アトラは余裕の表情で酒を口にした。

「たった一人の女ごときに、そんなに怯えてどうする?」

アトラは異常とも思える程恐怖に震えているローエンを笑った。

「……アトラ殿はあいつの恐ろしさを知らぬからそう言えるのだ!」
杖を握り締め、ローエンはアトラにまくし立てた。

「……あいつは“統一戦争”で三つの国を攻め落としたのだぞ! しかも“剣匠”クラスの騎士を何人も討ち取っている! それにあいつは魔法すら斬ってしまう! そんな奴に対して……この“杖”など何の意味もないのだ!」

ローエンは絶望の叫びを上げる。

「……たとえ護衛を百人集めたところで無駄なんじゃ!」
街でその女を目撃して以来、ローエンは半ば反狂乱状態になっていた。

「……何故、リリトなんじゃ……わしは、それ程の罪を犯したというのか?」

アトラには、ローエンの異常な怯えようが理解できなかった。
たかが女一人にそこまで恐怖するものなのか？とアトラは思っていた。

「ローエン殿、この街から逃げてはどうだ？」

「無理じゃ！この狭いライマー島では逃げ切れん！わしはもうお終いなんじゃ……」

ローエンはついに泣き出した。

アトラは情けない、と思いつつも護衛を増やす様、部下に命令した……。

ケールの表通りにある酒場“リスラの店”で私はドムと合流した。

「マーガレット、後ろの女は誰だ？」

すでに酒場にいたドムは、酒を飲みながら食事していた。

「……彼女はリリト。さつき知り合った人よ」

私はリリトとドムの向かいの席に座った。

彼女は腰に差してある刀を外しテーブルに立てかける。

それを見たドムは、私の方を向いた。

「助っ人か？味方になる者を見つけた様だな……」

ドムはそう言つてリリトの方に視線を向けると、ふむふむと頷く。

まさか、彼女みたいなのが好みなのか？私はリリトの体に熱い視線を注ぐドムを見て思った。

「……どうじゃ？わらわは、お主の目になつたかえ？」

ドムの視線を受けても平然と話すリリト。

「……マーガレット、お前もなかなか良い目をしているな。この女、かなりできるぞ」

どうやら違った意味でリリトを見ていた様だ。

私は、ドムが根っからの戦士だという事を改めて思い出した。

ドムは酒の追加を頼みリリトにグラスを渡す。

「俺はドム。大陸にいた時からのマーガレットの仲間だ」

ドムはそう言つてリリトに酌をした。

初対面でも同じ戦士、酒を酌み交わすとすっかり意気投合する。

「……ところでお主らは、どこの大陸から来たのじゃ？」

リリトは出身を言わない私達に疑問を抱いた様だ。

（……まずいわね……出身を言ったら、私がお尋ね者だって事がバレちゃう……）

戦時中の国家への反逆は、どこ的大陸でも重罪である。

たとえ濡れ衣であつても、私は立派なお尋ね者なのだ。

大陸の名を言えば足がつく。

何故なら、エルフの魔術師でお尋ね者になっているのは私だけだったから。

できれば、最後まで聞いてほしくなかった。

「……ティアリスティア大陸だ」

私の思いもなんのその、考えなしにドムは答えた。

（……この酒樽！大陸の名前言ったらバレるでしょ！）

ドムも共謀者にされてるんだから、少しは考えてよ……。

彼女が賞金稼ぎとかだったら、私達また逃げなきゃならないのよ！

私は心の中で毒つく。

しかし、リリトの反応は違った。

「……やはりな。マーガレット殿の名前に聞き覚えがあつたのでな、やはりそうであつたか……」

まさか、知ってたの？名前までは公表されてなかったはず……。

「……安心するのじゃ。おそらくは無実の罪を着せられたのじゃろ？」

そう言つてリリトは酒を飲み干す。

彼女はリンデンの偉い人なのか？私は、安堵とともに不思議な気分になつた……。

酒場でアトラの屋敷へ乗り込む計画を立て、私とドムは宿屋へ戻つた。それから別の部屋にいるコンスタンス達に助っ人ができた事を説明し、部屋で着替えをしてベッドに入った。

部屋割りとは前と同じでコンスタンスとミッシェル、私とドムだった。
「……ドム、助っ人が二人に増えてよかったね？」

リリトには、もう一人仲間がいるという。

これで前線が三人になりアトラの屋敷へ潜入するのも無謀ではなくなった。

リリト達はローエンの処刑をするためにリンデン大陸から追跡して来ており、その人も腕の立つ戦士だそうだ。

「うむ、確かに俺一人では無謀だったからな。リリト達が来たのは運が良かった……」

リリトのおかげで、冒険者ではないミッシェルを部屋に置いて行ける。

そして、宿屋でミッシェルの護衛にコンスタンスがつけるので二人の安全は確実だ。

ミッシェルを気に入っているドムとしても、助っ人の存在で戦いに集中できるだろう。

（……それにしても、私も無謀な事を考えていたわね……リリト達が来て助かったわ……）

私はベッドに入りテーブルの上に置いておいた魔術書を手にする。

（……できる事なら、魔法は使いたくないわね……）

魔法は、剣と違って手加減するのが難しい。

威力を抑えれば敵は倒せないし、逆に強過ぎれば周りに被害を出してしまう。

……仲間だけは絶対に巻き込んでほならない。

一人前でない私は魔法の調整がまだうまくできないため、魔法を使用するのにも自ら制限をしなければならないのだ。

その威力調整の難しさゆえに、魔術師は戦闘において味方の援護に終始する。

それに魔力が持たないので攻撃魔法だけでは戦えないという理由もある。

それでも、魔法の使い方ひとつで戦闘そのものが決まってしまう事

もあるので、私は魔法をみだりに使用しない事になっている。

（……甘い考えだけど、今の私ではたいした援護もできないしね……）

魔術書を読みながら考えを巡らす。

「……マーガレット、あまり考え込むな。戦闘になれば、する事は自ずとわかるものだ……早く寝てしまえ」
不安そうな顔をしていたのか？

ドムは、慰めとも取れる言葉を言うつと毛布を引き寄せ眠りについた。
（……鈍いドムに心配されるなんて……相当不安そうにしてたみたいね）

私はドムの言葉を受け入れ、魔術書を閉じて眠る事にした。考え過ぎると、冷静な判断ができなくなるしね……。

第九話『裁きの夜・前編』

襲撃決行当夜。

ドムにリリト、彼女の仲間である戦士のアリスと私の四人はアトラの屋敷の前にいた。

表門の奥には多くの護衛がいる。

時間が経ったためか、ケールの街ではアトラの屋敷に乗り込む話が密かに広まっていたのだ。

しかし、街の人達の反応は歓迎しているみたいで、しかもケールの自治警護団もこの襲撃を黙認している。よっぽどアトラの評判は悪い様だ。

そのおかげで武装した私達は、アトラの屋敷の前まで誰にも咎められる事無く辿り着けた。

「……リリトとアリスが先陣を切り、ドムと私がその後につき屋敷へ潜入……リリト達はローエンを、私達はアトラをそれぞれ成敗する、と……」

本来、ローエンとアトラは私達で成敗する予定だったが、リリト達の任務がローエンの処刑なので私達はアトラの成敗に専念する事になった。

「……それでは、わらわ達は先に行く……ところで、お主は血が多い方と少ない方、どちらが良い？」

リリトは刀を抜き、刃先を見ながら私に問い掛けた。

「……えっ？」

「……意味がわからなかったかえ？……では、死ぬ者が多いのと少ないのでは、どっちが良い？好きに選ぶが良い」

余程、自分の腕に自信があるのか？戦い方を選ばせるなんて……もちろん、死ぬ人は少ない方がいいに決まってる。

「……少ない方をお願いします」

私は余裕の表情でたたずむリトを見た。

彼女は私の言葉に頷き刀の刃を返す。

「お主、人が良いな?……アリス、峰打ちでゆくぞ」

「……はい」

アリスも刀の刃を返す。

そして、二人は静かに屋敷へ走り出す。門番を一瞬で倒し、そのまま中へ消えてゆく。

私とドムもその後が続いて走った……。

門を抜け屋敷の敷地に入ると、二人は次々と敵に斬りかかっていた。彼女達が一振りするごとに敵は声も無く倒れる。

まるで、無抵抗の人を相手にするが如く斬りまくっている……そう見えるのは、戦力に差があり過ぎるからだろう。

よっぽど恐ろしかったのか、それともアトラの人望が無かったからか、二人の圧倒的な強さに護衛達は次々と門から逃げて行く。

私とドムが屋敷の入り口に着いた頃には、戦える護衛は一人もいなかった。

リトは汗ひとつかいておらず、何事も無かった様にアリスに指示を出す。

「……アリス、後は任せたぞ。わらわは屋敷内へ進入する……ローエンが来たら、逃すでないぞ」

そう言つて、リトは着物に返り血がかかっていない事を確認して私達の方に振り向いた。

「……屋敷内にはまだ敵もおろう。油断するでないぞ?」

アトラの屋敷は、自分の財力をひけらすために造りが単調だった。大きなフロアには豪華な調度品が所々に置かれており、壁のいたる所に華やかな絵画が飾られている。

フロアの奥の方には二階へ続く広い階段があり幅もあるため、まさに攻めに易く守り難い造りになっていた。

階段を駆け上がり二階へ出るとこれまた廊下が広い。

そこで三人の護衛と遭遇した。

「うおおおっつー!!」

ドムは気合いの雄叫びを上げて突っ込んでいく!

護衛の戦士も剣を構えて迎え撃つ。

だが、ドワーフの突撃はなかなか防げるものではない。

ドムは敵の剣を弾き飛ばし、返す剣で胴を払った。

その一撃は鎧に阻まれ斬る事はできなかったが剣の勢いは止まらず、そのまま振り抜くと護衛は吹き飛ばされ、前のめりに倒れ込んだ。

鎧は剣の形にへこんでいる。衝撃だけでもかなりのダメージを受けただろう。

残る二人の戦士はリリトに斬りかかっていた。

しかし、ひらひらと舞う様にかわずと二人の側頭部を打ち、難なくと気絶させる。

(……………あっけないわね……………)

援護する間も無く、あっけなく戦闘は終わった。

ドムとリリトは、ゆっくりと廊下を歩き出す。

両端にある部屋からの奇襲を警戒し、武器を持ったまま廊下の真ん中を歩いていた。

「マーガレット、少し下がっている……………殺気がみなぎっている!」

ドムは、私に注意を促すと一歩前が出る。

「……………バレてるぞ。出て来たらどうだ?」

その声に反応して右前方の扉が開く。そして、中から黒装束の男が出て来た。

「……………。」

黒装束の男は無言のまま剣を抜く。

(……………護衛の戦士達とは“格”が違っつてわけね……………)

黒装束の男からは、滲み出る殺意というか、重厚な威圧感が全身から漂っていた。

もし突然私の目の前に現れたら、おそらく身動きが取れなくなった

だろう。それくらいの威圧感があった。

ドムは剣を構えると、まだ構えも見せない黒装束の男に向かって突撃した。

「どらあああつつつ！！！！」

ドムの渾身の一撃が振り降ろされる！

黒装束の男はその剣筋を見切り、左に少し避けると剣を横にないだ。ドムはドワーフとは思えない反応で体を捻った。辛うじて鎧で剣を受ける。

「ぐっ！！」

それでも無事では済まされない。

わずかだが、脇腹を斬られたようだ。鎧から血が流れる。

黒装束の男は続けざまに剣を振る。ドムは必死に避けて体勢を整えた。

二人の戦いを黙って見ていたリリトは、私の方へ歩み寄るとロープの裾を引っ張った。

「……ここはドム殿に任せようぞ。わらわ達は先にゆくぞえ」

「……ドムを置いていくの？」

剣の素人である私から見ても、戦況は少し不利だと思った。

ここは二人で援護して戦った方がいいはず。

「……そうじゃ。ドム殿の背中が助力を拒んでおる。わらわ達がこの場にいても、戦いの邪魔になるだけじゃぞ？」

そう言うとリリトは私の手を取り、ドムと黒装束の男の横を駆け抜ける。

「……通さぬ！」

黒装束の男は攻撃を止め、ドムから一歩離れると走る私に向けて剣を振り降ろした！

「させるかっ！」

ドムは黒装束の男に突撃する。

その攻撃に意識がいったため、私はなんとか黒装束の男の一撃をかわし走り抜ける事に成功した……。

マーガレットとリリトが先に行つたのを確認すると、ドムは再び剣を構え間合いを詰めていく。

「……貴様、只者ではないな？」

ドムは目の前の男と剣を交え、その技量を悟つた。

この男は自分より強い。この男に勝てたら、俺は今よりもっと強い戦士になれる……。

その機会に巡り会えた事に、ドムは笑みを浮かべた。

「……貴様の様な強者に会えた事を神に感謝しよう……」

ドムは剣を振り被つた。

黒装束の男はその構えを見て、剣を横に寝かせ後ろに重心をかける。ドムは一撃必殺の構えを、黒装束の男はカウンター狙いの構えの样だ。

「……俺の名はドム。貴様の名は？」

ドムは半歩前へ出る。脇腹から血が流れ、鎧を赤く染めていた。

「……俺か？俺はレヴィン。闇に生きる者だ……」

黒装束の男はレヴィンと名乗つた。

「……お前はすでに手負い。俺には勝てんぞ」

そう言つてレヴィンは地を蹴つた！

「どらあああつつつ……！！」

ドムも突撃する！二人は激しくぶつかり合う。

互いの一撃は鎧の補強された部分に命中していた。偶然か、それとも無意識に反応したのか？補強部分が壊れただけで致命傷にはなつていない。

「……運のいい奴！だが、力だけでは俺には勝てぬ！」

レヴィンの連撃がドムを襲う。

流れる様な鋭い太刀捌きにドムは防戦一方になる。

かわしきれずに鎧には傷が増えていく。致命傷を防ぐので精一杯だった。

しかし、それも長くは続かなかつた。

レヴィンの一撃がドムの左腕の小手に直撃した！その衝撃で小手は壊れ、乾いた音を立てて床を転がる。

ドムは後ろに跳び間合いを取り左手を振った。

（……大丈夫だ、まだ剣は持てる……だが、速くて打ち合いになったら分が悪いな……）

ドムは剣を持ち直すと低く腰を落とした。

人間の胸元くらいの高さしかないドワーフが腰を落とせば急所はカバーできる。

スピードは落ちるが防御しやすい構えであると言えよう。

手数では勝てないので力を溜めての一撃狙いだ。

「……一撃狙いか？今度は外さぬぞ……」

レヴィンはドムの狙いを読み、剣を少し短く持ち直した。

……戦闘経験によりレヴィンは細かく攻める事を選んだのだ。

より速く、より確実にダメージを与える。

必殺の一撃を放つのは相手の動きを完全に止めてからで充分だ。

じりじりと間合いを詰めるレヴィン。対してドムは力を溜め待ちかまえる。二人は互いに間合いを計りながら相手の出方を待つ。

（……相打ち覚悟か……）

レヴィンはドムの放つ気合いに気持ちを引き締めた。

時に、覚悟を決めた者は自分の実力以上の力を発揮する。

レヴィンは柄を握る手に力を込めた。

（……まさか、中央からは来るまい。左右のどちらかだ……）

何度も突撃を防いでいる。

今度こそフェイントを使ってくるはず。

その一撃をかわせば俺の勝ちだ。

そう考えたレヴィンは、ドムに向かってまっすぐに突っ込んでいった。

同じタイミングでドムも大きく剣を振り被る……。

「おおおおおつつつ……！！！」

ドムは躊躇せずにまっすぐに剣を振り降ろした！

(……なんだと!?)

予測もしなかった攻撃に一瞬、回避反応が遅れた。とっさに攻撃を止め、後ろに跳ぶがドムの剣が胸元を斬り裂く……。鎧ごと胸元を斬られ、血で赤く染まる。

だが、その量に比べドムの剣先には血があまりついていない。

(……踏み込みが甘かったか……)

ドムの一撃は、致命傷とまではいかなかった。

内蔵まで剣は達してなく、肉だけを斬ったかたちだった。

しかし、勝負は決まっていた。

膝をつき胸元を押さえるレヴィン。すでに戦闘できる状態ではなかったのだ。

「……まだ、勝負は決まっていざ……」

剣を杖代わりに体を支える。しかし、立ち上がる事はできなかった。

「……無駄に死ぬ事はない。お前が一撃勝負に応じてくれなければ、俺は勝てなかった……」

ドムは床に落ちてた小手を拾った。

「……自分の戦い方をすれば、苦もなく勝てただろう? 何故、俺に合わせたのだ?」

ドムは少し不満な表情で問いかけた。

実力を出し切っても届かぬかも、と思っていた強者にしてはあまりにもあつけない幕切れ。

まるで手加減されたかの様な勝利に、ドムは素直に喜ぶ事はできなかった。煮えきらない気持ちだけが胸に残る。

ドムはレヴィンの言葉を待った。

「……俺の判断ミスだ……それ以上でも、それ以下でもない……お前が正面からくる事を見抜けなかったただけだ……早くとどめを刺して、仲間を追ったらいい……」

レヴィンは、それだけを言つと黙り込んだ。

敗者には死を。戦いの鉄則だ。

だがドムはレヴィンの横を素通りしていく。

「……この勝負はお預けだ」

(……この勝利は、本当の勝利ではない……俺もまだまだだな……)
ドムは心の中で呟くと、そのまま振り返りもせずマーガレット達の
後を追っていった……。

第十話『裁きの夜・後編』

アトラの屋敷は広がったが、ローエン達の居そうな場所を見つけ出すのは簡単だった。

数ある扉の中でひととき装飾の施された扉を見つけた私達は、迷う事なくその部屋に飛び込んだ……。

部屋の中は広がった。

ざっと見て鎧を着た戦士が十名。

そして、ゆったりとした高級素材のローブを着た中年が一人いた。

「……見つけたぞえ、ダイトナ・ローエン。商人ギルドの依頼にてお前を処刑する……」

リリトは刀をローエンに向けて突き出す。それを見たローエンは顔面蒼白になった。

「……無駄な抵抗は、するでないぞ？」

リリトは、そう言ってローエンに向かって歩き出した。

まるで無人の野を歩むが如く振る舞うその態度に、護衛達は怒りの表情に変わる。

ローエンの言葉を待つまでもなく、護衛達は剣を抜いた……。

ローエンを守るため、護衛達は次々とリリトに襲いかかっていった。護衛達は、先程遭遇した黒装束の男に負けず劣らぬ威圧感を放っている。皆かなりの手練の戦士なのだろう。

しかし、彼等の剣はリリトにかすりもしなかった。

スピードの絶対値が違う、とばかりに軽やかにかわし、目にも止まらぬ速さで護衛を倒すリリト。

鎧のつなぎ目を寸分違わず打ち、次々と護衛達を悶絶させる。

蝶の様に舞い、蜂の様に刺す。リリトの戦い方には、まさにその言葉がぴったりだった。

私が援護する間も無く、いや、呪文詠唱に入る前に護衛達は皆、床に這いつくばっていた。

ローエンは腰を抜かしたのか、その場にへたり込んでいる。

「——や、やめてくれ！“杖”は返す！い、命だけは……命だけは、た、助けてくれ！」

すごい怯えようだった。

とても悪事を働いていた者とは思えない程、ローエンの姿が情けなく見える。

「……それはできぬ相談じゃな。お主はやり過ぎた……」

リリトはローエンの目の前まで来ると、刀の刃先をローエンの胸元に突きつけた。

「……お主が奴隷としてさらった者達の中に、トールキンズ家の息子がおったのじゃが、まだこの屋敷におるかえ？」

ローエンの胸元を刃先で突つつくりリリト。

その姿からは、今までに感じた事もない威圧感が満ち溢れている。その重圧がローエンを完全に飲み込んでいた。

戦意など消え失せ、ただ命乞いをするばかりだった。

「……トールキンズ家！？……わ、わしは知らなかったんじゃ！」

ローエンは必死に考え巡らせている様だった。

「……ア、アトラに聞いてくれ！奴隷は奴に売ったから……奴なら知っているはずじゃ！た、助けてくれ！悪気はなかったんじゃ！」

ローエンは手に持っていた杖をリリトに差し出す。

「……つ、杖は返す……だ、だから、い、命だけは……」

リリトは、つまらなそうに杖を受け取ると刀を引いた。

「……お主はつまらぬ……」

そう言つてリリトは刀を構え直し、ローエンの首めがけて刀を振り抜いた。

「……うわっ」

私は一瞬、目を背けた。

音も立てずローエンの首は胴から離れた。胴体から血が吹き出す。

リリトはローエンの胴体を蹴り倒し返り血を避ける。
そして床に転がったローエンの首を拾い上げると私の方に振り返った。

「……さて、『処刑』と『杖の奪取』は完了したが、肝心の『救出』はアトラに聞かねばならん……さあ、アトラを探そうかのお」
刀を振り、血をはらうとリリトは私の肩を軽く叩き部屋を出て行った……。

ドムはマーガレット達の後を追ったが道を誤った様で、下へ続く階段を降りて地下に出ていた。

何人かの護衛と戦い、先へ進むドム。先程の戦いに比べれば、手応えのない敵ばかりだった。

(……マーガレット達はどこにいる？もつと先か？)

ドムは薄暗い廊下をゆつくりと歩く。

奇襲に備え、反撃の体勢を取ったまま擦り足で進む。

ドムはまっすぐ歩き、突き当たりまで来た。

(……敵の数が少ないな……もしや、道を間違ったか？)

マーガレット達を見つけられなかったので、引き返そうかとした時だった。

壁の向こう側から、何らかの気配を感じた。

(……誰かいるのか？)

ドムは壁を調べる。隠し扉があるはずだ。

(……この窪みは……)

壁際の地面にほんのわずかな窪みがあった。

薄暗い廊下の中では目を凝らしても見つけにくい窪み。

しかし、ドワーフのドムには暗視能力があったので、そのわずかな窪みを逃す事はなかった。

窪みを押すと壁に扉が現れた。どうやら、魔法の仕掛けが施されていたのだらう。

扉を開け中に入ると、生臭い臭いが鼻についた。

(……この臭いは、夜の娯楽街で嗅いだ事のある臭いだ……)

部屋は物置の様だった。臭いは部屋の奥から来ている。

部屋は薄い壁で仕切りられている様だ。

薄い壁に耳を当てると、中から女の喘ぎ声と男の下品な声が聞こえた。

ドムは剣を構え壁から離れる。そして、壁に向かって走り出した！
「どおおおりやああつつつ！……！」

ドムの体は壁を粉碎した。

部屋の中にいた者達は、突然の出来事に皆ドムの方を向いた。

部屋の中央に大きなベッドがあり、中年の男と若い女が二人いた。三人とも裸だった。女達は胸元をシャツで隠す。

「俺の名はドム・ドボン！アトラを成敗するためにやって来た！」
ドムの声が部屋に響く。男は驚いた表情でドムを見た。

「……な、何故ここがわかった！？」

男はベッドから飛び降りると、後ろの扉に向かって走り出した。

ドムは剣を扉に投げつける！

扉に剣が突き刺さり、男は一瞬動きを止めた。

「おおおおつつつ！！！」

ドムはその一瞬の隙に男に飛びかかった……。

捕らえた男はアトラだった。女達は奴隷として連れられて来た様だった。

足に鎖を付けられ逃げられない様にされていた。

ドムは鎖を切り服を渡す。女達は泣きながら、ドムに何度も頭を下げて礼を言う。

「……今、屋敷は戦闘中なので、まだ外には出られない。すまんが、もう少しだけここにいてくれ……」

ドムとしては、早く女達をこの場から連れ出してあげたかった。

彼女達にしてみれば、この場所は忌まわしい場所ではないはず。だが、屋敷内はまだ危険だった。

ドムは、アトラを部屋の支柱に縛り付けマーガレット達が来るのを待つ事にした。

（……この男、この緊急時に何考えてるんだ？）

自分の命が危うい時に、よく女を抱けるものだ。

ドムはアトラの行動に疑問を抱いていた。

しばらくすると、屋敷内の騒ぎが収まった。おそらく、戦闘が終わったのだろう。

アトラを探して屋敷内を駆けまわった私とリリトは、護衛達を倒して地下に降りた。

一番奥の部屋に入るとドムが見えた。

「……ドム！大丈夫だった!？」

ドムは床に座り、私達が来るのを黙って見ていた。

部屋の中央には大きなベッドがあり、女性が二人いた。

そして、ドムの前の支柱には中年の男が縛り付けられている。

「……おう、マーガレット。アトラは捕まえたぞ」

ドムはぶっきらぼうに言って私達を出迎えた。

「……すまんが、この女性達を外へ連れてってやってくれんか？」

（……はあ？）

私は一瞬、ドムの言いたい事が理解できなかった。

（……あ、彼女達……）

彼女達を見てすぐにドムの言わんとする事がわかった。

私は、アトラの処分をドムとリリトに任せ、彼女達をこの場所から外へ連れて行く事にした……。

……結局、私は何もしないまま戦いは終わった。

アトラはドムに討たれ、奴隷として虐げられた人達は解放された。

しかし、リリト達の任務のひとつである要人の救出は果たせなかった。

何故なら、その要人はすでに逃亡していたからだ。

解放された人達はケールの自治警護団に引き渡し、後日それぞれの家に帰す事になった。

私とドムは宿屋に戻りコンスタンス達に終わりを告げて、酒場で戦いの疲れを癒すべく酒場へ向かった。

リリトとアリスの二人はすでに酒を飲んでいる。コンスタンスとミッシェルはまだリリト達に会った事がなかったので、助っ人が女性二人だった事に驚きの表情を浮かべた。

特にミッシェルは二人を見てハッと息を飲む。

私達に気付いたリリト達も、ミッシェルを見た瞬間立ち上がった。

「……ミッシェル・トールキンズ！マーガレット殿達に匿われているのかえ！？」

リリトはミッシェルを指さし、驚きの声を上げた。アリスも立ち上がる。

「……逃亡したと聞いていたけど、マーガレットさん達と一緒にだったの…… なんと偶然……」

ミッシェルは二人の元へ近付く。

「……ご迷惑をお掛けして、すいませんでした……」

（……リリト達が探してた人物って、ミッシェルだったんだ……）私達はこの偶然に驚いたが、これでミッシェルを危険な旅に連れて行かずにすんでホッとした。

私は戦う術を知らぬミッシェルを旅に連れて行く事に抵抗があったから尚更だ。

見知らぬ土地にいるよりも地元に戻った方がいい。

「よかったね、ミッシェル。これで無事帰れるわね」

私は、ミッシェルの肩を軽く叩き笑顔を見せた。

度重なる偶然ですべては丸く収まった。

これでまた三人に戻ってしまうが、旅は出会いと別れの連続だ。

束の間の出会いを堪能すべく、私は今日だけは羽目はずそうとお酒を注文すると、それを一気に飲み干した。

だが、その時のコンスタンスの表情が暗かった事に、私はまったく

気付く事はなかった……。

第十話『裁きの夜・後編』（後書き）

戦闘シーンの表現はいまいちの様な気がするなあ（泣）まあ、何はともあれ事件は解決した！？……ちなみに、この物語はTRPG（自作）を元に行っているので展開がけっこう飛びます（笑）ですので、わかりにくい部分もありますけど勘弁して下さいm（――）mでは、失礼します。

第十一話『切ない夜』

……冒険者は、己の目的のために旅を続ける。

そのため、多くの人と出会い、そして別れる。

冒険者にとって、出会いは束の間のものではない。

だから、本当に心許せる者は共に旅する仲間しかない。

……今、私は別れの時を迎えている。

その相手はコンスタンス。

大陸にいた時から、いや、魔術学院にいた頃からの親友だった。

忌まわしき戦争により“反逆者”の汚名を着せられ、大陸にいられなくなった私を助け、共にこの島へ来てくれたコンスタンス。彼女だけはずっと一緒だと信じていた。

しかし、彼女は冒険をやめる決意を固めた。

ミッシェルと共にリンデン大陸に渡るというのだ……。

……その理由は至って単純なものだった。

どうやら、コンスタンスは本気でミッシェルに恋していたのだ。

最初、私はその恋は一時的なものだとたかをくくっていた。

しかし、彼女は私達から離れる決断を下したのだ。

私達に、彼女を止める権利はない。

コンスタンスは、危険を承知で私と共に故郷を捨てた。

そんな彼女に、これ以上危険な旅をさせるわけにもいかない。

冷静に考えれば、わかりきった答え。それでも、私の気持ちは複雑なものだった。

「……ふう」

酒場でリリト達と食事をした後にコンスタンスに呼び出され、決意を聞いてから私はため息ばかりついている。

「……ふう」

心が痛い。私の中でコンスタンスの存在は、思った以上に大きなものだったのだ。

「……ふう」

こんな気持ちで眠れるわけもなく、私は宿屋の裏手にある丘で夜空を眺めていた。

（……ミッシェルと知り合って間もないのに……）

いや、愛に時間など関係ないか。

私は必死にコンスタンスを引き止めようと考えを巡らしている。

（……何のため？彼女のため？いや、自分のため、よね……離れたくないって思ってるだけだわ……）

普通なら、ここは大人らしく笑顔で見送るのが本当の友なのだろう。彼女の幸せを考えれば、私だって笑顔で見送りたい。

しかし、その思いと違った気持ちも心の中にあって、素直に別れを受け入れられない自分もいるのだ。

……夜空には星が瞬いている。

その眺めを美しいと思う心のゆとりもない。

「……ふう」

何度目かのため息。私は寝っ転がり、意味もなく星を数えた。

冒険者は、長い旅の中で出会いと別れを繰り返す。

その出会いは、この星達のように一時だけ心を満たしてくれるものだと思うっていた。

だから、まさかコンスタンスが私達から離れるなんて……その事を想像すらしていなかった私にとって、彼女のその決断が心に深く突き刺さっていた。

「……なんだ、こんなところにいたのか？」

聞き慣れた声が、上の方から聞こえてきた。

「……寝れんのか？」

寝っ転がって夜空を見上げる私の上にドムの顔が現れた。

（……あれだけ飲んで、よく起きてられるわね……）

私を見るドムの顔は少しも変わっていなかった。

先程、酒場で小さいながらも酒を酒樽ごと豪快に飲み干したのに、である。

ドムは私の隣に座った。

「……コンスタンスの事か？」

ドムも私と一緒にコンスタンスの決意を聞かされている。

彼もまた、意外そうな表情で彼女の言葉を聞いていた。

「……俺には、お前にかけてやれる言葉は見つけられん……まあ、お前の事だから心配はしとらんぞ」

相変わらず無愛想な口調だ。

でも、心配してくれている。ちよつと癒された気分になった。

「……心配しなくてもいいわよ、わかってるから。ただ、まだ割り切れないでいるだけよ……」

「……旅に別れはつきもの。仕方の無い事だな……」

私は黙って頷いた。別れ自体は、仕方の無い事だと思う。

コンスタンスの性格を考えればその決断を下すのも辛かったはずだし、彼女の幸せを思えば私達から離れた方がいいに決まっている。

理屈ではわかっていても、胸のモヤモヤは消えない。

「……コンスタンスが本気なら、私には止められないよね……」

たぶん、仲間を失うというよりも親友が離れていくというのが寂しいだけなんだ。

自分のわがままで彼女を困らせたくない。

「……ごめんね、ドム。私が一番彼女を祝福しなきゃならないのにな……」

コンスタンスが自ら選んだ選択だ。

恋を選んだ彼女と、旅を選んだ私達は別れるしかないのだ。

ならば、せめて彼女の幸せを祈り、笑顔で送り出してあげなければ。コンスタンスはこれから新たな旅立ちに出るのだから……。

「……まあ、仲間が減るのは正直痛いけど、別れがあればまた出会いもあるものだ……」

ドムは空を見上げる。

「……それこそ、この星の数ほどにな……だから、くよくよするな？夜も遅いし、もう寝ろ」

ドムはそう言うのと立ち上がり、私の腕を引っ張り起きあがらせた。慰めるのが苦手なのだろう。

かける言葉が見つからなくなったドムは、私を宿まで連れ帰るとさつさとベッドに潜り込んだ。

(……ドムも意外に優しいのね……)

ドムの不器用な優しさが心に染みる。

私はその好意を受け入れて眠る事にした。

……相変わらず寝相の悪いドム。今度は私を抱き枕と勘違いしている。

抱かれた格好の私は身動きが取れなかった。

しかも全体的に身長の高いドワーフ族のドムの顔は、私の胸の位置にあったのでくすぐったくて仕方無い。

(……いくらなんでも、これはまずいわ……)

寝間着の胸元がはだけていたため、ドムの顔が直接胸に当たっている。

がっちりと抱かれているため動けないし、声を出せば皆部屋に来るだろう。

さすがにこの状況を見られたら誤解される。

特に、コンスタンスとミッシェルに見られでもしたら……。

(……まいったわね……)

そんな私とは裏腹に気持ち良さそうに寝ているドム。毎度毎度私の体を枕にするなんて、本当にその気がないのだろうか？

なんだか、わざとしている様な気がしてならない。

(……まあ、いいわ。

毎回叩き起こすのもなんだし、今日はこのまま起きるまで待とう……)

昨晚の事もあつたし、私は今回だけはその行為を許そうと思い、再び眠りについた。
彼もまた、大切な仲間だしね。

第十二話『夜の都』

ある事情により、故郷を捨ててライマー島へ来た私達。

未知なる島での冒険に胸踊らせ、旅の仲間を募るも“平和の島”と呼ばれるこの島ではなかなか共に旅する者は見つからず、仲間を探すためにライマー島最大の観光地“夜の都ルターズ”へ行く事にした。

道中、奴隷商人に連れ去られた少年・ミッシェルと出会い、話の流れでその奴隷商人を成敗する事になった私達。

中央都市ケールでその奴隷商人を追跡していたリンデン大陸の戦士達の協力もあり無事に悪者退治を終えたのだが、その後に衝撃的な事件が起こってしまった……。

それは、親友でもあり仲間でもあったコンスタンスがミッシェルといい仲になり、冒険をやめたいと言ってきたのだ！

私は複雑な気持ちになった。

しかし、彼女は私のために故郷を捨てて来てくれた。そんな彼女に危険な旅はさせられない。

私は悩んだ末に、その決意を聞き入れる事にした……。

中央都市ケールを離れた私達は、当初の目的地である“夜の都ルターズ”へ向かった。

コンスタンスはミッシェル達と共にこの島唯一の港町ローカスへ。仲間は私とドムの二人だけになった。いくら“平和の島”といっても、まったく平和というわけではない。

二人だけでは危険もあるだろう、とリンデンの戦士リリトがルターズまで同行してくれる事になった。

旅はスムーズに進んだ。

ライマー島北西部には“夜の領域”と呼ばれる年中、闇に包まれた

特殊な結界があり、魔物達の領域になっていたため野盗の類が近付かなかったからだ。

この領域に住む魔物達は、人間達相手に商売をしているので私達の様な亜人や人間達に敵意はなかった。

夜の都。ルターズはその名にふさわしいきらびやかな光に照らされた夜の街だった……。

ルターズにある酒場兼宿屋“ラン・デインの遊び場”という酒場で私達は宿をとる事になった。

なんでも、この酒場の主人ラン・デインはリリトの古い友人であり、リリトの知り合いである私達を無料で泊めてくれるというのだ。ラン・デインはルターズでは珍しい人間の店主だった。

冒険者を引退した彼は、冒険で得た莫大な財産を散財するためにこの酒場を道楽で経営しているという。贅沢な話だ。

宿を得た私達は、ルターズ最大の観光スポットでもある“ヘヴンズ・ドア”という店に足を運んだ。

そこは巨大な建物だった。

広いフロアにはいくつものステージがあり、劇をしているステージ、サーカスの公演をしているステージなど、五つのステージのある途方もないスケールの店だった。

この広さはもとも城の跡地だったためらしい。

劇をしているスペースでテーブルを囲む私達。

「……人が数え切れないほどいるわね……」

私はこれほどの娯楽施設を見た事がなかったので驚くばかりだった。

「……この店を目当てにライマー島へ渡って来るのも頷けるわ……」
人が考え得る娯楽を集めたこの店には、多くの人を引きつけるものを感じる。

ここなら、仲間が見つかるかもしれない。

「……リリトさん、ありがとう。おかげで仲間を見つけれそうだし」
わ」

任務の途中でわざわざ私達に付き合ってくれたリリトに感謝の言葉をかける。

リリトはドムと酒を酌み交わし、戦闘の話で盛り上がっていた。

「気にするでないぞよ？わらわ達は結果的にお主達から仲間を奪ってしまったのだから、ついていくのは当然である」

リリトは満面の笑みを浮かべ、酒を口にする。

「……ラナン・デインは馬鹿だが使える男じゃ。奴に聞けば仲間はずぐに見つけられるじゃろう……」

リリトはそう言って私に酌をする。グラスいっぱい酒を注ぐと飲み締めと手で飲む仕草をしてくる。

私は酒を口にして周りを見渡す。

（……期待してもいいのかな？）

この都なら、きっと仲間が見つけられる？私はそんな淡い期待を胸に今宵の宴を楽しむ事にした。

その頃。

“ラナン・デインの遊び場”に二人の冒険者がやって来た。

一人は、薄汚れたプレートメイルを身に着けた戦士。

短く切りそろえられた黄金色の髪が特徴の青年だ。

もう一人は緑色のローブを身にまとった僧侶。青い長髪の美少女。

二人とも人間だった。

「……主人、宿をとりたい。部屋は空いてるかい？」

青年は受付で本を読むラナン・デインに声を掛けた。

「……いらつしやい、相部屋でよければ空いてるよ」

ラナン・デインは読みかけの本を閉じて席を立つと二人を部屋に案内した。

「……金が出る時にいただくよ？料金は……今サービス期間中だから一泊10ゴールドでいいよ」

ラナン・デインの言葉に二人は驚いた。

何故なら、彼の提示した額がルターズにおける通常の価格の半分に

満たなかったからだ。

「……そんなに安いのか？ありがたい……では、失礼します」

二人はラナン・デインに頭を下げると部屋の中へ入っていった。

相部屋というから小さい部屋だと思ったら、なかなかの広さだった。

二人は荷物を置き、戦闘用装備から私服に着替える。

「……ねえ、ニール。ここなら新しい仲間、見つけられるかな？」

ソファーに座り櫛で髪をとかしながら鎧を磨く青年に声を掛ける。

「……どうだろうな？そればかりは酒場に行ってみないとわからないよ？」

ニールは鎧についた旅の汚れを綺麗に拭き取る。

所々に傷がついて痛んでいる。

かなりの修羅場をくぐり抜けて来たのだろう。

その傷跡がこれまでの戦いを物語っている様に見て取れた。

「……ここに来るまでかなり魔法力を使っているはず。まずは体力を回復させよう……」

ニールは少女の疲労を考慮して休息を優先させる事にした。

表情には出さないが、精神的にかなりの疲労があるはず。

ここに来るまでに魔法の使用回数が多かったから、ゆっくり休ませないといけないとニールは思った。

「……仲間は後で探そうよ？無理をしてエルに倒れられたら、俺はメイファさんに顔向けできないよ……」

ニールは鎧を壁際に並べて、今度は剣を手にする。エルはニールの優しさに頷き、静かに微笑んで見せる。

「……わかったわ。まずは休みましょう」

二人はしばし冒険を忘れ、休息に専念する事にした。

……ニールとエルの二人は、仲間を探しにルターズへやって来た。前の冒険でパーティーは壊滅、ニールとエルの二人だけが命からがら逃げ出す事ができた。

ライマー島北東部に位置するマイア神殿を目指していたニール達一行。

その旅の途中、森に迷い込んだニール達はこの島にいるはずのない“悪魔”と遭遇してしまったのだ。

何故この島に現れたかはわからなかったが、ニール達は全力で戦い“悪魔”を魔界へと追い払おうとした。

しかし、力及ばず仲間達は“悪魔”によって命を奪われた。

エルの神聖魔法が偶然“悪魔”を怯ませなかったら、二人もこの世にいなかっただろう。

二人はマイア神殿に駆け込み“悪魔”の出現を報告すると、仲間の仇討ちをするべく多くの冒険者が集まる“夜の都”ルターズへと二人きりで旅して来たのだった……。

眠る事の無いこの都に、今日もまた多くの冒険者が訪れる。
様々な理由で人々は集う。それはまるで、何者かに導かれる様にも見える……。

第十三話『求人募集作戦、再び!』

“夜の都”ルターズは、その名の通りいつまでも夜が続いている。だから店が閉まるという事もない。そのため、終わらない街とも呼ばれていた。

今、私とドムはルターズの街を歩いている。

街には冒険者や観光客で賑わい、活気に満ち溢れていた。様々な種族の者達がいる。

他ではあまりお目にかかれぬその光景を見てるだけで、この街の繁栄ぶりがうかがえた。

「……すごい数だな、魔物までいるぞ？治安は悪くないのか？」

ドムは道の真ん中を我がもの顔で歩くトロールを見て疑問の声をあげた。

「あ、ゴブリンもいる……」

たしかに魔物達があちこちにいます。まあ、この街からすれば私達の方が珍しいのだが。

「……しかし、ずっと夜というのも変な感じだな？ここに住む者達はいつたい、いつ寝ているんだ？」

ドムは首を傾げた。

この地域は“夜の領域”という結界により、いつまで経っても夜である。

闇に住む者達にとってはそれでいいのだろうが、私達からしてみれば夜が続くというのは不思議な現象としか言えず、なんだか感覚がおかしくなってくる。

「ずっと夜だから、好きな時に眠ってるんじゃないかしら？」

「……そうだな」

「気にしても仕方が無いわよ……ドム、宿に戻ろっか？リリトさんもそろそろ国に帰るし、見送りましょう」

リリトは中央都市ケールで知り合った遠く離れたリンデン大陸の戦士で、旅の途中で仲間になったミッシェルを探しにライマー島まで来ていた。

変な喋り方をする女性だが、その腕は恐ろしく立つ手練の剣士である。

彼女は、ミッシェルと恋仲になりパーティーを離れたコンスタンスの代わりにルターズまで同行してくれて今は宿で休んでいる。

その彼女もそろそろ国に帰る事になった。

「リリト殿には世話になったから……見送りだけはきちんとせねばな」

ドムは同じ戦士という事と、人間には珍しくドワーフ並の酒豪であった事から、リリトとは仲がいい。

戦いの話でも盛り上がった間柄なので、ドムも少しは寂しい思いをしているのかな？と思う。

別れはいつでも寂しいものだけど……ね。

私達は宿泊している“ラン・デインの遊び場”へ戻り、一階のサロンでリリトと別れの挨拶をした。いつの時でも別れは寂しいものだが、冒険者ゆえに仕方の無い事だ。

私達にできるのは、笑顔で見送るだけだった。

……サロンにいるのは私とドムの二人だけ。

「……パーティーっていうよりもペアって感じね？」

「そうだな。早いとこ仲間を探しに行かんな……」

「……そうね」

いつまでも、のんびりしているわけにはいかない。

冒険者として、しっかり仲間を見つけ出して旅に出よう。

私は、受付でだらけきった態度で本を読んでいるラン・デインの元へ行った。

「……マスター、その掲示板に張り紙させてもらってもいいかしら？」

私は以前“アクアブレス”という酒場で行った『求人募集作戦』を敢行する事にした。

「……ああ、構わんよ。好きに使ってくれ」

チラッと私を見たラナン・デインは、即答すると本の続きを読みはじめた。

（……内容は見ないの？）

あっけなく許可が下りた。そんな簡単でいいの？私はラナン・デインのあまりのアバウトさに少しあきれた。

まあ、掲示板を借りさせてもらえたから文句ないけど。

「……じゃあ、貼らせてもらうわね」

これでよし、っと。あと何枚か酒場で貼らせてもらえば完璧ね。

この街なら、うまく行きそうな気がする。

掲示板に求人募集の張り紙をした私は、冷めた目でこっちを見ているドムの元へ戻った。

「……またか？」

「……今度は大丈夫よ！……たぶん」

前回の失敗は繰り返さないわよ！今度は街中の酒場に張り紙するつもりでいるから。

「……ドム、この張り紙を周辺にある酒場に貼りに行くわよ！」

私は『求人募集作戦』を成功させるべく、ドムを引き連れて近くの酒場をまわり張り紙を貼りに行く事にした。

「本気で言ってるのか？」

ドムはあきれた表情で聞き返してきた。どうやら、あまり乗り気では無いみたいだ。

「……この街は冒険者の数が多いし、きっと一人や二人くらいは引かかるわよ」

根拠の無い自信を胸に言い切る私。

「仕方無いな、手伝ってやるか……」

やる気まんまんの私を見て、ドムはやれやれと重い腰をあげた。

“夜の都”ルターズは、その名に恥じない夜の街である。

よって、どっかの街と違って酒場もたくさんあった。

「……ドム、これだけ配ったんだから、一人くらい見つかるでしょう？」

大小、表通り、裏通り、周辺にあるすべての酒場に『求人募集』の張り紙を配った私達。これで見つからなかったら笑いモノにもなれない。

あとは酒場をまわれば万事解決、って事になる……と思っていたい。

宿屋に戻った私達は、疲れを癒そうと部屋に戻り一休みした。

朝？……いや、この街に“朝”なんて来ないか。

久しぶりに一人で眠る事ができた私は、隣のベッドですごい寝相で爆睡しているドムを横目に寝間着から服に着替えた。

（……さて、サロンでお茶でも飲みながら優雅に読書をしますか……）

私は魔術書を手にサロンへ降りた。

サロンといっても小さなテーブルが二つあってそれぞれにイスが三つずつ置かれた待合い所みたいなものだった。

私は受付でだれきったラナン・デインに軽く挨拶してサロンで魔術書を開いた。

（……コンスタンス……まだこの島にいるかな？）

魔術書を見ると親友の顔が浮かんでくる。

コンスタンスは魔術学校にいた時から共に魔術を学び、エルフで貴族でもあった私に普通の友達として接してくれた心優しい人間の少女。

反逆者の汚名を着せられた私の大陸逃亡について来てくれた彼女は、自分の幸せを見つけて遠く離れた大陸へ旅立った。

（……いつか会いに行くからね）

いつかコンスタンスのいるリンデン大陸へ旅立つ事を心に誓い、私は魔術書を読み始めた。

「——相席させてもらってもよろしいですか？」

「え？」

私は魔術書から目を離し、声を掛けた人を見た。
テーブルなら空いてるじゃない？私は疑問に思いつつ頷いた。

「……どうぞ」

女性だった。青い髪の少女。

「ありがとうございます」

少女は丁寧に頭を下げると私の前の席に座った。

（……冒険者かしら？）

魔術書を読みながら目の前の少女の様子をチラッと見る。

「それ、魔術書ですよ？魔術師の方ですか？」

目が合ってしまった。少女はにこにこ微笑みを浮かべ、戸惑う私に声を掛けてきた。

「……え、私？」

「他に誰もいませんよ？」

「うっ」

なんだかやりにくい子ね……。

「そうよ、魔術師よ……」

「私はエルと申します。光の女神ニルディアを信奉する僧侶です」
エルと名乗った少女は、そう言っただけで私の目を見た。

（……僧侶？まさか、求人募集の張り紙を見て来たのかしら？）
だったら、きちんと対応しないと。

「……私はマーガレット・メロウスイート。マギーでいいわ」

私は『求人募集作戦』の効果があった事に、後でドムの驚く顔が想像できて上機嫌になった。

「……エルは一人旅なの？神聖魔法は、どれくらいのレベルまで行使できるの？」

私は仲間になるであろうエルの情報を聞く。

「一人ではありませんよ。仲間が一人います。戦士です」
ふむふむ。

「……神聖魔法のレベルは、毒と麻痺を癒す事ができます」

上出来、上出来。一気に戦力強化できたわね。

「……二人パーティーねえ。私のパーティーも二人なの……組まない？戦士と魔術師よ」

いける！直感がそう告げている。私の直感は今まであまり外れた事がない。

「……いいんですか？」

エルは目を丸くして聞き返す。

「大歓迎よ！私達、仲間いなくて困ってたから」

これは自慢する事じゃないわね。

まあ、いいわ。回復役ができたのは大きい。しっかり捕まえておかなきゃ。

「……でも私達、する事があるから……協力してもらってもいいですか？」

エルは申し訳なさそうに言った。

（……何かやるべき事でもあるのかな？）

どうせ私達は特別な目的があつて旅しているわけではない。だったらエル達に付き合つても何の問題もないわね。

「……いいわよ。手を組みましょう！じゃあ、相方を連れてくるわ」
善は急げ。私は席を立てドムを叩き起こしに部屋へ戻る事にした。
エルも仲間を呼びに部屋へ行く。

（……幸先いいわ！やっぱり大きな街は違っわね）

私は嬉々として部屋に入り、ドムを叩き起こした。

「……ん？なんだ？マーガレットか……なんだ、朝か？」

ドムは寝ぼけた表情で私を見る。

「……寝ぼけてないで起きて！仲間が見つかったのよ！」

私はドムの耳元で叫んだ。

「——何！？」

それを聞いてドムは跳ね起きる。事の重大さがようやく理解できた様だ。

ドムは急いで着替えてサロンへ向かった……。

サロンにはエルと青年がいた。彼が仲間の戦士の様だ。

「……エル、仲間を連れて来たわ」

そう言つて私はテーブルに座り青年に頭を下げる。

「……はじめまして。俺はニール、戦士です」

「私はマーガレット・メロウスイート、よろしくね」

「俺はドム。戦士だ」

私達はそれぞれ軽い自己紹介をする。

「……で、エル。何をするの？」

私はエルがさつき言つてた『するべき事』を思い出したので聞いてみた。

「……そ、それは……」

「待て、俺が言う……」

ん？何か深刻な話？二人の表情が真剣なものに変わったのを見て、私は嫌な予感がした。

「……俺達のパーティーは“悪魔”にやられたんだ……」

ニールは拳を握りしめ、重々しく話を続けた……。

話によれば、旅の途中で“悪魔”に遭遇してパーティーは壊滅、エルとニールの二人だけがなんとか逃げ出す事に成功したという。

二人は“悪魔”を討ち取り、死んだ仲間の仇を討つために仲間を探していたと話してくれた。

「……お二人とも、いいのですか？相手は“悪魔”です……危険ですよ？」

エルは優しく問いかけてきた。

「……マーガレット、俺は戦うぞ」

ドムは二人の話を聞いてやる気を出していた。

相手にとつて不足無し、とでも思っているのだろうか？

まあ、私も断る理由がないから手伝うつもりだけど。

「……任せて。“悪魔”が相手でも引かないわよ」

そう言つてエルに向かって手を差し出した。

エルは私の手を握りしめる。

「……ありがとうございます」

エルとニールは深々と頭を下げてお礼の言葉を言った。

「お礼は“悪魔”を討ち取ってからにしてくれ……」

ドムはぶっきらぼうに言い放った。きつと照れているのだろう。

……何はともあれ、これで冒険ができる。“悪魔”の討伐か……相手に不足は無い。

僧侶のエルに戦士のニール、それに私とドムの四人。

“悪魔”を相手にするには、ちよつと戦力不足かな？

まだ出発はしない様なので、それまでにもう何人か仲間を見つけられ
ばいいだろう。

この街は広い。

“悪魔”と戦おうとする強者もいるはず。

『求人募集作戦』の効果を信じて仲間を待とうと思う……。

第十四話『作戦会議?』

“悪魔退治”……まさか、この島で悪魔討伐をしようとは……。

エル達と一旦別れて部屋に戻った私は、悪魔に関する資料がないか調べた。

一言で悪魔といっても、その強さは様々だ。

まあ、冒険者の手に余るのがほとんどなだけだ。

エル達の話では冒険者パーティーを全滅させるだけの力を持っているとの事。

つまり、今の戦力では到底かなわぬと言えよう。

(……前線で戦う戦士は少なくとも五人は欲しい。

魔法の使い手だってあと二、三人いなければ……)

私は頭が痛くなってきた。

せめてエル達が遭遇した悪魔の種類でもわかれば、もうちょっと対策も練れるのが……。

下級悪魔なら必ず何かしらの弱点があるので遭遇してからでも対応できる。

だが、それ以上の悪魔だった場合は前もって十分な対策を練って挑まなければ手痛いしっぺ返し——平たく言えば全滅——という結果につながる。

私は過去に悪魔狩りに同行した事があるが、その時は歴戦の冒険者達にしっかり守られながら戦ったのだ。

その時ですら充分対策を練って作戦にあたったのだから、今回の悪魔討伐は無謀という以外表現できない。

(……ラナン・デインに、頼ってみようかなあ……)

リットさんいわく『馬鹿だが使える男』というくらいだから、何かしらの情報が得られるかもしれない。

私は意を決してラナン・デインの元へ向った……。

「——酒場に手配しておこう。それで良いかな？ エルフの魔女よ」
ラン・デインはさも興味無さげにそう言つと読みかけの本に目を移した。

「……ありがとう。でも、悪魔退治の報酬は出せないの。集まつてくれるかなあ？」

果たして報酬無しで危険な戦いに臨む者がいるだろうか？ たしかに悪魔殺し“デビルバスター”の称号は名誉だ。

しかし、観光目当ての冒険者が多いこの街で危険を侵して名誉を得ようとする者がいるとは正直思えない。私はあまり期待できそうもない気がしてならなかった。

ラン・デインにお礼を言つてサロンへ寄るとエル達が話していた。二人は神妙な顔で口論している。

「——ニール、もっと冷静になつて」

「俺は冷静だよ。エル、君は仲間の仇を討ちたくないのかい？」

「……何を言つてるの？ 私は時期尚早と言つてるのよ。たった四人であの悪魔は倒せないでしょ？ 私達の都合でマーガレットさん達に迷惑はかけられないわ」

エルとニールは私に気付かないほど熱い討論を繰り広げている。

「——だが他にあてになる者なんていないじゃないか！ エル、俺達にそれだけの余裕はないんだよ？ だから今の戦力で戦うしかないんだよ！」

ニールはテーブルを強く叩き声を荒げた。

「無謀だわ！」

エルも負けじと反論する。

（……二人で決めない、決めない）

私は二人のところへ行くとテーブルを思いきり強く叩いた。

二人は不意を突かれた格好で私の方に振り返った。

「はい、そこまで。ラン・デインに無報酬で悪魔と戦う冒険者を探す様に頼んだから、痴話喧嘩は結果が出た後でやってちょうだい」

私の言葉にきよとした顔をする二人。どうやら理解できたみたい。

「……ニール、あなたの気持ちはわかるわ。でも、無駄に命を散らす事はないと思う。今は喧嘩してる場合じゃないの。少しでも対策を練らないと無駄死によ？」

ニールは言い返す言葉が見つからずに低く唸るだけだった。

熱くなつては作戦なんて立てられないのだ。

「……しかし、どうやってあの悪魔と戦えばいいんだ？……剣では傷付かないし、魔法もたいして効果が無い……」

ニールはうなだれる様に頭を抱える。エルも俯き加減に頷くだけだった。

「なんですって？」

(……魔法しか効かない悪魔って……もしかして、あの……)

私はゾツとした。血の気が引いていくのを感じる。

私は知っている。

おそらく、それは俗にいう“霧の悪魔”と呼ばれる悪魔ではないだろうか。

「……その悪魔って、霧状になって斬撃をかわしたりしない？」

私は恐る恐る聞いてみた。

「え？そ、そうだけど……マーガレットさん、その悪魔を知ってるの？」

エルは驚きの表情で聞いてくる。私は、静かに頷いた。

“霧の悪魔”……ミストデーモンとも呼ばれるこの悪魔は、己の肉体を霧に変えて斬撃をかわし、その霧で敵を包み込み生命力を吸収するという恐ろしい能力を持っている。

しかも魔法に対する耐性も強く、生半可な魔法ではとても致命傷を与える事はできない。

吸収の能力があるので短期決戦で臨まないと倒しきる事ができない中級クラスの悪魔である。

少なくとも四人ではまず勝ち目がない。

実体があつて無い存在、それが今回の相手なのだ。

私は思わず天を仰いだ。

「——無理！あなた達が相手したのは“霧の悪魔”という凶悪な悪魔よ。魔法の使い手が足りないわ。四人で行ったら無駄死によ」
私はきつぱりと言い切った。二人は苦渋の表情に変わる。

「……はつきり言つてあなた達が生きていられたのは奇跡ね。エル
の魔法が偶然“霧の悪魔”を怯ませなかったら、今頃あなた達は悪
魔の胃袋の中よ」

二人が生きているのは奇跡に他ならない。

悪魔との遭遇はまさに生か死の二つに一つなのだ。

「……剣の通じない相手ではドムやニールは盾にしかないわ。
倒すなら魔法の使い手を探さないと……」

私は誰に言うでもなく呟いた。

私の魔法力では“霧の悪魔”に致命傷を与える事はできない。

ドムとニールの剣に魔力付加の魔法をかけても威力が弱いので結局
二人の技量次第。

冷静に考えて“霧の悪魔”の特殊能力を防ぎつつダメージを与える
のは至難の技だろう。

悪魔戦において一番頼りになる神聖魔法の使い手エルの魔法力だが、
これもあまり期待できないと思う。

もし通用したとしても倒しきるには決定力に欠ける。

つまり今の戦力ではとても太刀打ちできる相手では無いのだ。

やはり魔法の使い手を仲間にして戦うしか方法は無い。

私は二人にその事を伝える。

私が以前悪魔と戦った経験がある事を告げると素直に耳を傾けてく
れた。

ドムにも話をしなければ。私はまだ夢の中にいるドムを起こしに部
屋に戻った。

「ふむ、“霧の悪魔”か……マーガレットの魔法で剣に魔力を宿し

てもらっても、苦戦は免れないな……」

ドムは剣の通じない相手だと知り低く唸った。

「……仲間を募るしかあるまい。それも魔法の使い手でないといけないな……」

「そうね。魔法の……できれば神聖魔法の使い手があと一人でもいればねえ……」

サロンに集まり対策を検討する四人。

そもそも検討も何も戦力が足りないので愚痴にしかない。

酒場に求人募集の張り紙をしているので、今の時点では神聖魔法の使い手が来てくれるのを期待するしかなかった。

ラナン・デインにも頼んでいるが未だに返事がないので期待薄だろう……。

「このままサロンに居てもラチが開かない……」
聞きに徹していたニールが口を開く。

「……酒場に行つて仲間を募ろう」

「そうしましょう。直接交渉した方が早いですね……」

エルはニールの言葉に頷き立ち上がる。

このままサロンに居てもしょうがない。私達は宿を出て酒場で仲間を募る事にした……。

第十五話『ルターズの冒険者達』

ニール達のパーティーを壊滅させた“霧の悪魔”を倒すため、仲間を求めて酒場へ来た私達。

幸いパーティー募集の求人募集の張り紙を各酒場に張り出していたので、酒場の主人に結果報告を聞いてまわるだけで済むのだが、そう簡単に仲間が見つければ苦労などしなくていい。

つまり、結果は思わしくなかったわけで……。

「……やっぱり観光目当ての冒険者しかいないって事ね……」

テーブルを囲み食事をしながら辺りを見渡す。

冒険者ばかりが目に入る。

だが彼等はこの街に冒険に来たわけじゃない。

ライマー島最大の観光地である“夜の都”を楽しむために来ている。いくら名誉ある“デビルバスター”の称号を得る機会があっても、観光に来てわざわざ危険を犯そうなんて思う者はいないって事。

見た目はなかなかの冒険者が揃っているだけに余計に齒がゆい思いに駆られる。

「……確かに、この街に来て危険を犯そうとする輩はいないな……」
酒場で馬鹿騒ぎしている冒険者達を一瞥して酒を飲むドム。

これでもか！というくらいに娯楽施設の揃った“夜の都”は冒険者の欲望を満たして止まない。

ここに来る冒険者達の大半は、日頃の危険を忘れるために娯楽に興じるのだから彼等を責める事はできないが……。

「……困りましたね？マーガレットさん、どうしましょうか？」

困り果てた表情でエルは冒険者達を見る。

意気込んで酒場に乗り込んだはいいものの、冒険者達のあきれる程の弾けつぷりに声を掛け損ねた私達は食事をしていた。

まだ一件目だし、ゆっくりまわっても特に問題は無い……いや、ど

こもこの酒場と同じだと思うとなかなか腰が浮かなかったのだ……。この街には冒険者ギルドが無いので酒場しか仲間を仲介してくれる所が無い。よって今私達に出来る事は無い。

（……ラナン・デインの話だと何件か冒険者の酒場がある、って聞いたんだけどなあ……）

宿を出る時にラナン・デインに『冒険したい人達が集まる酒場』を聞いてここに来たのだが……。

（……まさか、ガセ？いや、まだ何件かあるから根気良く探すしかないかあ……）

この街は常時“夜”なので酒場の数が多い。店の閉まる時間がバラバラなので、それなりの店舗数がないと観光客が回転しないのだ。だから店によって集まる客層が偏る、とラナン・デインは言っていた。

（……ここにいる人達は明らかに観光目当てよね……）

一件目は、見事にハズレってわけだ。

「——次はどの酒場に行こうか？」

賑やかな雰囲気落ち着かないのか、ニールは料理に手を付けずにそわそわしていた。焦っているのだろうか？

「ニール、焦っても仲間は見つからないわ。少し落ち着いて……」そう言っただけから見ていて焦りまくっているニールの手を優しく握るエル。

ニールはその優しさに落ち着きを取り戻したのか、エルに微笑みかけると料理に手を付け始めた。

「——さて、飯も食ったし次の酒場へ行くか」

グラスに残った酒を飲み干し、ドムは立ち上がった。いつまでも酒場でまったりしてるわけにはいかない。

私達はカウンターでコップを磨くマスターに挨拶して次の酒場へ向かった……。

次に訪れた酒場は“純真なる風来坊”という一見すると意味不明な

名前の酒場だった。

中に入ると数えるくらいしか客がいなかった。

カウンターにはコップを磨くマスターとトロールの男女が一人ずつ、入り口から見て左奥のテーブルには人間の女性が一人、その反対側のテーブルには人間の男性とリザードマンの男性？、それにエルフ……いや、雰囲気からしてハーフェルフかな？の女性がいるだけだった。

ただ、他の酒場にいる冒険者達とは明らかに雰囲気が違った。

（……当たり前、かな？）

身にまとったオーラの違いを感じる。

妙に緊迫感がある冒険者独特の雰囲気。

私達が店に入った途端、店内の視線が一斉に集まった。

その中でマスターは私の姿を確認すると手招きしてきた……。

「——いいところに来たな。そこに求人募集を見て来た冒険者がいるぞ」

マスターは声を掛け人間の女性を指さした。

その声に反応した女性が私に頭を下げてくる。

私は初めて『求人募集作戦』が成功した事に内心狂喜乱舞した。

「——はじめまして、私がマーガレット・メロウスイートです」

足早に女性のいるテーブルへ行き挨拶をする私。喜びが隠しきれない。自然に笑顔になっていた。

「……はじめまして、私はメイユール。マイア神殿に仕える神官戦士です」

メイユールと名乗った女性は丁寧に頭を下げてきた。

格好は戦士のそれだが、神に仕える身だからか、後ろの壁に立て掛けられた武器は棒の様な形状をしていた。

（変な武器ね？あんなんで戦えるのかしら？）

初めて見る武器に私は一瞬不安になった。

私は戦士ではないので武器の種類がどれだけあるのかも、どの武器がどういう効果があるのかも知らないけど、その棒状の武器はとて

も殺傷力があるとは思えなかった。

（……まあ、見た目で判断しちやいけないよね……）

神官戦士というくらいだから神聖魔法の使い手だし、戒律によって携帯できる武器に制限があるかもしれない。

本来、神官戦士といわれる者は冒険者になったりしないし、彼等の装備なんて理解できるわけもない。

「……マーガレットさん？いかなさいました？」

「えっ？」

不意に声を掛けられ、私は我に返る。

悪い癖が出た、わからない事に出くわすとい考え込んでしまう。

まだ仲間の自己紹介も済んでないのに……私は内心反省しつつ、メイユールに仲間を紹介した。

「よろしく願います」

みんなにも丁寧な頭を下げて挨拶をする。やはり神に仕える者は礼儀正しい。

私はさっそく彼女にこれからの冒険について話を切り出した。

「……というわけなの。メイユール、協力してくれる？」

メイユールは“霧の悪魔”の話を静かに聞いていた。

時折、眉をひそめたり目を見開いたりしていたが恐れている風には見えなかった。

一通り話し終わるとメイユールは天に召されたニールの仲間達の冥福を祈った。

「——もちろん協力いたしますわ。いかなる悪も見過ごす事はできません」

祈りをすませたメイユールは静かに、だが力強い口調で答える。

「……ありがとうございます」

ニールとエルはメイユールに握手して感謝の言葉を掛けた。神聖魔法の使い手が仲間になった事に素直に喜んでいる。

今回の冒険は彼等の仲間の仇討ちなのだからその喜びは大きかった。

「——その話、俺達にも囁かせてもらえないか？」

背後から声が掛かる。

振り向くとメイユールの反対側にいた三人組の一人、人間の男が立っていた。

「俺達もその悪魔退治に加えてくれよ？」

男は不敵な笑みを浮かべながら口を開いた。

「——盗み聞きしてすまないが、君達だけでは心許ないだろう？俺達もそろそろ冒険に出ようと思ってたところだし“悪魔殺し”の称号が得られるなら、危険を侵す価値はありそうだ。魔法も使えるし、腕も立つ。我々を仲間に加えてはどうだろうか？」

男はそう言って仲間を指さし自分達を売り込んできた。

男は戦士で魔法も多少使えるという。

リザードマンの男は怪力の持ち主で魔法剣を振るう戦士だしハーフエルフの女性は僧侶だという。

“霧の悪魔”と戦うにこれだけの人材が集まれば、たしかに戦闘を有利に進められるだろう。

私はニールとエルの顔を見た。

決めるのは彼等だ。彼等は私の視線に気付くと小さく頷いた。

「……わかったわ。でも、私達は報酬は出せないの。それでもいいかしら？」

私は男達の顔を見回す。

相手は冒険者、無報酬で雇われる可能性は低い。

しかし“悪魔殺し”の称号に惹かれた様なので期待出来そうだった。

「——ああ、いいぜ。金には困ってないからな。称号目当てだから別にかまわないよ」

男は手を差し出してきた。

(……交渉成立ね)

その手を握り返す。交渉成立だ。

これで戦力的な問題は解決した。あとは作戦を立てて“悪魔”の住処に乗り込むだけだ。

首尾よく仲間を見つけた私達は、この場は一旦解散して後日この酒場に集まる事にした。

いろいろ準備しなければならぬのですぐには出発できないからだ。装備もそうだが、対悪魔戦の戦術を考えなければならぬ。

特に魔法の使い方ひとつで戦闘内容が大きく変わる。

同じ宿に住む私とエル、それにまだ宿を決めてなかったメイユールは魔法の連携について時間をかけて話し合った。

それでも万全とは言えない。

……星が瞬く夜の都。

旅立ち前の私達を喧噪が包む。高鳴る鼓動を抑え、出発の“朝”を迎える……。

第十六話『悪魔退治く出発！』

“夜の都”ルターズに朝は来ない。

それは“夜の領域”と呼ばれる特殊な結界のためだ。

この結界の存在のおかげで闇に生きる種族は争う事なく領土を獲得した。

この“夜の領域”の中で生きる彼等は『街』を造り『文化』を得た。彼等は人間達と敵対するよりも文化交流を行う事の方が繁栄できる事に気付き、人間達の想像を遙かに越えた娯楽街を築き上げた。

“夜の都”……明ける事のない闇の街を八人の旅人が隊を組んで歩いていた。

どう見ても隊商には見えない。

見るからに冒険者風の集団である。

前を歩くは四人の男。

各々鎧を身にまとい腰に剣を吊している。

人間二人にリザードマンとドワーフが一人ずつ。見た目からして彼等は戦士だろう。

彼等の後ろを歩く四人は皆、女性だった。

人間とエルフが二人ずつ。

いや、エルフのうちの一人は微妙に違っていた。

人間とエルフ、両方の特徴が伺える。おそらくハーフエルフだろう。彼等は北へ向かっていた。“霧の悪魔”と呼ばれる魔物を倒すために――。

目的地は北。ニールとエルの話では“霧の悪魔”は北の森にいます。

ただ森といっても大小問わなければ、数え切れない程点在している。まあ、“霧の悪魔”が生息しているなら居場所など妖気ですぐにわ

かるのだが。

私達は“霧の悪魔”を探すため道から逸れて森の中を歩いていた。前を歩く戦士達が草木をかき分け、私達でも通れる道をつくる。森の中では道がほとんどないので、少し広めにかき分けていた。気を張り巡らし辺りを見渡す。

「……妖気は感じないわねえ」

私は周りに集中しながら危険がないことを皆に伝えた。

“霧の悪魔”という悪魔によってニール達は仲間を失ってしまった。この“平和の島”と呼ばれるライマー島に悪魔がいること自体珍しいのだが、彼等は運悪く遭遇してしまいパーティーは壊滅した。

幸いニールとエルの二人は命からがら逃げる事に成功し、仇討ちのために“夜の都”ルターズに仲間を探しに来たのだった。

そこで私達―私とドム―に出会い、さらに『求人募集作戦』のおかげで悪魔討伐の仲間を増やす事ができて今回の旅となったわけだ。

「……“霧の悪魔”は悪魔の中でも中級クラス。妖気を感じなくても油断は禁物よ」

みんなには前もって“霧の悪魔”について説明している。

その名の通り“霧の悪魔”は自身を霧に変える事ができる。

たちの悪い事に霧状になった“霧の悪魔”は妖気が弱く探知しにくかった。

しかもこのパーティーの中で“霧の悪魔”と戦った者がいない。私も過去に下級クラスの悪魔と戦っただけであまり詳しくなかった。

「――マギーさんよ、このまま進んでいいのかい？」

ルターズの酒場“純真なる風来坊”で知り合った戦士・ガンツェルは、剣で目の前の草木を払いながら言った。

「この場所じゃ満足に剣が振れないぜ？」

たしかに草木が生い茂る森の中では敵と遭遇した際、戦闘に支障をきたす恐れがある。

だが他に情報がないのでニール達の証言―森で遭遇―をあてにするしかなかった。

ちなみに“純真なる風来坊”では戦士のガンツェルの他にリザードマンの戦士・ヘイグとハーフェルフの女僧侶・プラナ、神官戦士・メイユールが仲間になった。

その中でメイユールは『求人募集作戦』で私達の仲間に、ガンツェル達は“悪魔殺し”の称号目当てに一時的に仲間になってくれる。

つまり、このパーティーは“霧の悪魔”を倒すまでの即席パーティーと言えた。

息の合った連携が取れるかは微妙だが、ガンツェル達は冒険慣れしている様だし、メイユールは神官戦士だ。

ニールやエルは敗れたとはいえ“霧の悪魔”と戦っているし、ドムもどちらかと言えば強い部類に入る。

余程の事がなければあっさり全滅、という事態にはならないと思う。

「……大丈夫よ。“霧の悪魔”クラスの妖気なら、距離が離れてても感知できるから」

“霧の悪魔”は生命力を吸収するために霧状になるので、妖気の放出が大きく魔法を使わなくても容易に感知する事ができる。

よって、魔法の使い手が多いこのパーティーを“霧の悪魔”が奇襲する事はまずないと言っている。

ただ問題はいつ現れるか。気の抜けない時間は続く。

悪魔退治の冒険に出て最初の夜。

警戒しながらの旅だったので、思ったより距離は進んでいなかった。更地状態の場所を見つけた私達は枝を集め火を起こした。

森の中には獣がいる。獣避けのため絶えず火をつけておかなければならなかった。

「……今夜は出そうもないな。移動してるのか？」

携帯食を口にしながらガンツェルが話しかけてきた。

気の抜けない行軍により疲れてるのだろう。その表情は厳しかった。「その可能性は高いわね。ひとつの場所に落ち着いてとは思えな

いわ。餌を求めて森の中を徘徊してると思う」

私はみんなを囲む様に簡易結界をつくる添え木を地面に挿しながら答える。結界自体の効果は低いものの、魔の力を弱めてくれるので万が一戦闘になっても多少はダメージを軽減してくれるはず。

だが、その効果の割に手間がかかるので、こんな時でないとこの結界が使えないのが難点だ。

「……相手は悪魔、夜の方が出くわす確率が高いだろう。気を引き締めておかねばな……」

ドムはそう言っただけに置いた剣をいつでも抜ける様に手元へ寄せた。ドワーフ族は疲れ知らずなのか、その表情に疲れは見えない。

逆に強敵との遭遇に気合い充分、といった感じである。

「……そうですね。俺達が遭遇したのも夜だった……」

以前“霧の悪魔”と戦ったニールは緊張した面持ちで辺りを見回す。剣はいつでも抜ける様に腰に差している。前回の経験を生かしているのだろうか？

エルやメイユール、プラナもそれぞれの術を使い奇襲に備えている。まだ初日だから万全の態勢で一夜を明かすつもりなのだろう。

……夜は闇の勢力に力を与える。

相手は“霧の悪魔”だ。

私達、人間や亜人族の様に光無き領域で力が衰える事はない。

気の抜けない夜はまだ始まったばかりだ……。

第十七話『悪魔退治と遭遇』

“霧の悪魔”退治の最初の夜は、幸い何事も無く朝を迎える事ができた。

“夜の都”に居たせいか、陽の光が少し眩しく感じられる。それでも森の中は若干薄暗いけど。

ちなみに緊張からか皆眠りが浅く、見張りの交代があまり意味を成さなかった。

まあ、戦う相手の危険度を考えれば、それも仕方が無いと思う。

朝早くから森の中を搜索するが“霧の悪魔”らしき妖気はいまだに感知できない。

入ってみてわかった事だが、地図で見えるよりもこの森は広がった。ニール達の話によれば、この森は盗賊などの隠れ家にもなっているそうだ。

この広さだ、人の通れる場所が限られているし身を隠すには最適であると言える。

……鬱蒼とした木々の間を木漏れ日が差し込む。

耳をすませば風の声が聞こえる。

風を通して精霊達の戸惑いを感じた。突如、妖気が満ちてくる――。

「……精霊達がざわめいてる！気をつけて！」

このパーティーでもう一人のエルフ、プラナが警告を発した。

戦士達は剣を抜き辺りを見渡す。

私もすかさずドムとニールの剣に魔力付与の魔法をかける。

四方に目を向けるが敵の姿は一向に見えない。だが、妖気は強さを増していく……。

（――どこ！？近くまで来てるのに、霧すら見えない！……もし

や！？)

その瞬間、地面から霧が吹き出してきた！

「——ぐおおおお！」

一瞬にしてドムが霧に包まれる……敵は待ち伏せていたのだ！

霧状のうちは武器によるダメージは期待できない。

魔法、しかも強力な呪文でなくては“霧の悪魔”にはダメージを与えられない。

しかし、このまま呪文を唱えたら……ドムが巻き添えになる。一瞬の迷いが、戦況を一変させた。

ダメージを受けながらも脱出したドムは倒れ込む様に霧から離れる。生命力を吸収した霧が一点に集まり“人型”になる。

……“霧の悪魔”だ。

“霧の悪魔”は一回で吸収しきれない程生命力の強いドムに近付く。ニールとガンツェルは人型に変わった瞬間に斬りつける。

だが素手で払われ思う様にダメージを与えられない。

ヘイグは剣を構えると気を集中させ隙を伺う。

メイユールはドムの元へ走り庇う様に武器を構える。

エルとプラナはドムに回復魔法をかけた。

反応が遅れたが私も魔法で援護する。

「——灼熱の光よ、閃光となりて敵を打ち抜け！」

呪文を唱えると何もない空間に赤い光が発生する。

光は一点に収束すると“霧の悪魔”めがけて一筋の線を描いた。

霧は熱に弱いはず。

赤い光が命中し“霧の悪魔”の動きが一瞬止まる。

ニールとガンツェルはドムと敵の間に踊り出て剣を振るった。

“霧の悪魔”は二人を向かえ討とうと無造作に前へ出た瞬間、ヘイグの気合いの一撃を不意打ちのかたちでまともに受けて二人の攻撃にさらされた。

ダメージはあった様だ。

二人の攻めに押された“霧の悪魔”は、斬りつけられながらも後ろ

に跳躍し距離を取る。

そして身の毛がよだつ声で吠えると魔力が凝縮していくのを感じた！

「魔法を発動させちゃいけない！——間に合わない！魔法がくる！」

だが、みんなが反応するよりも早く“霧の悪魔”の魔法は完成した。ちょうど固まっていた私達めがけて火球が飛んでくる！防御する暇もなく火球は爆発し私達は吹き飛ばされた……。

態勢を整える間もなく“霧の悪魔”は両手に魔力を凝縮させ、それぞれの魔弾を私達に放つ！

一発はエル達のいる後方へ。もう一発はニール達へ放たれる。

「——きゃあああつつつ！！！」

悲鳴が上がる。近距離の爆発にエルとプラナは耐えきれずに吹き飛ばぶ。

私とメイユールはなんとか持ちこたえたがダメージが深く、すぐに攻撃に移る事ができなかった。

もうひとつの魔弾がニール達の目の前で爆発した！至近距離にいたニールとガンツェルは吹き飛ばされ、ヘイグとドムも大打撃を受ける。

……“霧の悪魔”の実力を誤った。

まさか呪文詠唱なしで、魔力を凝縮するだけで魔法が放てるなんて

——奇襲され戦略も何もない私達では、この悪魔にはかなわない！

それでもこの場をどうにかしなければ、私達は全滅してしまう。私は気力を振り絞り魔力を集中させた。

「——魔に魅入られし風のざわめきよ！真空の刃となりて汝が敵を切り裂け！」

“霧の悪魔”の目の前で風が爆発的に吹き出る。

たいしたダメージは与えられないが防御の構えを取り魔力収束が途切れた。私は続けざまに呪文を唱える。

「——うわあああつつつ！！！！我、マーガレット・メロウスイー
トが召喚す！ルーン＝マナスの名において……邪を払い、魔を退け

る光の使徒よ！……………汝が業敵を打ち払い、神の威光を轟かせよ！」
拡散してゆく体内の魔力を一点に集め、足りない分を生命力で補い
高位の精霊《暁の戦士》を召喚した。

限界に近い魔力で魔法を使ったため体中に激痛が走る。
意識が飛びそうになるのを堪え召喚の印をきる。

“霧の悪魔”の目の前に光が現れ、人の形に収束した。光の精霊《
暁の戦士》だ。

《暁の戦士》は業敵である“霧の悪魔”の姿を目で捉えると、光の
剣で悪魔に斬りつけた。私は《暁の戦士》の召喚に成功した事で、
撤退すべく周りに向かって叫んだ。

「……………撤退よ！態勢を整えなきゃ勝てないわ！この場から逃げて！」
みんなにきちんと声が届いたかわからなかった。
叫んだ直後、頭に割れる様な激痛が襲い、私の意識は途絶えてしま
ったのだ……………。

鋭い痛みで私は意識を取り戻した。体中が鉛の様に重く、指一本も
動かなかった。

（……………私は……………生きている？）
周りは暗かったがここは森の中だった。剣戟の音も何も聞こえない。
たしか、精霊を召喚して撤退を呼び掛けたはず。みんなは無事だろ
うか？

意識は取り戻したものの身動きひとつできない状態だったので、周
りに誰かいるのかすらわからなかった。
せめて、仲間の安否だけでも知りたい……………。

（……………無理矢理魔力を集めたせいか、感覚が麻痺している……………）
今の私は五感のうち視覚しか正常に機能していない。
耳をすましても、森にいる精霊の声すら聞こえない。地面に触れて
いる事すら感じなかった。

（……………ここは戦闘場所じゃないから、誰かが私を避難させてくれた
はず……………）

状態が状態なだけに仲間が来るまでおとなしくしているしかない。それにしても“霧の悪魔”の実力は想像以上に凄まじかった。

呪文なしであれだけの威力の魔法を行使するとは思わなかった。持てるすべての魔力を使っても“霧の悪魔”に致命的なダメージを与えたとは正直思えない。敵はまだ森の中をさまよっているはず。次に遭遇するまでに早急に戦略を立てなければならぬ。

魔法の使い手のバランスも悪い。

魔法の撃ち合いになった場合、呪文詠唱なしで強力な魔法を使う“霧の悪魔”に時間のかかる神聖魔法は使えない。

“霧の悪魔”に対して呪文詠唱に時間のかかる神聖魔法よりも、速効性の魔術の方が戦闘に有利だという事がわかった。

(……でも私の魔法力では時間稼ぎにすらならないわね……)
次に遭遇しても、さっきの様な魔法の連続詠唱はできない。
それ以前に魔法力が回復しない事には足手まといもならないけど……。

「……………!？」

視界の死角から火の明かりが灯る。

誰かが火を起こしたのだろう。

空気の揺らぎを感じ、仲間の“誰か”がいる事がわかった。

「……………!？」

“誰か”が話しかけている様だ。だが、いまだに体の異常が治らない私には、その言葉の意味もわからなかったし返事を返す事もできなかった。

火の明かりが木々を照らす――。

私の感覚はとことんおかしくなっていた様だ。

夜になっていた事さえ、今の今まで気付かなかった……。

ようやく私の異常に気付いたのか、仲間の“誰か”が私の視界に入ってきた。

……メイユールだ。

先程の戦闘であまりダメージを受けなかったのか、思ったより軽傷

みたいだった。

身につけた皮鎧の一部に焦げの跡がついていたが、見た感じの足取りは軽い印象を覚えた。

メイユールは私の目の前に屈むと目を閉じて呪文を唱えた。

柔らかい光が私の体を包み込み、じわじわと暖かい感覚が染みいてく……。

「……あ……ああ、メイ……ユール……」

私は振り絞る様に声を出した。

でも、まだ感覚が戻っただけなので、まともに喋る事ができなかった。

「——ま——無理——で下さ——」

メイユールの声が断片的に聞こえ始めた。

半分も聞き取れなかったが言いたい事はだいたいわかった。

まだ無理はするな、とでも言っているのだろう。

私はまだ自由の利かない体を動かし頷いてみせた。

メイユールは私の髪をさすり微笑みを向ける。

私の状態が理解できたのか、メイユールはゆっくりと口を動かし、

私が倒れた後からの経過を伝えた。

私が召喚した《暁の戦士》が“霧の悪魔”と戦っている間に、みんなはバラバラに森の奥へ散っていったという。

なんでも《暁の戦士》と“霧の悪魔”に遮られる形になってしまった上に、移動できるだけの体力もなかったので仕方が無かった。

その時メイユールは私の近くにいたので、気を失った私を抱えて森の奥へ走っていったそうだ。

比較的軽傷だったし私を見捨てる事もできなかったという。

なんでも私の体重が軽かったおかげで遠くまで走りきる事ができたらしい……。

そして、とりあえず湖があるところまで来て現在に到るとの事だった。

途中、何度も首を振り聞き返しながら話を聞いた私は、現状の厳しさを知り顔をしかめてしまう。

（……よりによってパーティーがバラバラになるなんて……個々撃破される危険が出てきたわね……）

“霧の悪魔”の魔法力を考えれば、傷ついた今のパーティーではとても逃げきる事はできない。前衛の戦士達はもちろんの事、エルやプラナも重傷のはずだ。

まさか《暁の戦士》に倒された、なんて事は無いだろう。

いくら高位の精霊とはいえ、召喚者の私が気絶したのでは長くは戦えなかったはず。

たとえ私が五体満足でも、あの強大な魔法力を持った“霧の悪魔”相手では部が悪過ぎる。

……少しずつ体の異常が治っていった。

体力や傷などはメイユールの回復魔法でかなり癒されている。

今の状態は魔法力の使い過ぎによるものだ。

ずっと横になっていたおかげで少しずつ魔法力が回復している。

まだ話す事はできなかったが、聴覚の異常はだいぶん治まった。

「……あまり意味はありませんが結果を張っておきました。獣などは近寄って来ませんので、そのまま横になって下さい……」

メイユールは携帯食を出して私に食べさせてくれる。

だがお互いに食欲が出なかったので、すぐに食事を終わらせるとひたすら体力を回復させる事に専念した。

……予想では今夜は“霧の悪魔”はもう現れないだろう。

ドムの生命力をかなり吸収したし、戦闘により“負の思念”――悪魔は憎しみや殺意を己の力に変換できる――も得たはず。

それに闇の力が上がる夜になった事もある意味幸いと言える。だから無理して追っては来ないだろう。

来るなら朝になってからだ。

それまでになんとか魔法力を回復させておかねばならない。

次に“霧の悪魔”と遭遇してしまったら、やはり私が囧になってエルやメイユール達の神聖魔法に期待するしかない。

パーティーがバラバラになって作戦も立てられないから仕方の無い事だ。

それが“霧の悪魔”の魔法力を見誤った私にできる……いや、私にしかない役目だから――。

第十七話『悪魔退治と遭遇』(後書き)

18話目にして初めてまともに魔法を使ったマギー。今まで使ってなかったのに、今回は気合いを入れて唱えまくってます(笑)補足ですがマギーは魔術師としての実力は中級より少し上のレベルです。そこらへんの話はそのうち物語で明らかになると思います。……それにしてもマギー達は“霧の悪魔”を倒す事ができるのでしょうか?話の流れで展開が少しずつ変わってきてるので作者にもわかりません(無責任だぞ!)まだまだ未熟なので勘弁して下さいm(――)m

第十八話『悪魔退治く激闘！』』

“霧の悪魔”の奇襲攻撃によって、パーティーはバラバラになった。だが、マーガレットの召喚魔法のおかげで被害はダメージだけなんです。

しかし“霧の悪魔”の魔法弾を受けて彼等は深刻な状態にあった……。

「……エル、ニールの傷はどうだ？動ける様になるか？」

切り株に腰かけたドムは、相変わらずぶつきらばうにエルに声をかけた。

エルはドムの問いに答えず一心不乱に呪文を唱え続けている。

その表情から想像するとニールの容態はかなり深刻に見えた。

何せ“霧の悪魔”の魔法弾を無防備にくらってしまったのだから、外傷はもとより体内のダメージは相当なものに違いない。

同じく至近距離で魔法弾をくらったガンツエルと言えば、とっさに身を引き防御態勢を取ったので外傷だけで済んでいた。

それでも両腕の痺れが取れず、思う様に剣を振るう事はできなかった。

この四人は森の中へ脱出した際に合流した。

ニールの鎧に施した加護の魔法の力を感知したエルと一緒に脱出したガンツエルと搜索し、ニールを抱えたドムを発見、その後行動を共にしている。

合流した後は休める場所を確保し、エルの神聖魔法でドムとガンツエルは体力を回復、ニールだけが今も呪文による治療が続いている。“霧の悪魔”に大量に生命力を奪われたドムは体に気だるさが残ってはいるが、霧から脱出した際にパーティーから距離が離れていたため“霧の悪魔”の魔法を直接くわらずに済み、見た目から言えばたいした外傷はなかった。

ドワーフ族の体質なのか、はたまたドムが特殊なのか？普通なら一度に大量の生命力を失ったら動く事はおろか、声を発する事もできない状態になる。

ところがドムは魔法によって体力がほぼ回復していた。

ドム達はニールの回復を待つて他の仲間を探しに行く事を決め、戦いで疲弊した体を休ませる事にした……。

……森の中で走る影が二つあった。

後ろからは複数の影がちらほら見える。

逃げる二人に追う影――。

ヘイグとプラナの二人は“霧の悪魔”から逃げた後、近くで合流し身を休める場所を求めさまよっていた。

ところが運悪く盗賊団に遭遇してしまい、身を休めるどころか命を狙われ逃亡を余儀なくされた。

普段なら集団とはいえ盗賊達に遅れを取る二人ではない。しかし、二人共“霧の悪魔”の魔法を受けており、ともに戦える状態ではなかった。

ヘイグは戦士で体力もあつてまだ剣を振るう事はできたが、僧侶のプラナは“霧の悪魔”の魔法弾によって戦闘不能状態にあった。

プラナは自分とヘイグの回復に魔力のほとんどを使ったために魔法も使えなかったし、回復したとはいえ重傷だったため傷口を塞いだだけでダメージは抜け切っていなかった。

そのため戦闘になったらとても勝ち目がなかったので、ただひたすらに逃亡し続けていた――。

プラナは走りながらも森の精霊に必死に呼びかけを行っていた。

彼女にはエルフの血が流れており、精霊の声を聞く事ができたのだ。無論、修行したわけではなかったので『契約』して使役する事はできないが、ごく簡単なお願いなら頼む事ができる。

今の二人では盗賊達を振り切る事はできない。

そこでプラナは森の精霊に呼びかけ、盗賊達の目を眩ませ様と考え

ただ。

森の精霊ドリアードの力で道を寸断してもらうなり“魅惑”の力で盗賊達の判断力を鈍らせるなりしてもらえば、その隙に盗賊達を振り切れる。

しかし“霧の悪魔”の妖気のせい、いくら呼びかけても精霊の声は聞こえなかった。

もしかしたら“声”が妖気によって阻まれ、精霊まで届いていないのかもしれない。

プラナは挫けそうになりながらも呼びかけに集中する。

自身のダメージも相当だったので、途中何度も集中力が途切れそうになったが必死に呼びかけを続ける。

(……ドリアード、返事して……)

祈る様な呼びかけが空しく響く。

プラナは前を走るヘイグを見て再び気を集中させた……。

走り続けるのにも限界があった。

いくら危険な旅を繰り返す冒険者とはいえ、無限の体力を持っているわけではない。

プラナはもとより、戦士のヘイグにしても疲れは隠せなかった。

前を走るヘイグはプラナに振り返り目で語りかけてきた。

……体力が無くなる前に戦う。

いかにも冒険者らしい発想だった。プラナはこのまま逃げ続けた方がいいと思っただが、精霊は呼びかけに答えてくれないし、体力が無くなってからでは手遅れになる。

危険は大きかったがこのまま無駄に体力を消耗するくらいなら戦った方がいいかもしれない。

体力もなく絶望な今の状況に置かれた事により、プラナは冷静な判断ができなくなっていた。

よってヘイグの言葉に頷き、戦える広い場所へ駆け込むと立ち止まり戦闘態勢に入った。

……息を整え辺りを見渡す。姿は見えないが盗賊達の殺気が二人を囲んでいる。

プラナは少しだけ回復した魔法力をヘイグの防御にまわした。

「——全能なる神よ、かの者に鋼鉄の鎧と盾を与えたまえ！」
その瞬間、ヘイグの体を淡い光が包み込む。

効果は弱いが防御力が向上する《加護》の魔法だ。

魔法力を使い切ったプラナは、手にしていたメイスを構えると盗賊達の動きを逃さずに確認する。

素早さではかなわない。

攻撃のタイミングを見計らい、先に攻撃を与えるためにプラナは気を集中させた。

二人が立ち止まった事で盗賊達はじわじわと包囲を縮めた。

まだ姿は現さない。

おそらく隙を見て一斉に攻撃するつもりなのだろう。じりじりと近付いてくる盗賊達。

“霧の悪魔”との戦闘の影響で力が入らないのか、ヘイグは剣を両手で持ち水平に構えた。

月の明かりも差し込まない暗闇で影が不意に動き出した！

ヘイグは自分の前に飛び出し向かって来る盗賊を一閃のもとに斬り捨てた。

続けて近くに現れた別の盗賊に斬りかかっていく。

ヘイグの前に現れた盗賊は五人。

その全員が短剣を両手に持った軽装備の格好をしている。

そしてプラナの前には盗賊が二人。

共に小剣を持ちヘイグの前に現れた盗賊達とはまた違った格好をしていた。

二人の盗賊はプラナを挟む様に位置取り、捕獲しようとじりじりと間合いを詰めていく。

魔法力の無いプラナはメイスを振り上げ目の前の盗賊に殴りかかっていった！不意を突かれた格好になった盗賊は防御が間に合わずメ

イスの一撃を肩に受けた。

殺傷能力の低いメイスだが、その材質は堅く痛打されると骨を砕く程の威力をみせる。

さすがにプラナの腕力では骨を砕く事はできなかったが、武器を落とすだけのダメージを与える事に成功した。武器を落とし呻く盗賊。プラナはすかさず頭上めがけてメイスを振り下ろした！鈍い音と共に盗賊は頭から血を流し倒れた。

仲間がプラナに倒され、もう片方の盗賊は怒りを露わにして斬りかかっていった。

……すでにプラナは肩で息をしていた。

襲いかかる盗賊の攻撃をギリギリのところでかわすと森の中へ飛び込んでいった――。

木々に隠れ盗賊の動きを見るプラナ。

森は彼女のフィールドだ。音を立てずに移動する術を心得ている。

先程の様な不意打ちが出来れば、非力な自分でも盗賊を倒せる。

プラナはメイスをしっかりと握ると気配を消して盗賊に少しずつ近付いていった……。

ヘイグはプラナが森の中へ飛び込んだのを見て気を集中させた。

すると剣がほのかに光り出す。

ヘイグの剣は魔法剣だ。

柄には《軽量化》の、刃には込めた気分だけ威力を上げる《威力付加》の魔法がかけられている。

光る剣を見て盗賊達は一步下がった。

それもそのはず、魔法剣は滅多にお目にかかれない希少な武器だった。

その魔法剣を持っている、という事は目の前のリザードマンは相当の戦士の戦士であると盗賊達は認識したのだった。

ヘイグは盗賊達を睨み無言の圧力をかけた。

……だが、実際は気を込めただけで倒れそうだった。

だから最初の相手を一撃で倒し、盗賊達の士気を下げる行動を取った。

戦えば自分が弱っている事がバレる。

森の中へ飛び込んだプラナがこの場を離れたのを幸いにヘイグは賭けに出たのだ。

プラナがいなければ盗賊達にバレても死ぬのは自分だけだ。

自分が死ねばプラナはガンツェル達に助けを求めに行くので、結果的にはプラナの安全は確保できる。

女は捕まると最悪だ。

文化の違うリザードマンのヘイグでも人間達の非道さは知っていた。誇り高いリザードマン族は捕虜の虐待はしない。

生き恥を晒すくらいなら名誉ある死を選ぶ。

人間達のように敗者に生き地獄を与えたりはしない。プラナが捕まったら死ぬよりも辛い目に遭うのはわかりきっている。

だからプラナがこの場にいない今、体力がまだ残っているうちに勝負に出る事にしたのだ。

ヘイグは盗賊達の間合いに踏み込んだ。

こちらからは攻撃はしない。確実に盗賊を惑わすためだ。

今、盗賊達はヘイグが戦っているいい相手か否かを判断しているはず。

ここで余裕の行動を見せれば、うまくいけば逃げてくれるだろうし、もしバレても動揺により剣筋に乱れが生じると踏んでの行動だった。しかも自分の間合いでもあるから攻撃は確実に当てられる。

この距離なら二人は倒せるとヘイグは心の中で計算していた……。

「——ドウシタ、来ナイノカ？デハ、コチラカラ参ルゾ……」

ヘイグはそう言うのと突如、盗賊に斬りかかった！

完全に不意を突かれた哀れな盗賊は、ヘイグの横に薙払った剣の一振りで首と胴が離れる。

魔法剣の斬れ味は相当なもので、見事なまでに切り口が綺麗だった。血を吹き出して後ろに倒れる盗賊を見て動揺が走る。

ヘイグは内心、このまま立ち去ってくれる事を祈る。

今の一撃で限界だった。

もはや虚勢を張る事しかできない。

それほどまでに先の“霧の悪魔”との戦闘でヘイグの体力は削られていたのだ……。

残る盗賊は四人。普段なら決してかなわぬ人数ではない。

惜しむらくはこの不運な遭遇だった――。

盗賊達はヘイグを警戒しながらも勝機を見出した様だ。

それか開き直ったのか？仲間が惨殺された事で返って戦意が戻ったのだ。

盗賊達は短剣を強く握りしめるとヘイグに向かって突撃してきた！

（……バレテシマツタカ……仕方ガナイナ。ダガ、タダデハ死ナヌ！）

ヘイグは渾身の力を振り絞り剣を振るい応戦した。

普通の剣よりはるかに軽い魔法剣が重く感じ、盗賊達の攻撃に晒される。

プラナの《加護》の魔法のおかげでなんとか耐えられているが、反撃が当てられず倒れるのも時間の問題になった……。

（……コ、コレマデカ……）

ヘイグは覚悟した。

冒険に出た以上は死ぬ事に恐れはない。

プラナは森の中にいるし、自分に何かあつたら無謀に玉碎せずに逃げてくれるはず。

盗賊の一撃が鎧の隙間に突き刺さる。それにより動きが鈍ったところを次々と短剣が突き立てられた……。

プラナは森の中まで追って来た盗賊を木の上から見ていた。

盗賊は警戒しながらゆっくりとプラナのいる木の下へ歩いて来る。

真下を通った時が勝負だ。

プラナはメイスを握りしめ、盗賊が通るのを待った。

（……来た！）

盗賊は左右に気取られ木の上のプラナにまったく気付いていなかった。

「——えいつ！」

叫びと共にプラナは木の上から飛び降りた！そして、盗賊の頭めがけてメイスを力いっぱい振り下ろした！

力はあまり出なかったが、落下により勢いよく盗賊の頭に命中した。声も出せずに倒れる盗賊——。

プラナは生き残れた事で安堵のため息をついた。

（……いけない。まだヘイグの戦いは終わってないはず。助けにいかなくちゃ！）

息つく余裕など無い。

プラナはフラフラになりながらもヘイグのいる場所へ力無く歩いて行った。

——歩いていて異常な妖気を感じた。

この妖気は“霧の悪魔”だ！

プラナの心は絶望に包まれた。

二人つきりで、しかも満身創痕の状態で“霧の悪魔”が現れるなんて——。

持てる力を振り絞って戦うしかない。考えるだけ無駄だった。

きっとガンツエル達が仇を討ってくれる。

だから少しでもダメージを与えておこう、無駄死にだけはしないとプラナは心に誓った。

妖気はヘイグのいた方向から感じる。

フラフラのプラナは体が思う様に動かず、気持ちだけが焦ってくる。

ヘイグは無事なのか？盗賊達との戦闘でダメージを受けてないか？まだ戦ってたら最悪だ。早く行かなきゃ……。

そんな事を考えながら自分の体にむち打って歩き続けた。

第十九話『悪魔退治と絶望』

……妖気はドム達のいるところまで漂って来ていた。

その妖気は間違いなく“霧の悪魔”のものだ！

「——近くに“霧の悪魔”が現れた様だな！どうする？戦い行くか？それとも様子だけ見に行くか？」

ドムはそう言っただき火に木の枝を投げ入れた。

「……戦うのは危険過ぎる……だが、無視するわけにもいかないよな？もしも仲間の誰かが遭遇したら殺されてしまう……」

ガンツエルは立ち上がり手を強く握りしめた。

「……よし、だいぶ回復した。様子だけでも見に行こう。エルはニールの治療を続けてくれ」

ガンツエルは剣を握むと妖気を感じる方向に向き直った。ドムはすでに歩き始めていた……。

「……おい、待てよ！俺も行くぞ！」

ガンツエルは黙々と先へ進むドムの後を追って足早に森の中へ駆けて行った……。

近付くにつれて妖気は強さを増していく——。

ドムとガンツエルは剣を抜き、十分に警戒しながらも足早に“霧の悪魔”が現れたであろう出現場所へ向かった。

道を遮る草木を払いながら前に進むドム。

まるで戦いに行くかの様な足取りにガンツエルは不安を覚えた。

「ちよつと待ってくれ。その剣では“奴”にはダメージを与えない」

ガンツエルはドムの元へ近付くと魔力を集中させて呪文を唱え始めた。

そう、彼は魔法戦士だったのだ。

とはいえ、その魔法はごく初歩的なものしか行使できなかったが。

なので程度は低いが、武器に《魔力付与》の魔法ぐらいなら唱える事はできた。

「……すまぬな。万が一の時は“霧の悪魔”と戦わなければならぬのに、すっかり失念していた……」

ドムの剣に光が灯る。淡い光が明かり代わりになる。

ガンツェルは続けて自分の剣にも《魔力付与》の魔法をかけて再び歩き始める。

（……やる気満々じゃないか？こっちは“奴”の魔法弾を防ぐ手立てもないのに……あのエルフの魔術師がいない今、戦闘になったら逃げられんぞ？）

草木を払いながら黙々と前を歩くこのドワーフには、死への恐怖が無いのだろうか？それとも無愛想に見えて意外にも情に厚いのか？ガンツェルは今までの冒険で何度も危機に遭遇し、多くの仲間を失ってきた。

時には自分の身を守るために仲間を見捨てた事もある。

その彼にしてみれば、ドムの行動は愚かしくも眩しく見える。だが、その行動にガンツェルは好意を覚えた。

（……この男は死なせたくないな）

このドワーフが好ましく思えた。

信頼できる男だ。ガンツェルはこの男になら背中を任せられると思った。

……プラナはその“惨状”を目にして身動きができなくなった――

視線の先には“霧の悪魔”がいる。

そして、ヘイグの無惨な姿も……。

（……ああ、なんて事！ついに力尽きたのね……）

ヘイグの体にはいくつもの短剣が突き刺さっていた。盗賊達に敗れてしまったのだ……。

でも“霧の悪魔”に魂を奪われずによかったのかもしれない。

悪魔に命を奪われた場合、最悪その魂を消滅されるまで悪魔に利用される事もある。

死して苦しみに晒されるくらいなら、刃にかかって死ねただけ救いだったとも言えた。

（……あなただけ死なせないわ。

どうせ“霧の悪魔”からは逃げられない。それなら死ぬまで戦ってやるわ……）

プラナは恐怖に固まっている体を動かそうと体中の力を振り絞った。しかしプラナの意志に反して体はぴくりとも動かなかった。

……それはある意味、プラナにとって“幸運”だった。

盗賊達は目の前に現れた“霧の悪魔”に圧倒されていた。

突然“霧”が発生し人の形に集まり異形の姿に変化したから。

しかも強烈な妖気によって足が地に張ったかの様に動かなくなっていた。

リザードマンの戦士を倒し気を抜いた瞬間の出来事に盗賊達は完全な不意打ちを受けたのだ！“霧の悪魔”はゆっくりと盗賊達に近づいていった。

この者達には、自分を殺める力も、逃走する術もない――。

“霧の悪魔”の本能は目の前の“獲物”の力を即座に判断した。

殺すのは、たやすい。ここはじっくりといたぶり、恐怖の感情を堪能したい――。

邪悪な考えを思いつき、“霧の悪魔”の顔に不気味な笑みが浮かんだ……。

盗賊達はその異形の姿、妖気を見て、目の前の者が“悪魔”である事を理解した。

……恐怖が心を支配する。

不気味な笑みを浮かべながら近付く“悪魔”から逃れようと必死に固まった体を動かそうともがいた。

だが恐怖で凍り付いた体はまったく動かなかった……。

そんな盗賊達の一人に“霧の悪魔”は手を伸ばした――。

「——ギヤアアアアツツ!!!」

張り裂けんばかりの絶叫がこだました！触れられた盗賊はみるみるうちに干からびていく。急激に生命力を吸収したのだ。

生命力とともに恐怖と絶望の感情が“霧の悪魔”に吸収された。その負の感情が邪悪なる意志に歓喜を与える。

一瞬のうちに干からびた仲間の惨たらしい最期に盗賊達の心は恐慌する。

“霧の悪魔”は別の盗賊の前に来るとその恐怖を煽るため、ゆつくりと手を伸ばし、できる限り恐怖と絶望の感情を引き出した。

そして盗賊の体に触れると、今度はゆつくりと生命力を吸収した……。

(……なんたる仕打ち！いくら敵とはいえ、放っておけない！) 凄まじい、まるで人間とは思えない絶叫を上げて干からびてゆく盗賊達を見て、プラナはそのおぞましい行為に憤りを感じた。

いくら敵対した者とはいえ、その所業を見過ごす事などできなかった。

(……動いて！一瞬でいい！彼等の呪縛を解くには、心に希望を与えなければいけない！……お願いだから動いて！)

このままでは盗賊達は無惨に吸収されて枯死してしまう。

その邪悪さを見て、彼等は魂を弄ばれたあげくに殺される事は目に見えていた。

それでもプラナの体は動かなかった。

恐怖によつて、というよりも体力が限界を越えていたのだ。

……“霧の悪魔”は次なる獲物の前で呪文を唱えた。

すると干からびた盗賊達に黒い光が発生し、動かぬはずの体が起き上がり始めた――。

ゾンビと化した仲間が恐怖に震える盗賊に近付く。

「——ぐわあああつつつ!!!」

ゾンビに体を掴まれ、盗賊の心は碎けそうになる。

その恐怖に意識が消えそうになった瞬間、生命力を奪うべく“霧の

悪魔”の手刀が盗賊の胸板を貫いた。

最後に残った盗賊は、その地獄絵図を目の当たりにして体の自由を取り戻す。

「——うわあああつつつ！！！」

そして一目散に“霧の悪魔”から逃げ出した！“霧の悪魔”はそれを楽しげに眺め、ある程度離れると“霧”になり盗賊の後を追って行った——。

残されたゾンビは生前の仲間の死体に爪を立て、その死肉を喰らい始めた。

（……いけない！ヘイグが食べられてしまう！）

仲間がゾンビに食べられる！それだけは断固阻止しなければ。

プラナは無理に動こうとして前のめりに倒れ込んだ。しかし、仲間を見捨てられない。プラナは地を這ってヘイグの元へ進んで行った。気持ちとは裏腹に体は言う事を聞かず、ゾンビ達の視界に入り気を引く事もできなかった。

ゾンビ達は仲間の死体をもの凄い勢いで貪り喰らうと次なる食料——うつ伏せに倒れているヘイグ——に近付いていった。

「——どおおおりやあああつつつ！！！」

ゾンビ達がヘイグの体に触れようとしたその時、雄叫びを上げながらドワーフが反対側の森から飛び出してきた！

そのすぐ後にガンツエルも勢いよく駆けて来る……。

ゾンビ達は構える間も無いままに突然現れた者に斬りつけられて、その身が崩れたと思ったたらあつさりと土に還った。

「……ガンツエル……ドム……ヘイグを、見て……」

仲間に声をかけるとプラナは力尽きて意識を失った。

それは非常にか細い声だったが、ガンツエルは聞き漏らさず声の出た方向に目を向けると気を失ったプラナを発見した。

二人はすぐ様“霧の悪魔”の仕業である事を察知し、それぞれプラナとヘイグを抱きかかえると足早に森の中へ消えて行った……。

……強い妖気を感じる。私はメイユールにその事を目で伝えた。メイユールも感じたのだろう。

頷くと武器を手に立ち上がり、妖気の発する方向に体を向ける。まだ遠くにいる。

妖気の動きを追うと“霧の悪魔”は移動している様に感じたが、誰か遭遇してしまったのか？

ゆっくりとだが、その妖気は何かを追跡している様な感じがする。

（……誰か、悪魔のテリトリーに入ってしまったのか？それとも負の感情を持った者が森の中を駆けまわったのか？）

そうでなければ、動きまわらなくてもいいはずだ。

何故なら悪魔族は夜になれば闇の力を自然に吸収し、何もしくても活力が沸いてくるのだから。

私は頭の中で考えを巡らした。

体が動かないのだ、せめて何かしらの知恵を出さなければ……。

おそらく魔法力が回復し始めるのは朝になってからだろう。

それまでの間、私は唯一動く頭を使い“霧の悪魔”に対抗する手段を考える事にした。

……魔法力が戻れば、エル達の神聖魔法が発動するまで“霧の悪魔”の気を引けばいい。

おそらく次に限界以上の魔法力を使えば私は死んでしまうだろうが、その時は“霧の悪魔”も倒されているだろう。

……だが、もしも魔法力が回復しなかったら――。

魔法力が朝から回復するとは限らない。

私自身、自分の体の異常がいつ治るのかわからないから、別の手段も考えなければならなかった。

（……私の命ひとつで、どうにかできるのなら……）

今回ばかりは認識不足を痛感させられた。同じ悪魔でも、その強さは個体によって変わるのを失念していた。

悪魔はその成長過程において人間以上に学習する。

こと戦闘においては、それが顕著に現れるというのに……。

私の認識の甘さが事態を悪化させてしまった。

今となつては後悔しても仕方ない。この償いは次の戦闘で必ず返す。私は次の戦闘で自分のすべてを使い“霧の悪魔”を倒そうと心に誓い、仲間の犠牲を少なく済む戦術を考え続けた……。

第二十話『悪魔退治と覚悟』

妖気はまだ漂っていた。

“霧の悪魔”の動きが止まり、その場に停止しているのが感知できた。

……体がおかしくなったからか？私の感知能力はいつもよりも鋭くなっていた。

通常の感知範囲よりも離れているにも関わらず、“霧の悪魔”のいる位置がほぼ正確に感知できたのだ。

夜になり“霧の悪魔”の妖気が強くなった事も原因のひとつかもしれないが、今はこの“異常”とも言える感知鋭敏に感謝したい気分になる。

……少しずつだが、体の感覚が戻ってきている。

感覚が回復するにつれて全身に走る痛みが増し、叫びたくなったが今は体の痛みに負けて泣き言を言っている状況ではない。

メイユールの治療のおかげで体力だけは回復している事がわかり、私は痛みに耐えながら起き上がった……。

「——メイユール、“霧の悪魔”は遠くにいるから……警戒しなくてもいいわ……」

まだ少し掠れてはいるが言葉を発する事ができた。

(……これなら、呪文を唱える事ができる……)

私は口が動くのを確認すると、私のところへやって来たメイユールに思いついた作戦を残らず伝えた……。

作戦はいたって単純である。

その前になんとか仲間と合流しなければならなかったが、確実に“霧の悪魔”にダメージを与える事のできるものだった。

その作戦とは、まず私が魔法で“霧の悪魔”を攻撃して注意を引き、

その隙にドム達の攻撃を当てていく。

その間にエル達が神聖魔法の呪文詠唱を開始、それに反応するであろう“霧の悪魔”に私がすべての魔法力を暴走させた一撃を放って動きを止め、さらにドム達の攻撃により“霧状”になるのを防ぐ。

この時、“霧の悪魔”は相当のダメージを受けているはずなので、弱ったところにエル達の神聖魔法を受ければ“霧の悪魔”はおそらく消滅するだろう。

うまくいけば、私の魔法で消滅するかもしれない。

もちろん、すべての魔法を暴走させたら私の命も尽きてしまうだろう。

魔力の収束、暴走の制御、一点に発動する集中……今の私ではその一撃に耐える事はできないから。

それだけにその威力は期待できる。

魔術師の中でも比較的魔力の高い私にしかできない捨て身の戦法である。

……メイユールは少しためらいながらも私の覚悟を知り、苦渋の表情でこの作戦を受け入れてくれた。

この作戦の重要なポイントは、私の魔法後の神聖魔法の発動のタイミングなので、前もって私の死を知ってもらわなければ動揺してタイミングを逸してしまう可能性があった。だからメイユールにその事を知ってもらい、作戦に支障をきたさない様にすべてを伝えた。

……重々しい雰囲気に含まれる。

きつとメイユールは、いくら相手が絶望的な戦力を持っていたても、誰かが犠牲になる事に抵抗を覚えているのだろう。

「……まだ私が死ぬと決まったわけじゃないわ。それに私の魔法力はいまだに回復してないから、この作戦自体実行できるかわからないの……」

これは本音だ。

作戦において重要な私の魔法力が、まったく回復する兆しも見せないので実行できるかどうか怪しかった。

よって、この作戦の全容は仲間達には秘密にしてもらう様に頼んでいる。

間違ってもドムに知られたら何を言われるかわかったものじゃない。最期の時まで小言を言われたら決心も鈍ってしまうし……。

しかし、覚悟は決めたけど不思議と“死”への恐怖は感じなかった。生き残れる自信は皆無だったが、おそらく悔いが残らない人生だと悟ったからだろうか？

——たき火の炎を見ながら私は遠くへ行ったコンスタンスの事を思った。

（……彼女がこの場にいなくてよかった……）

もしこの場にいたら『私が代わる』と言い出し兼ねなかったし、彼女の悲しむ姿を見る事になるから。

だから、コンスタンスがこの場にいない事に心底ホッとしていた。

（……この戦いが終わったら、ドムはどうするのか？……この島に来るまでは喧嘩ばかりで、ろくに口も聞かずに利害だけで接していたけど……今にして思うと彼が一番の仲間だった気がするわね……）

いつも無愛想で事あるごとに口喧嘩した日々を思い、彼の本当の姿を見て来なかった事に気付いた。

私は今まで一緒にいてくれたドムに何か遺そうと思った。

（……これならかさばらずに済むわね……）

私は指にしている指輪を抜き取ると、青く光る輝きをじっと見つめた。

この指輪はメロウスイート家に伝わる家宝の品だ。反逆の罪を着せられ一族が処刑された後、この指輪を取りに屋敷へ乗り込んだ事を思い出した。

（……この指輪には何かしらの加護の力があつたはず……お守り代わりにはなるわよね……）

私は、戦いの後でこの指輪をドムに渡す様に頼んでメイユールに手渡した。

……空を見上げれば月が傾き明かりが見え始めていた。

決戦は近い。

覚悟を決めたからか、魔法力がほんの少しずつだが回復してきた。体の感覚もよくなっていた。

（……なんとか動ける様になったわね）

私は動ける事をメイユールに伝えたと、不思議と高まっている感知能力で気の固まっている場所——おそらくドム達であろう——を感知し、その場所を目指して歩き始めた——。

第二十一話『悪魔退治〜決戦前〜』

草木をかき分け森の中を進むと、薬草になる植物が豊富に生い茂っているのが目についた。

この島は薬草の宝庫のようだ。

港町ローカスの薬屋にも多くの薬草が棚に並べられていた事を思い出し、私は役立ちそうな植物を見つけるとそれをいくつか袋に入れ持っていく事にした。

異常とも言える感知鋭敏によりドム達のいる場所を目指して歩く。

“霧の悪魔”の妖気は離れた場所に佇んでいる――。

今は生気を欲していないのだろう。

私達の気を感じているにも関わらず、まったく移動する気配を見せなかった。

(……今は満腹ってトコね)

私とメイユールは疲れた体にむち打ってドム達と合流しようと足早に歩き続けた。

しばらく歩くとドム達の待機している場所に辿り着いた。

「――マーガレット！メイユールも一緒だったか！」

突然現れた私達にドムは声をあげた。

何者かの気配を察知したドムとガンツェルは、今にも飛びかかる勢いで剣を構えていた。

飛び出していたら危うく斬られていたかもしれない。

二人共、それくらいの気が張っていたのだ。

「……みんな揃っている様ね……」

どうやら、私とメイユールの二人だけが遠くに避難していた様だ。

おかげで“霧の悪魔”とは遭遇せずに済んだのだが。

ドム達はすぐに合流したらしい。

先の戦闘で“霧の悪魔”の魔法弾をともに受けたニールは外傷よりも体内のダメージがひどく、いまだに意識を失ったままだという。そしてヘイグとプラナは先の戦闘後、森に潜む盗賊団と遭遇してしまい、逃亡の末に戦闘になってプラナは倒れ、ヘイグは瀕死の重傷になったそうだ。

特にヘイグの容態は悪く、体中に刺し傷があり生きている事が奇跡に近い状態にあった。

その盗賊団との戦闘の際に“霧の悪魔”が出現し盗賊達は皆殺しに遭い、瀕死の重傷だったヘイグと弱っていたプラナはその気が弱っていた事が幸いし難を逃れたという。

ドム達はその後にヘイグとプラナと合流したそうだ。

……今、戦える者はドム、ガンツェル、メイユール、エル、そして私。

とりあえず全員が揃った事で今後の対応を話し合う事にした。

正直、この五人で作戦を実行するのは厳しいと言わざるを得なかった。神聖魔法の呪文発動に際し“霧の悪魔”の動きを牽制する役割を担う戦士が、ドムとガンツェルの二人だけでは荷が重い。

神聖魔法の発動もそうだが、その前の私の魔法の完成まで二人だけで持ちこたえるのは厳しい。

“霧の悪魔”は二発同時に魔法弾を放てる。

万が一、二発とも二人に直撃したら……呪文詠唱により無防備なエルとメイユールを守る事ができなくなる。

私の作戦では、戦士が三人いて万が一二人がダメージを受けても残る一人が“霧の悪魔”を牽制するというものだった。

何故なら常に攻撃にさらされれば強力な魔法弾は放てず、ドム達がそれをくらっても致命傷にならないと踏んでいたから。

だから、敢えて戦士達に盾になってもらう作戦にしたのだ。

(……こうなれば、出鼻に私の全魔力を暴走させて少しでも“霧の悪魔”にダメージを与えた方がいいかしら……)

実は最初、私はそうするつもりだった。

だが、私が力尽きた事により動揺が出て隙を作る可能性があったので、戦いに集中している乱戦中に全魔力を暴走させた魔法を放つ事にしたのだった。

（……ほんのわずかな隙が勝敗を決する。

少しでも動揺する事があつてはならない……来る途中に見つけたあの薬草をみんなにも使うしかないわね……）

私は袋に入れておいた薬草を取り出した。

これは又ウフトと呼ばれる草で、私達魔術師の間では主に長時間にわたる儀式などで使用する薬草で、効能としては精神の高揚させる効果がある。

又ウフトの草は非常に強力な常習性があり、国によってはその使用、販売を禁止している。

要するに麻薬と呼ばれるものだ。

だが、又ウフトの草には若干ではあるが魔力を回復させる効果もあり、今の私にとっては無くてはならない薬草だった。

移動の際にこの薬草を見つけた時は、魔力を少しでも回復させようと戦闘前に煎じて飲もうと思つていくつか持ってきていたが、まさかこれをみんなに飲ませるのは……少し気が引けた。

（……強い常習性のあるこの薬草を飲ませようか？）

たしかに、国によってはその名の通り薬にもなる。

精神を患つた者に対しては治療効果があるのだ。しかし、健康な者に使用するのには正直抵抗があつた。

（……でも、使うしかないわ。

精神が高揚すれば戦いに集中できるし、エル達の魔力も回復させられる……）

私は意を決して袋の中から小さな鍋を取り出すと又ウフトの草を入れ、水袋の水を鍋にあけてたき火の上にその鍋を乗せた。

「……それは、又ウフト……」

メイユールは一瞬眉をひそめたが、すぐに私の考えを理解して少し

悲しげな表情になった。

他の三人はヌウフトの効果を知らなかった様で、私の行動に怪訝な顔をした。

「……これは氣力を回復させる藥草よ……精神的にも消耗してるでしょ？ここに来る途中見つけたから採ってきたのよ……」

小枝で鍋をかき混ぜると、ヌウフトの草から成分が抽出され鍋の水が緑色に変わった。

私は袋からコップを二つ取り出し、緑色の液体をすくい入れるとそのコップをドムとガンツェルに手渡した。

二人は緑色の液体が入ったコップをまじまじと見る。そして、独特の匂いに顔をしかめた。

「……これを飲めというのか？」

飲むのに抵抗があるのか、ドムは文句を言った。

「……良藥は口に苦し、です……かなり苦いですから、一気に飲んだ方がいいですよ……」

メイユールがフォローする。

ドムとガンツェルは渋々頷くと一気に飲み干した。

コップを受け取るとメイユールとエルも飲み、最後に私も一気に飲み干す。

口の中が苦くて顔が歪みそうだ。

以前、ケールで飲んだ“お茶”なる飲み物も苦かったが、これはその比ではなかった。

……時間が経てば効果が出てくる。

生き残るためだ。

みんなには申し訳ないが、しばらくはこの苦さと戦ってもらおう……。

——“霧の悪魔”が動き出した。ゆっくりと、こっちに向かって移動し始める。

「……妖氣が近付いて来ている。ここにいてはニール達が巻き添え

になる。私達も移動しましょう……」

皆に緊張が走る。だが、逃げようと言う者は一人もいなかった。

このまま引き下がれない。

おそらく“霧の悪魔”との戦闘はこれで最後だ。

それぞれに覚悟を決め、私達は“霧の悪魔”のいる方向に向かって歩き出した。

第二十二話『悪魔退治と消滅』

——森の中にある更地に出た私達は、この場所を最終決戦の地に決めた。

“霧の悪魔”が来るまで少し時間がある。

ガンツェルはドムと自分の剣に《魔力付与》の魔法をかけて戦いに備えた。

メイユールとエルも魔力を集中し、呪文詠唱の準備に入る。

……霧が辺りに立ちこめた——。

目の前に“霧の悪魔”が現れた！

(……いよいよこの時が来たわね)

ドムとガンツェルは“霧の悪魔”に向かって仕掛けた。

魔法弾の標的を絞らせない様に左右に分かれての連続攻撃。

思ったより動きがいい様だ。

又ウフトの影響だろうか？二人は息もつかさぬ攻撃で“霧の悪魔”に反撃の隙を与えなかった。

「——大いなる光の意志よ！我が祈りに応え、我に聖なる力を与えたまえ……」

エルとメイユールの呪文詠唱が始まった。

発動までの間、三人で“霧の悪魔”の動きを止めなければ……。

「——灼熱の光よ、閃光となりて敵を打ち抜け！」

《灼熱》の魔法が赤い閃光となって“霧の悪魔”に直撃した！

“霧の悪魔”が後ろに身を引き、私の方に注意を向けた。

(——今だ！)

ドムとガンツェルの攻撃を受けながらも“霧の悪魔”の意識は完全に私を捉えた。

あの者の力は、侮れない——。

邪悪なる意志は、魔法を放ったエルフの魔術師を脅威となる障害と

認識した。

……私は目を閉じ魔力を集中する。

「——すべての魔力よ！我が魂を糧として一点に集まれ！」
精神内での魔法の構築。

魔力の流れを収束しエネルギーへ変換。

それに伴う魔力の拡散制御。

そして放出目標へ方向制御。

……通常の魔法発動への段階を終えて、私はさらに魔力の収束を行う。

——魔力流出制限解除！

魔法力が体中から溢れ出す。

漏れ出るそれらの魔力を強引に収束すると、両手に光と化した魔法力が渦巻いた。

（……これ以上、魔法威力は上がらない……）

持てるほぼすべての魔法力を収束させると両手を合わせた。

強い光がひとつになり“霧の悪魔”に向けてゆつくりと構える。

魔法の発動軌道を固定し、ドムとガンツェルが離れる瞬間を待った。

（……さすがに全魔力を抑えるのはきついわ……）

集まり切らない魔法力が体中を駆け巡る。

魔力の暴走だった。普段ならすぐに魔法を中断しなければならない危険な状態である。

だが、この魔法に命を賭けた私には中断する気などなかった。

ドムとガンツェルの働きは想像以上だった。

二人の連携攻撃は凄まじく、少しずつだが“霧の悪魔”を押している。

途切れる事のない攻撃に“霧の悪魔”はたまらず後ろへ跳躍して距離を取った……。

「——はあああああつつつ！……！」

“霧の悪魔”と二人の距離が離れた瞬間、私は全魔力を込めた魔法

を“霧の悪魔”に向けて放った！

命中した魔法が“霧の悪魔”を包み込む。

グオオオオツツ！！！！

苦悶の声をあげて“霧の悪魔”がもぐく。

命中した事を確認した私は、意識が消えてゆくを感じて力尽きる様に倒れる……そして、そのまま闇に飲み込まれていくを感じた――。

(……マーガレットさん……)

メイユールの目に力無く倒れ込むマーガレットの姿が映った。それでも呪文詠唱はやめない。

「……聖なる息吹よ、破邪の剣よ、不浄の者を滅する閃光となれ！」
メイユールとエルの神聖魔法が、光の矢となり魔法の渦に包まれて動きを止めた“霧の悪魔”に命中する！“霧の悪魔”はうずくまる様にその場に崩れる。

ドムとガンツェルは容赦なく飛びかかり“霧の悪魔”に致命的な一撃を与える……。

グオオオオツツ！！！！

断末魔の叫びをあげ“霧の悪魔”は動きを止めた。
光に包まれた体は灰になっていく――。

「……終わったな……」

“霧の悪魔”が完全に灰になった事を確認したガンツェルは一言だけ言つとその場に座り込んだ。

ドムは灰になった“霧の悪魔”を見て振り返る……。

「――！！！！」

視線の先にはうつ伏せに倒れ、微動だにしないマーガレットがいる。その体から生命力を感じない……。

ドムはマーガレットに駆け寄り体を起こした。

力無く垂れ下がる手。

顔色は青く、痩せこけていた。

生命力の欠片も無くなったその体は、徐々に熱を失ってゆく……。

「……マーガレット!!」

ドムは悟った。マーガレットがその魔法力をすべて使い切った事を……。

鼓動も止まり、まるで人形のようなマーガレットを抱きかかえると、ドムは何も言わずに呆然と立ち尽くした――。

…… 目的は果たした。

しかし、パーティーの状態は最悪だった……。

ニール、ヘイグ、プラナは意識不明。

メイユールとエルも魔法力の消費が激しいし、ドムやガンツェルにしても肉体の疲労が重かった。

マーガレットにいたっては、魔法力を使い果たし…… 生命活動を停止させていた。

まさに満身創痍のパーティー。

一行は負傷者の治療のため、マイア神殿に向かう事にした……。

負傷者を連れての移動は時間がかかる。

通常なら二日もあれば辿り着けるマイア神殿に着いたのは、それから四日後の夜だった。

一行はそれぞれの寝台に寝かされ治療を受けた。

ライマー島北東部に位置するマイア神殿は、負傷者や悩める者に対して無償で救いの手を差し伸べる聖職者の集まる土地である。

ドムとガンツェルは回復魔法で元の体力を取り戻し、メイユールとエルも魔法力を回復させるため眠りにについている。

ニール達は別室で治療を受けており、面会する事もできない状態だった。

そして、マーガレットは地下の一室に安置されている。

すっかり回復したドムとガンツェルは、それぞれ聖職者達に礼を言っ
て目覚めたメイユールとエルの回復を確認するべく彼女等の元へ行く。

少しやつれた表情の二人。

彼女達は体力的には魔法により回復していたが、魔法力の消耗で精神的な疲労がまだ抜け切っていなかった。

だが思ったより元気そうな二人を見て、ガンツェルの表情は明るくなった。

ベッドの脇にある椅子に座るとガンツェルは二人に声をかけた。

「……回復してよかった、よかった。死んだ様に眠りだしたから、ちょっと心配したんだぜ？」

状況の深刻さを感じさせない様に軽口を叩く。

少しでも彼女達の不安を無くそうと努めて陽気に振る舞うガンツェル。

それとは対照的に無言なドム。

「……しばらくはこの神殿の世話になるから、ゆっくり体を癒すといい……」

彼女達は見ただ目よりも疲労している。肉体的なダメージは魔法で回復するが、魔法力の消耗による精神的なものは自然治癒力に依存するしかない。

ドムとガンツェルは二人の無事を確認すると部屋から出ようと席を立った。

「……ドムさん、ちょっとよろしいですか？」

不意にメイユールは口を開いた。

「すみませんが、こちらに来ていただけますか？」

その表情に疲労が感じられたが、はつきりとした口調でドムに話しかける。

無言のまま振り返りメイユールの顔を見た。

その目に強い意志を感じ、ドムはメイユールの言葉に従う。

「……どうした？」

メイユールのそばまで来るとドムは、ベッドの脇にある椅子に腰を下ろし彼女の話聞く事にした。

目を閉じるメイユール。ドムは静かに話し出すのを待つ。

「……ドムさん、これをあなたに、と。マーガレットさんに頼まれました……手を出して下さい……」

そう言つてメイユールは指にはめていた指輪を抜き取り、それを差し出されたドムの手のひらの上に置いた。

「……これは……？」

ドムは青い光を放つ指輪を鋭い目つきで見る。

悲しみよりも怒り――。

マーガレットが初めから死ぬ覚悟で戦つた事を知つて、ドムは自分の力不足に憤つた。

（……俺にもつと力があれば、そんな覚悟をせずに済んだのにな……）

自分は力を出し切つたのか？指輪を握りしめ、ドムは己の弱さを責めた。

「……マーガレットさんの意志は強く、私には止める事ができませんでした……」

悲痛な表情で頭を下げるメイユール。

自分の力が及ばず、マーガレットを救えなかつた事に深い悲しみを覚える。

涙こそ見せなかつたが、その姿を見てドムはメイユールが自分を責めて苦しんでいるのを知り、彼女の肩に手を乗せた。

「――マーガレットが自分で決めた事だ……誰にもその覚悟は止められなかつたはず……だから自分を責めるな」

仕方の無い事。ドムは自分にも言い聞かせる様に言つた。

……精神的にも肉体的にも疲労困憊だつたプラナは意識を取り戻した。

見慣れぬ場所にいる事に疑問を覚え、プラナは周りを見回した。

ここは部屋の中だ。ベッドで寝かされている。

（……聖なる力が漲っている……）

まだモヤのかかつた頭で考える。

(……ライマー島で聖なる波動に満ちた場所はひとつしかない……)
プラナは、ここがマイア神殿である事に気付いた。

……戦いは終わったの？

プラナは体が動く事を確認するとベッドから身を起こした。

暗い部屋にベッドが四つある。

そのうちひとつは空いていたが、残りのベッドにはニールとヘイグが寝かされていた。

……二人の漏れる息を感じる。

ヘイグは生きていた――。

プラナは自分のために負傷したヘイグの生存を知り、安堵のため息をついた。

(……他の仲間は無事なの？)

残る仲間の姿が見えない。

別の部屋にいるのか？プラナはまだ回復し切っていない体にむち打ってベッドから降りる。

そしてニールとヘイグの容態を見ると部屋を出て行った。

――ゆつくりと、壁に体を合わせて廊下を歩く。

今は夜なのだろう。神殿内は暗く、廊下には聖職者の誰一人いなかった。

歩いてると地下へ続く階段が見えた。

壁を寄りかかる様にして歩くプラナは、そのまま階段を下っていく。さらに暗くなる。

だが、エルフの血をひくプラナにも暗視能力があつたのであまり気にならなかった。

(……光？)

先に進むと部屋の一室から光が漏れているのを発見した。

誰かいるかもしれない。プラナは光の漏れる部屋に向かって歩いた。扉が少しだけ開いている。

「――ああっ！」

中を覗くとプラナは驚きの声をあげた。異様ともいえる光景が見え

たの
だ
—
。

第二十三話『次元の狭間で……』

……闇に包まれた意識は“何も無い空間”を漂っていた。
そこには苦痛も何も……いや、“感覚”が無かった。

(……これが、死の世界？)

肉体から抜け出た魂だけが漂い続ける。

このままの状態が続けば今ある生命力は枯渇し、私の魂は消滅してしまうだろう。

(……見る事も、感じる事もできない……)

意識だけは何故かはつきりしている。

しかし、それも消滅する——もしくは生まれ変わるか、までの間だけだ。

考える事は無い。特にこの世に未練があるわけでもなかったから。
途中で意識は途絶えたが、私の魔法は“霧の悪魔”に致命的なダメージを与えたはず。

彼等ならきつと、詰めを誤る事なく“霧の悪魔”を倒したと思う。
だから、私は彼等の身を案じる必要がなかった。

最後に彼等の役に立てたので、このまま消えて無くなっても私は満足できた……。

《——そなたはまだ死すべき時ではない——》

途切れそうな意識に“声”が直接響いてきた。

《——まだ安息の時を迎えるのは許されない——》

“声”は私に呼びかけている。

私は“声”のする方向に意識を向ける。その場所には何も無い。

《……“視覚”ではなく、魂で“見る”のだ——》

私は“声”に従い魂で見る……魔力感知の感覚で見直すと、そこに
“人の様な者”がいた。

《——寿命無き者よ、そなたは地上に帰らねばならぬ……》

“人の様な者”——その姿は年老いた魔術師の格好に類似していた——は私に語り続ける。

《——高次元の存在の力を借り、そなたを地上へ帰す……》

(……誰なの？地上へ帰すって、どういう意味……？)

《——魂が抜け出た事で、そなたの肉体は生命活動を停止している……そこで魂を肉体に戻し、蘇生させる——》

私を生き返らせるって？“人の様な者”の言葉が信じられなかった。蘇生……この地上に住む者の中にも、その大いなる力を行使する偉大な術者はいる。

だが、その業を行使できる術者は全大陸——七つある——でもほんの一握りしかない高等な術である。

それを行使するというのだ。私は驚きを隠し切れなかった。

(……高次元の存在？それに蘇生？)

私には到底理解できる話ではない。

“人の様な者”は私の疑問を悟ったのか、簡潔に説明し始めた……。高次元の存在——“人の様な者”いわく守護天使——の力を借りて現世の空間に転移し、“人の様な者”が術を使い私の魂を元の肉体に戻すという。

(……いったい、何者なの？……)

おそらく、かなり高位の魔術師、いや、魔術師の頂点にあたる魔導士であろう“人の様な者”の存在に私は興味を覚えた。

同じ魔術を志す者にとって“人の様な者”はまさに尊敬に値するからだ。

《——時間がないので、早速“蘇生”に取りかかる……意識を無にして強く“生”を念じよ——》

“人の様な者”は説明を終えるとすぐ様高次元の存在を喚んだ。すると闇の空間に突如、全身から光を放ち、輝く翼を持った美しい高次元の存在が現れる。

「——あなたは何者！？」

私は転移される前に“人の様な者”に問いかけた。

光に包まれる瞬間、“人の様な者”は自分の名を告げる。

（——ええっ！！あなたは、あの——）

「——また会う事もあるだろう……命を無駄にするでないぞ——

——」

光に包まれた私の意識は、そこで途切れた……。

そこには、光に包まれ、宙に浮いたマーガレットがいた。

（——何が起きているの！）

プラナはその異様な光景に言葉を発する事ができなかった……。

そこに一人の魔術師風の者が現れた。

魔術師風の者——“人の様な者”——はマーガレットに向けて呪文を唱え始める。

呪文の唱える速度が早くてプラナには何の呪文が理解できなかった。

（……高速呪文詠唱……）

“人の様な者”は特殊魔法言語を用いた高速呪文詠唱で蘇生の術を発動したのだった。

……光がマーガレットに収束してゆく——。

そして、完全に光がマーガレットの体に消えていくと、部屋の中は真っ暗になった。

蘇生の呪文が成功した事を確認した“人の様な者”は、短い呪文を唱えるといずこかへ転移していった……。

残されたプラナは呆然とその光景を見ていた。しかし、光を吸収したマーガレットが心配になりベッドに近づく。

状況が理解できずに戸惑いを隠し切れなかったが、マーガレットに危害が加えられてない事を確かめるとその場に座り込んだ……。

（……疲れてるのかしら？寝直そう……）

プラナは不意に立ち上がると、何事もなかったかの様に振り向きもせず部屋を出て行った。

……その心にはすでに先程の記憶はなかった。

知らぬうちに意識操作を受けたのだった――。

第二十四話『別離』

ニールとプラナが目覚めた――。

マイア神殿の神官からその事を聞いたガンツェルは、神殿内走行禁止にも関わらず全速力で彼等の部屋まで走って行った。

ベッドから身を起こしたプラナが部屋に飛び込んで来たガンツェルを見て吹き出す。

ニールの方はベッドに横になっていたが顔色はいい。

だが、まだ体内のダメージは抜け切っておらず、見た目とは裏腹に完治までには時間がかかるとの事だった。

(……いかな……)

ただ一人、昏睡状態のヘイグを見てガンツェルは厳しい表情に戻る。全身に刺し傷があるヘイグはいまだに意識が無いまま眠り続けている。

神官達の治療でも意識が戻るかどうかはわからないという。

(……俺はまだいいな……仲間が目覚めたんだし……)

戦友を失ったドムに比べれば、自分達は希望があるだけまだマシである。

冒険者にとって死別するのは特に珍しい事ではないが、やはり戦友を失うのは堪える。

そのドムはというと、メイユールから渡されたマーガレットの指輪を見て、懸命に気持ちを切り替えようとしていた。

古くからの付き合いなのだろう。

ガンツェルにはドムにかけてやる言葉がなかった。

下手な感傷でドムの心を乱すわけにもいかない。

それは、冒険者にとっては最低限のルールだ。

だからドムが行くまでは、誰一人としてマーガレットのところへは行かなかった。

それが戦友に対する思いやりなのだから……。

部屋にメイユールもやって来て、今後の話をする事にした。

メイユールはマイア神殿の神官でもあるので、ニール達の治療の面倒を最後まで見てくれる様に神殿側に頼んでくれた。

そのおかげで治療に専念できるが、問題はその後だった。

ニールの状態はかなり悪く、冒険者として復帰するには半年以上の治療が必要であるというのだ。

もちろん、その間はマイア神殿からも出る事はできない。

“闇の力”に侵された体は聖なる波動を受け続けなければ、その影響で人格すら変わってしまうのだ。

不運な事にニールは“闇の力”に対する免疫が冒険者とは思えないくらいになかった。

そのため体の髄まで“闇の力”の浸食を受けてしまったのだ。

エルはニールに付き添う事を決め、ドム達とはここで別れる決意を固めている。ガンツエル達は元々“霧の悪魔”を退治するまでの仲間なので、ヘイグが回復したら旅に出る事を決めていた。

彼等が残されたドムについて話し始めた。

「——俺としては連れて行きたい。だがドムは断ると思うな……」
ガンツエルはいかにも義理堅そうなドムが、すぐに他のパーティーに混ざるとは思えなかった。

(……ま、そこが良いところなんだがな……)

冒険者にしては情に厚いドムを気に入っているガンツエルは、真剣にドムのこれからの事を心配していた。

ニール達はしばらくの間マイア神殿から離れられないから問題外だし、唯一求人募集で仲間になったメイユールだけでは心許ないだろう。

(……せめて、ルターズが近ければ……なんとかしてやれるのに……)

ガンツエル達の拠点はルターズだったので、離れたマイア神殿へ頻繁に通うわけにもいかなかった。

結局、決めるのはドムだ。

とやかく議論しても始まらない。

そもそも冒険者がこの様な話題を議論する事自体がおかしいと言える。

それだけ絆が深まったのだろうか？ガンツェルは疑問に思いながらも部屋を後にして、話をしようとドムの元へ向かった……。

マイア神殿の礼拝所――。

荘厳な雰囲気と聖なる波動で包まれた聖域で、ドムは目の前の女神像を見て思案に耽っていた。

（……この指輪にふさわしい銀細工を造ろう……）

ドワーフ族は、職人顔負けの優れた装飾品を造り出す金物細工の職人である。

生まれながらにして指先が器用なドワーフ族にとって金物細工は数少ない趣味のひとつとも言える。

ドムは亡き戦友のために装飾品を造ろうと思い、礼拝所の女神像を見て頭の中でマーガレットに似合う装飾を思い描いていた。

「……ここにいたのか」

ドムを探しに神殿内を歩きまわったガンツェルが礼拝所にやって来た。

（ドワーフ族は信心深い種族と聞いたが……実際に見ると違和感があるな）

この無骨な戦士が女神像を眺める姿はさすがに想像し難い。

よってガンツェルはこの礼拝所に最後に訪れたのだ。

女神像を眺めるドムは振り返るとニカツと笑みを浮かべる。何か思いついたのか？戦いの後、感情を表に出さなかったドムの笑顔にガンツェルは不思議な感覚を覚えた。

「……いろいろ心配かけてしまったな。俺は大丈夫だ！メイユールと一緒に行的てくれるし、仲間がいないのには慣れている。それに思いついた事があつてしばらく冒険をやめようと思う……」

ガンツェルの話を聞いたドムは思いの外淡々とした口調で答えた。
その口調からガンツェルは、ドムが冒険を捨てたわけじゃない事を察した。

「いらぬ心配だったな？俺は冒険者とはいえ、戦友を亡くしても気丈に振る舞えるあんたを尊敬するぜ……」

そう言つてガンツェルは満面の笑みを浮かべると手を差し出し、力強く、固い握手を交わした。

——それぞれの道は決まった。

エルはマイア神殿でニールの治療に付き添い、ガンツェルとプラナはヘイグの回復を待つ。

ドムとメイユールは、宿屋に置いてきた荷物を取りにルターズへ一旦戻る事にした……。

——地下の一室。

その部屋のドアには『遺体安置所』と書かれている。

そこには美しいエルフの女性が眠っていた。

静かな寝息を立て、かすかに胸は上下している。

彼女は生きている——。

しかし、誰もその事に気付かずエルフの女性は静かに眠り続けていた——。

第二十五話『奇跡を知る者、知らぬ者』

旅支度を終えたドムとメイユールは、マイア神殿の入りに集まったガンツエル達に見送られ、一路ルターズを目指した。

マーガレットの遺体はもうしばらく安置してもらう様に魔法処置を頼んだ。

連れ込まれた時にかけられた魔法がそろそろ切れるためだ。

マイア神殿だけではなく、神殿に運ばれた遺体には腐敗を止める魔法を施す事になっていた。

それは、綺麗なままの状態で葬儀を行うためである――。

マイア神殿からルターズまでは、冒険者なら四日あれば辿り着ける。大きな荷物を運ぶ隊商に比べ、身軽な冒険者は一日に歩く距離が長いのだ。

ドムはこのライマー島へ来て間もないので地理に疎かった。

これまでの旅はすべてマーガレットに任せっきりだった事を思うと、エルフの魔術師の存在が思いの外大きかった事を知った。

大地を踏みしめ生きている事を実感する。

この心地よい疲れを体感する喜びに、自然とその歩みは早くなった。

(……ドムさん、思ったより元気そうでよかったわ……)

前に行くドムを、暑い日差しに目を細めながら見てメイユールは歩く速度を上げる。

戦士の、それも他の種族よりも強靱な肉体を持ったドワーフの歩みについて行くのは、いくら神官戦士として鍛えたとはいえ、女性であるメイユールにとって肉体的な疲労は大きかった。

(……疲れを感じるだけ、私はまだ幸せよ……)

流れ出る汗を拭きメイユールは己を戒める。

疲れを苦に思う自分に内心叱咤してドムの後続く。

ドムはしばらくしてメイユールが疲れている事に気付き、木陰で少

し休みを取る事にした。

「……すまない、俺とした事が……」
バツが悪そうに頭を掻いて謝るドム。

マーガレットにしてもコンスタンスにしても、女とは思えない体力を持っていたので、つい普段と変わらぬ速度で歩いた事に深く反省した。

昼に近い時刻だったので日差しが強く、歩いてるだけで滝の様に汗が吹き出る。

しかも金属鎧を着ているので灼熱地獄にいる気分になる。

ライマー島には『四季』という季節の移り変わりがない。一年中、初夏の状態である。

この世界において『四季』のない大陸は少ない。

そのためドムにしてみれば、この暑さは全く苦になっていなかった。木陰でどつかりと腰を下ろし、遠くを見ているドム。その姿に感心しながらメイユールは体を鍛え直そう、と密かに思うのだった……。

見知らぬ場所で目を覚ました私は、ベッドから身を起こし自分の体を抱きしめた。

(……肉体がある……)

あの空間での記憶がまざまざと甦る。

何も無い世界……あれが死の世界だったのだろうか？体に触れて私は自分が生き返った事を知り、あの空間で出会った“人の様な者”を思い出して頭が混乱した。

《——私の名はルーン・マナス……しがない魔術師だ——》

……しがない魔術師どころではない！ルーン・マナスと言えば、我々魔術師の中で知らぬ者はいない伝説の魔導士である。

一般の人達は知らないが、魔術師は大きく二種類に分かれている。己の魔力を具現化して魔法を放つ魔術師と、己の魔力だけではなく、雑多の精霊の力や大地の気——オーラという——を使い魔法を放つ魔導士だ。

……この世界には元々魔術師の数が少ない。

その魔術師の中でも強大な魔力を持つ魔導士はさらに稀少な存在であった。

ルーンⅡマナスはその魔導士の中にあつて、魔術師の発展に貢献した偉大なる人物だった。

遙か昔、この世界―古の記述によればクロムワイズと呼ばれている―で起こった“魔導大戦”により、すべての大陸から凄まじい力を持つ魔導士達は消え、わずかに残った魔術師達も“魔導大戦”によりその力を忌み嫌われ、その数は減少の一途を辿っていく。

そのため七つある大陸の中で魔術師ギルドが公に認められているところは、リンデン大陸とティアⅡレステア大陸の二つしかないくらい魔術師の地位は低かった。

そんな世界でルーンⅡマナスは魔術師の地位向上に尽力したのだった。彼の偉大さはリンデン大陸に魔法国家ルーンⅡマナスという国が建国された事でも伺い知れる。

そのルーンⅡマナスに偶然にも出会えた事に私は静かな興奮を覚えた。

（……偉大な魔導士ルーンⅡマナスに出会ふなんて、信じられない……）

私はあの時の出来事に衝撃を受けている。

よくよく思い起こせば、溢れる知性、身にまとうオーラ、虚無の空間においての自己を認識する強靱な意志力、どれを取っても本人であると言わざるを得ない……というよりも偽物である可能性は皆無だ。

魔術師、いや、魔法の力を持つ者にとって“ルーンⅡマナス”の名はそれほどに偉大なのだ。

（……生きる上で只の偶然などない。

この出来事も私の人生に何らかの意味があるはず……）

不思議な事に体力、魔法力ともに完全に回復している。

それに異常とも言える感知能力も消えていた。

みんなはどうしているのだろう？部屋の雰囲気から察するとここは遺体安置所の様だ。

しかも私は死装束の服を着せられている。

もしかしたら、私が死んだ（実際に死んだが…）と思い旅立って行ったかもしれない。

早くみんなに会わなければ。私はベッドから降りると死装束姿のまま部屋を出た……。

ニール達の反応は予想通りだった。

たしかにこの世界では《奇跡》の力による蘇生は認知されている。だが、その奇跡を起こす者は稀少な上に蘇生の確率は極めて低い。

ここマイア神殿……いや、ライマー島で一人だけ《奇跡》の力を使う人物がいたが、現在はライマー島南西にあるユピトという街で起こった災害による被害者の救助に行っているため、私が生き返った事に衝撃を受けていた。

「——信じられないわ！」

「……奇跡だわ！」

神に仕える身のエルとプラナの反応は特に凄かった。

初めのうちはゾンビか不死の生き物になったのかと疑い、私を除霊しようとさえしたのだ。

だが私から生命力を感じた二人はすぐに私が蘇生した事を知り、今度は神の力なしに生き返った事に頭が混乱していた……。

二人、いや、マイア神殿の神官達も『何故蘇生できたのか』私に問い詰めた。しかし、その問いになんて答えていいか悩んだ。

ルーン・マナスに助けられた、なんて言った日には大変な事になる。そのため、私は『わからない』とだけ言うとその話に関しては一切口を閉ざした。

「——ドムとメイユールは三日前にマイア神殿を出てルターズへ戻ったぞ」

ようやく事態が沈静化したその晩にガンツェルからこの場にいない

ドムの話を聞いた。

その話を聞いて私は、早くドムとメイユールに生き返った事を伝えようと思った。

さすがに仲間の死は堪えるはず……それを聞けば、ドムも喜んでくれるだろう。

だが、早くルターズに戻らねばドムの消息を見失ってしまう。

体力の方は完全に回復していたので、私は明朝にでもルターズへ行く事に決めた。

今回の悪魔退治の冒険では貴重な体験をした。

この戦闘では、より一層熟慮する事を学んだ。

悲観的な発想で仲間に関心配をかけた事を反省し、これからは視野をもっと広げて様々な状況においても冷静に、かつ最後まで全員が無事で済む方法を考えようと心に誓った。

(……私もまだまだね)

自分の行動の浅はかさを苦笑する。

だが、未熟なだけに私はまだまだ成長できる。そう思うとなんだか前向きな気分になる。

(……ルターズへ着いたらどうしようか……)

私はこれからの事を思いながら、明日の出発に向けて眠りについた……。

第二十六話『ささやかな休息！？』

“夜の都”ルターズ。

宿屋に着いたドムとメイユールは主人に軽く挨拶をすると部屋に戻り、ベッドに倒れ込む様にして疲れた体を休めた。

メイユールは部屋にある小さなテーブルの上にきちんと整理して置かれた何冊かの魔術書を見て寂しい気持ちになる。

何故ならマーガレットの大事にしていた魔術書はもの言わずその存在を誇示していたからだ。

(……ドムさんは、寂しさを克服したのかしら？)

ドムはベッドに横になるとすぐに寝息を立て、メイユールの感傷的な思いを知る事はなかった。

神殿勤めが長かったメイユールは戦士としての実力は充分にあつたが、冒険者としての経験が少なかったため仲間を失った事に少なからず動揺していた。

仲間の屍を乗り越えて目的を達する――。

それが、冒険者の強さにつながっている事は彼女も充分に理解している。

それでも簡単に割り切れる程、冒険者としての薄情とも言える考え方には納得できなかった。

ドムの精神的な強さは尊敬に値するが、もう少し悲しんでもいい様な気がする。

それは甘い考え方かもしれない。

だがメイユールは自分の考え方は間違っていないと思っている。

(……感情を表に出さないだけよ……悲しくないなんて事……あるわけないわ……)

ドムは冒険者にしては情が深い。

メイユールはドムに対してその様な印象を抱いている。

そうでなければ無報酬で悪魔退治なんて危険を侵したりはしない。ただ不器用なだけだ、とメイユールは思っている。

(……いけないわね。もっと前向きに考えなくては……)

過去に囚われていては前へは進めない。生きてる限り、立ち止まる事は出来ないのだ。

冒険者、というよりも聖職者としてメイユールはそう思い、気持ちを切り替えようとベッドの中に潜り込んだ。

“夜の都”と呼ばれるだけあって、ルターズの街は一日中賑わいを見せていた。

『……体の疲れは宿屋でお取りよ、朝は来ないよ、休みなさい。旅の疲れは施設でお取りよ、あなた好みの娯楽をあげる。心の疲れは濡れ場でお取りよ、覚めない夢を与えてあげる……』

これは“夜の都”ルターズで詠われる名文句のひとつである。他の追隨を許さぬこの街の娯楽施設の充実さを見事に表現していると言えよう。

睡眠により体力を回復した二人は、旅の疲れを癒すべく“夜の都”を満喫しようと街に出た。

メイユールは劇を観るために劇場へ、ドムは歓楽街へと向かう。

このルターズは“夜の領域”という特殊な結界により、常に夜の闇に包まれている。

そのため“朝”が来ないので、慣れない者はこの街での時間の感覚が狂ってしまい、文字通り『時を忘れて』欲望のままに享楽を貪るのだ。

時間感覚が麻痺するため、いつ何時も街から観光客が途切れる事はなかった。

……ドムが訪れたのは『昇天街』という歓楽街の中でも特に観光客が集まるルターズの一大スポットだった。平たく言えば風俗街である。

闇の生き物達が集うこの街の『昇天街』で働く者には、人間などの

いわゆる“光の種族”は一人もない。

そこにいるのはサッキュバスの一種で、精気を糧とする淫魔ゼクシスという闇の種族である。

ゼクシスは“霧の悪魔”、サッキュバスなどに代表される精気吸収型の悪魔の中でもその吸収力は極めて弱く、その性質にしても限りなく闇に近いが決して邪悪ではない。

良く言えば気まぐれな性格をしている。

特殊な遺伝構造をもっているゼクシスは、女性しか生まれない、光の下でも活動できる、光の種族との混血が可能（女性しかないの で当たり前？）という人間達からして見れば比較的安全な種族であると言える。

『ゼクシス無くしてルターズを語るなかれ』……この街へ来て彼女等を素通りする男は余程高潔な者か女に興味のない者だけだ。

よって長旅によりしばらく女を断っていたドムが『昇天街』に足を運んだとしても、それを責める事は誰にもできないだろう。

街行く人のほとんどがゼクシスを連れて歩いている。

ドムはふと目についた『昇天街』の中にある一番大きく豪華な建物に入ってしまった……。

「——夢幻の館へようこそ！」

中に入った瞬間、ドムは美女達の手厚い歓迎を受けた。受付の部屋にしては広いフロアに、豪華な造りのテーブルやソファ、上質の生地で織られた絨毯が敷き詰められており、美女達はそれぞれの場所で明るい笑顔を振りまいていた。

その娼館とは思えない雰囲気、ドムは一瞬にして固まった。

（……なんだ、この店は？）

……ドムの反応は初めて『昇天街』の店を利用する客と同じ反応だった。

何故なら通常の娼館だと薄暗い受付があり、部屋に通される時も言葉は極力口に出さず目的だけ達する、という淡々としたものなのだ

が、ここの対応はまったく違ったからだ。

そんな固まったドムに二人の美女が来ると、腕を絡ませフロアの中
央へ案内していく。

慣れない雰囲気にもドムは、なすがままに彼女等のペースに乗せられ
た。

ソファーに座ると酒が出される。平静を取り戻そうとドムはその酒
をあおった。

「——むむっ！これは旨い！」

その味は今まで飲んだ中でも格別なものだった。

生来酒豪の多いドワーフ族は、決して本物嗜好ではないが、それ
も酒の味にはとことんうるさかった。

そのドムにして旨いと言わせたのだから大したものである。その旨
さにドムの機嫌は良くなった。

満足気に酒を飲むドムに一際美しい女性が近付いて来る。

「……いらつしゃいませ。ようこそ、はるばる遠路よりお越しいた
だき、まことにありがとうございます。わたくしは“夢幻の館”の
代表を務めさせておりますカディルナリスと申します。当店では、
様々な嗜好のサービスでご奉仕し必ずやあなた様の満足いただける
快楽を提供いたしますわ。どうぞ、ごゆるりと夢のひとときを堪能
して下さいませ……」

挨拶をして丁寧に頭を下げる。どうやらこの店の女主人の様だ。

少々雰囲気にも飲まれてはいたが、ドムは気を取り直して目的を果た
そうと声をかけた……。

ルターズの中で比較的健全な歓楽街『過激な歌劇通り』に足を運ん
だメイユール。彼女には芸術観賞の趣味があり、マイア神殿で行わ
れる奉納の舞いや聖者の演劇などの神殿の芸能行事にも積極的に参
加するくらい、歌劇や舞台などに深く精通していた。

『過激な歌劇通り』には大小様々な劇場が並んでいる。

芸術をこよなく愛する者達で活気に満ちたこの通りを眩しそうに眺

め、メイユールの心は浮き足立っていた。

「——さあ！寄ってらっしゃい、見てらっしゃい！只今より、かの劇作家マダリティア・オベロン伯の最高傑作『湖畔の騎士』の上演が始まるよ！」

威勢の良い掛け声が通りに響く。

（湖畔の騎士……アルカディアの騎士の物語ね……）

その声にメイユールは足を止め、しばし思案にふける。

『湖畔の騎士』は、実在したアルカディアの騎士ラーカーム・コゼットの半生を描いた作品で、愛する妻に対する一途な想い、騎士の称号を剥奪されようと誤った道へ進もうとする主を諫める高潔さ、放逐されるも危機に陥った主を命懸けで救った義侠心……観る者の心を熱くする壮大な物語である。

メイユールは台詞を言えるくらいこの劇が好きだった。

しかし、まだ『過激な歌劇通り』に入り口近くにいて奥の方を見ていなかったなので、少しためらいがあった。

（……時間はあるし、ゆっくり見てまわってもいいわね……）

間もなく上演が始まる。悩んでいたから見逃してしまう……。

メイユールは片っ端からまわればいい、と滅多に見られない劇を楽しむべく劇場の中へ駆け込んで行った……。

……ルターズの夜は終わらない。

二人は旅の疲れを癒すべく、それぞれの休息を心ゆくまで堪能した。

第二十六話『ささやかな休息！？』（後書き）

淫魔ゼクシスについて…この闇の種族ゼクシス（Sexies）は、文字通りセクシーから発案されたオリジナル種族です。とっても良心的なサッキュバスやラミアなどを連想していただければ、ゼクシスのイメージはわかってもらえるかと思います。精気を欲するが故に淫らかつ献身的に男に奉仕する…ファンタジーだからこそできる病んだ男の理想の女性像、それがゼクシスです。ここ数年ファンタジー小説は読んでませんが、もし同じ設定の種族がいたなら謝罪いたしますm（――）m

第二十七話『旅の途中』

早朝、陽が昇る前から街道を歩く影がひとつ。

フード付きのローブを身に着けたその者は、まるで急いでるかの如く早足で街道を進んでいる。

その速さは隊商の歩く速度を凌ぎ、その事からこの者が『冒険者』と呼ばれる一種の自由人である事が推測できた。

彼等は街の住人達と違い、ひとつのところに定住せず危険な旅をしながら暮らしている。

よって、危険な旅路において気力・体力・精神力などの生きるうえで必要な要素が街の住人達に比べて高い水準を誇っていた。

この者の歩行速度の速さは、まさに『冒険者』のそれだった……。

いくら歩いても、景色は変わらない。

その変化の無い景色を見て、私は思わずため息をつきなくなった。

(……三日も同じ景色っていうのは、さすがに精神的に堪えるわね……)

三日前にライマー島北東にあるマイア神殿を旅立った私は、たった一人で北西に位置する“夜の都”ルターズを目指して、ひたすら街道を西へ進んだ。

変わらない景色に注意力は散漫になりがちだったが、変化を求めて街道の北（進路から見て右側）にある大きな森へ入ろうなどとは思わなかった。

何故なら、私は他の仲間と共にその森で生死を懸けた戦いをしたからだった。

その戦いで私は魔法力を使い果たし、この世との関わりを断ったのである。

だが死の世界……いや、それとは少し違う“虚無の空間”にて伝説

の魔導士ルーン「マナス」に出会い、私は現世に戻った。

（……でも何故、私の前にルーン「マナス」が現れたのだろうか？）
現世に戻った私は、半ば伝説となった魔導士との遭遇について考える様になった。

魔導士自体、遙か昔の“魔導大戦”によって、ほとんどの魔導士はその姿を消していたはず。

何故、今頃になって現れたのだろうか？しかも、一介の魔術師である私の前に。

何故？

少なくとも、あれは幻ではない。

『魔導の力は、魔導を呼ぶ。その力、戒めよ。』

私は、魔術学院の卒業の際に師匠から特別に見せてもらった魔導士に関する記述を思い出した。

『……我々地上に生きる者は、魔導が無くとも生きていける。魔法が無くとも生きていける。

何故なら、我々には神が与えし最高の力、深遠なる“知恵”があるのだから。

その英知があれば力はいらぬ。

努々、力に溺れる事なかれ。力に溺れば、力に滅ぶと心得よ……』
この言葉を残して、表舞台から姿を消したルーン「マナス」。

そんな彼が、再び人前に姿を現した。魔導の力をもって私を救った。
（……考えるだけ無駄ね……）

偉大なる魔導士の考えなど、私に理解できるはずもない。

私は苦笑すると強くなった日差しを避けるため、木陰で少し休もうと森の方に向かった……。

木陰で腰を降ろした私は、フードをめくると手で顔を扇いだ。汗が珠の様に吹き出ている。

直接肌を日差しに照らすと火傷するので、いくら暑くてもフードをとる事ができなかったのだ。

おかげで、私の髪はくしゃくしゃになってしまった。

まあ、冒険者が身だしなみを整えるとはおかしな話だが、私も女性なので腰袋から手鏡と櫛を取り出すと乱れた髪をとかし始めた。

……日差しは強さを増していく。

比較的気候が安定しているライマー島にしては、ここ数日の暑さは異常とも言えるくらいに厳しかった。

冒険者となってから寒暖に対する耐性は身についたが、ここ数日の暑さには正直参っていた。

一人旅の緊張と暑さの影響だろうか、私は森の中に水の気配を感じると、そのまま森の中へ入ってしまった。

……私は森の中に入って後悔した。水の気配どころか、人の気配も感じてしまったのだ。

(……盗賊じゃありません様に……)

だが、私はこの森とはとことん相性が悪いらしい。

視線の先に見えたのは、あきらかに盗賊の格好をした男達だった。しかも女性に乱暴を働いている。

私は思わず天を仰いだ。

(……見捨てられないわ……)

盗賊にバレない様に近くへ移動する。

さいわい、盗賊達は興奮状態なので私の気配にはまったく気付いてなかった。

見た限り盗賊は五人いる。そのうち、立っているのが三人だ。残る二人は女性を暴行しているのだろう。

(……人間だけよね、無理矢理女性に乱暴する人種って)

私は、人間は欲望を抑制する意志の強さが足りない、とつくづく思った。

生い茂る草が邪魔で女性の姿が見えない。

せめて位置だけでもわかれば、被害を与えずに助ける事ができるのだが。

盗賊達は下品な笑いをあげている。

女性の涙まじりの喘ぎ声が、彼等の劣情を燃え上がらせているのだろ。

（……ごめん。もう少しだけ、我慢してね……）

女性には申し訳ないが、盗賊達が隙を見せるまではこっちから手を出す事はできない。

下手をすれば命がないし、最悪の場合、私も彼等に犯されてしまう。盗賊達が隙を見せるまで、私は精神を集中し魔法力を両手に集めた。何をするかという、気功使いと呼ばれる気をまとい戦う僧侶達の“気闘法”という技を真似て魔力を気の代わりにして肉弾戦に挑むつもりだった。

女性の位置がわからずに魔法を使えば、巻き込む可能性もあったからだ。

無謀かもしれないが、この方法なら女性を傷つけないで戦える。

そうこうしてるうちに、立っていた三人も服を脱ぎ始めた。

どうやら興奮が抑えられなくなった様だ。

森の中で裸になった盗賊達の姿が視界から消えた。女性を襲っているのだ。

私は盗賊達が無防備になった事を確認すると、一気に駆けだし彼等の前に踊り出た！

「えいっ！」

掛け声とともに、女性に覆い被さっていた盗賊を殴りつける。

不意を突かれた盗賊は、魔力がこもった私の一撃を受け、体を硬直させて倒れた。

「うりゃ！」

続けて女性を後ろから抱きすくめる盗賊の顔面を強打する。

完全なる不意打ちに丸腰の状態……機先を制した私の奇襲に盗賊達の反応は遅れた。

残る三人は私から距離を取る。

……勝機だ！

体勢を整え、飛びかかろうとする盗賊達に向かって魔法を発動した。

「——斜陽の光よ、刹那の槍となりて、眼前の敵をなぎ払え！」
無数の光の槍が盗賊達の体を打ち抜く。見た目が派手な割には威力の小さいこの呪文、肉体ではなく精神にダメージを与える魔法である。

しかし、この《光槍》の呪文をともに受けて、立ち上げられる者は滅多にいない。

肉体は鍛えられても、精神はなかなか鍛えられないのだ。

……盗賊達は魔法によって気絶していた。

それを確認して、私はすぐに女性に駆け寄ると彼女の体を抱き起す。

「……大丈夫？」

女性は、こくりと頷くとそのまま気を失った。

緊張が解けたのだろう。

私は彼女の体をなんとか抱きかかえると、フラフラになりながらも水の気配を辿って歩き出した……。

小さな湖を見つけた私は、女性を水辺に降ろし荷袋から私の替えの下着とローブ、布きれを取り出す。

それを女性の前に置いて辺りを見渡す。

それから添え木を地面に挿して簡易結界を張ると、一息ついてから服を脱いだ。

……久しぶりの水浴びだ。

冒険者の常として、冒険中は入浴が限られているので、久しぶりに体を洗える喜びに私は思わず歌を口ずさんだ。

気を失った彼女を抱きかかえて一緒に湖に入る。

私は乱暴され、所々泥だらけになった体を布きれで丁寧に洗う。

（……あら？なかなか綺麗ね……）

顔についた汚れを取ると、そこには美しい顔が現れた。

短めの割には艶やかでボリウムのある髪。

その髪は泥まみれで、汚れを取ると鮮やかな桃色の髪である事がわ

かった。

まつげは長くて軽く跳ねており、少し高めの鼻に小さな唇。

……同姓から見ても美しい、と認めざる得ないほど顔立ちはずっきりしていて非の打ち所がなかった。

見る者が見れば、魅力的に感じるだろう。

(……うっ、胸が大きい……)

彼女の体を拭いてて、体型から見て大きすぎる胸が目飛び込んできた。

(……あの盗賊達が欲情するのも、無理ないわね……)

彼女の体をよく見れば、扇情的ともいえるくらいに豊満な肢体である事が判明した。

(……悔しいけど、女としては完全に負けたわ……)

美貌なら決して負けてないが、この体は反則だ。男は顔だけでなく、体も見るから。

ちよっと悔しい思いをしたが、そのせいで彼女はひどい目に遭っている。

彼女に嫉妬するのはよそう。

私は彼女の体を隅々まで綺麗に拭いて彼女を湖から出す。

そして、長旅の汚れを落とすべく、自分の体を丹念に洗い始めた……。

第二十八話『困惑のマギー』

ここは、ライマー島の北部の広大な森の中である。
現在地は森の西よりにいると思う。

半日も歩けば“夜の都”として名高いルターズに辿り着けるだろう。
私は東のマイア神殿からルターズを目指しての旅の途中だった。

街道をひたすら進んだ私が何故森の中にいるかというと、水の気配を感じて森に入ってしまったからである。

そこで人の気配を感じた私は盗賊達と、その彼等に襲われている彼女を発見、隙を見て盗賊達を倒し彼女を助けたのだった。

「……うっ……うっ……」

小さな呻きとともに彼女は寝返りを打った。

……そして、彼女は目覚めた。

「……あ……こ、ここは……」

起き上がり辺りを見渡す。どうやら、盗賊達がいなか探している様だった。

「……おはよ。あの男達は倒したわ。もう大丈夫よ」

ローブの裾を直しながら私は彼女に今の状況を説明する。

彼女はきょとん、とした表情で私の顔を見返す。

そして思い出したのか、急に顔色が曇った。

「……ああ……」

彼女は両手で顔を伏せると静かに泣きはじめた。

……かける言葉がなかった。

あの盗賊達は、よってたかってか弱い彼女にあんな卑劣な行為をしたのだ。

（……いつの時代も、泣きを見るのは……いつも女性なのね……）
私は肩を震わせて嗚咽を漏らす彼女を優しく抱きしめると、その震える体を静かに撫でた……。

「……ありがとうございます。このご恩は、一生忘れません。ありがとうございます……」

ようやく落ち着きを取り戻した彼女は、真っ赤になった目を擦りながら私に何度もお礼を言ってきた。

彼女はナリールと名乗った。なんでも、ルターズから逃げ出して来たという。

「……私はマーガレット。マギーでいいわ」
困った事になった。

私はこれからそのルターズへ行かなければならなかった。

私を死んだと思い込み、旅立って行った仲間達に会わなければならぬのだ。

「……私はそのルターズへ急がなければならないの。ナリール、あなたはどうする？」

彼女を無理に連れて行くわけにもいかない。何かしらの事情で逃げ出して来たのだから、ルターズへ連れて行けばどんな目に遭うかわからない……。

かといって、彼女を安全な場所へ送り届けるだけの時間的な余裕はない。

ドムは冒険者としての精神的な強さをきちんと兼ね備えている。

今頃ルターズで新たな仲間を探していてもおかしくないのだ。

（……薄情かもしれないけど、割り切れない者に冒険者は務まらないのよね……）

あのドーフとて、まったく悲しんでないはずはないだろう。

だが、その悲しみを乗り越えていく逞しさがある事も私は知っている。

だから急がなければならない……。

「……私も、一緒にします……」

「えっ？」

「……私、今回の事であきらめました。ですから、私はルターズに戻ります」

その声は小さかったが、意志の強さを感じた。

「……私、人間じゃないから……やっぱり“外”では生きていけないようです……」

ナリールは少し悲しそうな目を私に向けた。

その目には、たしかに人間のものとは違う妖しい輝きがあった。

「……あの男達に乱暴されて、私はゼクススである事を思い知らされました……」

ゼクスス！彼女は、あの淫魔族の者だったの……。

「……心は拒んでいても、体はあの男達に乱暴されて喜んでいました……もつと犯されたい、いじめられたい、と心の中の声が私に囁くのです……」

ナリールは自嘲気味な笑みを浮かべると私の手を握りしめる。

「……精気を糧とするゼクススの性、^{さが}ですね……それが嫌で逃げ出したのに、やっぱりゼクススである事は隠せません……ゼクススには、男を惑わす力があるから……逃げてもきつと同じ事の繰り返しです……それなら、ルターズにいた方が、愛した人が性欲に狂う姿を見ないだけ、まだマシ……所詮、淫魔……幸せにはなれません……」

……
ナリールの手が強く握られる。逃れられない種の本質に悔しさを感じているのだろう。

私は、ゼクススの宿業というのはわからなかったが、ナリールの苦悩はなんとなくがわかる様な気がした。

「……マーガレットさん……私はゼクススですけど、一緒にいても構いませんか？」

彼女の言いたい事はわかる。でも、私には彼女を拒む事はできなかった。

「……旅は道連れ、って誰かが言ってたわ。ここで出会ったのも何かの縁だし……できれば遠慮してほしいけど、精気が欲しくなったらあげるわ……」

ナリールは淫魔。

淫魔と行動を共にする、という意味を知っていたが、あんな悲しい話を聞かされて拒めるほど私は薄情にはなれない。

「……マーガレットさん、ありがとう……」

彼女は私の胸に飛び込むと、涙を流して何度も感謝の言葉を言い続けた……。

いつまでも森の中にいるわけにはいかなかった。

獣もいるし、何よりこの森は盗賊達の隠れ家になっている。

いくら魔術師とはいえ、一人では彼等に適うはずもないのだ。

彼女を助けた時の様な奇襲ができるなら、また話は違うのだが……。よって私達は街道を西に歩いている。

陽は沈み、月が顔を出し始めていたが先に進む事にした。

彼女は淫魔。

魔物なので、見た目と違ってその体力は並の冒険者とは比べものにならなかった。

（……一晩中、冒険者達の相手をするだけあって、すごい体力ね……）

黙々と隣を歩くナリールを横目に私は内心舌を巻いていた。

私は魔術師にしては珍しく、基礎体力の訓練も毎日欠かさずに行っている。

『……魔法は体力が肝心。魔術師とはいえ、いざという時のために肉体を鍛えておかなければならない……』

私は、この魔法哲学にいたく感銘を受け、魔術の他に体力の鍛錬を行っている。

そのおかげで、戦士以外の女性に体力で負けた事がなかった。

しかし、ナリールは女戦士並の……いや、それ以上の体力をもっていた。

早足で歩いているのに、彼女はまったく疲れを見せないでいる。

歩き続ける事数時間、私達は“夜の領域”を越えて闇の種族の領地に入った。

(……このまま行けば、予定より早くルターズに辿り着けるわね……)
目の前に明かりが見える。その光はルターズの不夜城には劣るものの、一般的な夜の街に比べれば充分すぎるほど明るかった……。

フェミニンの街。

“夜の都”ルターズから東へ半日の距離にあるこの街は、闇の種族の領地の割に人間の人口が多かった。

人間が経営するだけあってルターズほどではないが、それでも歓楽街の派手さは夜の街にふさわしい。

この街は、人間独特の活気を誇っていた。

私達は裏通りにひっそりと佇む“快楽の坩堝亭”^{るごほ}なるいかがわしい名前の寂れた宿屋に宿泊する事にした。

案内された部屋はお世辞にも清潔とは言えなかったが、一晚寝るだけだし、ひとつしかないとはいえベッドがあるだけ疲れた体を癒せる。

すっかり冒険者に染まった、と思いつつも私はあまり気にせずローブを脱ぎ捨てるとベッドに潜り込んだ。

「……あ、あの……わ、私も一緒に……寝てもいいですか？」

少し遠慮がちにナリールは口を開いた。彼女は淫魔。その事を気にしている様だった。

「……当たり前でしょ。ひとつしかベッドがないんだから……さ、遠慮せずに一緒に寝ましょう……」

どっちにしても彼女に欲情されれば、一緒に寝なくても同じ部屋にいるので逃れられない。

本気で欲情した淫魔に抵抗できる者なんていないから、私はおとなしく彼女を受け入れる事にした。

「……では、失礼します……」

ナリールはしずすとベッドに入る。

小さなベッドではお互いの体が密着する。

男の情欲を掻き立てる彼女の柔らかな肌が私の体に押しつけられる。気がつくとは私は、いつの間にか彼女の腕に抱かれていた。

「……マーガレットさん……いえ、マギー、あなたの精気を下さい……」

彼女はそう言うのと私の体をぐいっと抱き寄せ、私の顔を自分の方に向かせる。

「……マギー、いい？」

やけに潤んだその目には淫猥な輝きで光っていた。

「……抵抗するだけ、無駄でしょ？」

私は淫魔の本質を知っている。

何を言っても結局のところ、彼女は私を抱くのだ。

それなら無理矢理彼女のモノにされない様にするしかない。

彼女達の房中術は人間達の比ではない。

限らない快楽の果てに墮落する者が後を絶たない。その事から、彼女が私を無理矢理自分のモノにする事だって、決して不可能な事じゃないのだ。

「……ナリール、私を……夢中に、させないでね……」

魔術師になる前――まだ見習いだった頃――、魔術師の慣例で師匠の夜の相手をさせられていた事を思い出す。

師匠は女性だったが、数ある弟子の中で最も美貌を誇る私をよく指名していた。

幸い師匠はあまり房中術に長けておらず、それこそ毎晩の様に抱かれていたのにも関わらず、私は快楽に溺れる事はなかった。

（……でも、ナリールは違う……）

私は抱かれる事に、というよりも、ナリールに夢中になってしまう事が怖かった。

私は同じ見習いの娘が師匠に夢中になり、魔術そっちのけで快楽に溺れたあげく、師匠にかわいがられていた私に嫉妬して排除しようとして破門されたのを思い出していた。

快楽に溺れたら破滅する……。

私はその事を身を持って知っている。

「……ナリール、抱いてもいいけど、私を夢中にさせないで……お願い、約束して?」

私はナリールの目が妖しく光るのを見て怖くなった。

もしかして、彼女は私を墮落させるつもり?

ナリールは私の言葉に答えず、私の頬に触れた。

「……ナリール……」

逃れようとするが、彼女の腕に抱かれたまま身動きする事ができなかった。

逃れる事もできない私は、彼女が魔物である事を思い知らされた……。

……波の様に次々と快感が押し寄せ、何度も意識が真っ白になる。

意志を強く保ち、快楽に溺れそうになるのを必死に耐えるが、彼女はそんな私を楽しむ様に私の体を弄んだ。

結局、彼女は答えてくれなかったが私を夢中にさせる事なく行為を終えてくれた。

もし本気だったら、こんなもので済むはずがない。

実際、彼女はまだ満足していないのだから。

「……マギー、約束、守りましたよ……」

私の顔をその豊満な胸に抱き寄せる。

私は胸の谷間から彼女の顔を覗き見た。

私はまだ快感の余韻で喋る事ができず、ただ彼女にされるがままに抱かれている。

(……早く、ルターズへ向かわないと……)

そう思いながらも、私は意識を保ち続ける事ができなかった……。

第二十九話『再会』

疲れを癒し体力を回復した私達は、フェミニンの街を出て一路“夜の都”ルターズを目指した。

違った意味で疲れ、虚脱感の残る私と精気を摂取し顔色が良くなったナリールの二人。

……ナリールは私の腕に手をまわして寄り添う様にして歩く。かなり密着しているので、歩きにくい事この上ない。

フェミニンの街からルターズまでは、道がすっかり舗装されているので歩くのにさほど支障はなかったが、それでも彼女が密着しているので遅々として距離を詰める事ができないでいた。

「……あ、あの、あんまり、くっつかないでよ……」

くっつきすぎて歩きにくいので、私は彼女に離れる様に促した。

「……す、すみません……」

そう言ってナリールは少しだけ離れる。

それでも私の腕に手をまわしたままだったが……。

（……困ったわね……）

私は内心、彼女がこのままくっついて来そうな気がして少し困惑していた。

彼女、ナリールはゼクスだ。

淫魔族という魔物―友好的な悪魔といった方がわかりやすいか？―の一種で、生き物―人型―の精気を糧として生きている。

その性格は極めて好色で気まぐれ、倫理感の欠片も無く、それでいて『人』の欲望を操る不思議な能力を持った強力な“人類堕落生物”といっても差し支えない淫猥な性質を持つ。

そんな彼女が妙になついている事に、私は背筋が凍る思いを抱いていた。

『ゼクスは堕落への架け橋』

ある教会で聞いたゼクシスに対する見解。

実際、彼女といて私はその事を心から納得していた。

知を掲げ魔術を追求する者にとって、墮落は存在意義の否定に他ならないのだ。

故に私は彼女の好意的な態度を恐れていた。

（……同情は身を滅ぼす、か……）

私は思わずため息を漏らした。

すべては自ら招いた事。

これも試練だと思い、精神の鍛錬になるとでも思い込む事にしよう……。

“夜の都”ルターズ。

この街……いや、“夜の領域”内は明ける事を知らない。いつまでも……いや、永遠に夜の闇に包まれた暗黒の世界。

この街には様々な人種が観光に訪れていた。
人類では思いつかない、倫理感に邪魔され行いう事のできない様々な娯楽があつたからだ。

“夢幻の館”と書かれた看板が掲げられた豪華絢爛な建物にも、そんな倫理を越えた娯楽を求めてやって来た者達が、金銭と引き換えに人生における最大級の快楽を手に行っていた。

その一室。

豪華な造りの部屋には、余裕で二人以上入れる様な大きなベッドがあり、ところどころに一目で高価だとわかる調度品が贅沢に並べられている。

その浮き世離れた部屋の一角に、ソファーに腰を降ろし、美女のお酌を受けて酒をたしなむ一人のドワーフがいた。

……ドムである。

「もつと飲んで下さいな」

美女は艶やかな微笑みとともにグラスにお酒を注いだ。

「……うむ、至福の味だ」

「旦那の飲みっぷり、素敵だわ……」
うつとりとした表情で美女はドムを見つめる。

「……ねえ、旦那は冒険者でしょ？いつまでこの街にいるの？」
美女は媚びる様な仕草でドムの手を握ってきた。

どうやら、この美女―言うまでもなくゼクススだが―はドムを気に入った様である。

ドムは美女の問いに頷くと、グラスを置いて少し遠い目をした。

「……所用があるので、もう少し休養したら街を出る……だが、帰ったら冒険はしばらくお休みだ……」

そう言つてドムは再び酒を口にした。

その身から滲み出る雰囲気は美女の顔色を暗くする。

「……そう。帰つて来たら……また会いに来てほしいわ……」

おそらく、その願いは叶わないだろう。

だが、それでいい。それがゼクススの宿命なのだから。

美女は、元の明るく扇情的な微笑みを浮かべた。

そして、残り少ないこの時間を楽しもうと無言で酒を煽るドワーフに抱きついた……。

……“ラナン・デインの遊び場”の受付。その日もだらけきった格好で椅子の背もたれに寄りかかり、本を読むラナン・デインの姿があった。

目の前に現れた二人を見ても、相変わらずだるそうな視線で一瞥すると再び本を読み始める。

ローブを着た二人の女性は、お互いに顔を見合わせると主人の読書を邪魔しない様に静かにサロンへ向かった。

「……何も言わない、って事はまだドムは出てってないわね」

サロンにある椅子に座つて呟いた。

（……ドムはおそらく歓楽街、それも『昇天街』ね。つまり、帰りは遅いわね……）

ふう、とため息をひとつ。目の前で桃色の髪をいじるナリールを見

て私は頭を抱えた。

（……ああ、ドムに彼女を任せようと思ったのに……）
ルターズに戻ったらまず歓楽街へ行くとは思ったが、まさかドムがこんなに早く行ってしまうとは計算外だった。

（……三日の時間差があるって事は、ドムにナリールの相手は無理ね……）

私の視線に気付いたナリールはその紅い目を向けてくる。その目は妖しい光を放っていた。

彼女は、ゼクシスの割にはあまり自己主張をしないでなかった。それだけでも、まだマシかもしれない。

（……ゼクシスは惚れっぽいから……なんとか手懐けて、我慢してもらっしかないわね……）

静かに微笑みを浮かべながら私を見つめるナリール。

部屋に戻るのを待っているのか、時折受付や階段の方を見ていた。

（……はあ、彼女、精気がほしいのかしら……）

ふう、とため息をまたひとつ。

私はとりあえず魔術書を読もうと受付に行って部屋の鍵を借りる事にした。

「——マーガレットさん!?」

サロンで魔術書を読んでいる私を見て彼女は驚きの声をあげた。

彼女―メイユール―は信じられない、と言いたげな目で私をまじまじと見つめる。

それからナリールに目を移すと顔をしかめる。

さすが、神官戦士。一目でナリールをゼクシスであると見抜いた様だ。

メイユールは私の目をジツと見つめ、本物かどうか確かめている様だった。どうやら、エルやプラナと同じ様に生き返った私を不信に思っただろう。

しばらくの間、目を離さずに射すくめる様に見つめるメイユール。

そして、やがて納得した表情になると笑顔で話しかけてきた。

「……おかえりなさい、マーガレットさん」

その笑顔には、すでに先程の不信感は感じられない。

「……ただいま、メイユール……」

私はそう言ってメイユールに手を差し出す。

その意味を悟った彼女は手を出して固い握手を交わした。

「——マーガレット！お前、生きてたのか！？」

聞き慣れた声が響く。

振り返ると、そこには心底驚いた表情のドムが立ち尽くしていた……。

久しぶりというには、あまりにも早すぎる再会。

私は途中で知り合ったナリールを二人に紹介してから、再会を祝して四人で酒場に赴き祝杯をあげた。

そこで私は普段あまり口にしないお酒を飲みつつ、久しぶりに安らぎを感じながら心地よく酔いしれていた……。

第三十話『目に見えぬ導き』

「……ドム……これはどういう事なのか、詳しく説明してくれるわね？」

思わず殴りたくなる衝動を堪えて、わなわなと震える手を握りしめる。

視線の先には、空の皮袋がテーブルの真ん中で無惨な姿を晒していた。

テーブルを挟んで向かい側に座るドワーフに視線を戻す。

ドムはチラッと私の方に視線を向けると、悪びれもなく欠伸をして口を開いた。

「……娼館で豪遊した」

その瞬間、ピシッと音がした様な感覚が私の頭の中に伝わる。

（……この男は、毛ほどにも反省していないようね……）

私はこのドワーフの金銭感覚の無さに頭痛を感じながらも、この極めて深刻な事態をどうやってその石頭に叩き込んでやろうか考える。ドムは、私のいない間に全財産を……酒や女につぎ込んだのである。しかも金貨だけならまだしも、非常時に換金しようと密かに隠していた貴重な鉱石や宝石まですっかり無くなっていた。

……つまり、私達は限りなく無一文状態となってしまったのである。

「……それが遺言でいいの？」

頭の中で風の揺らめきを発現させる。

それは、自己の精神世界に想像（創造）した事象を物理的な力に変換する、言うなれば魔法の発動に必要な『魔術の構成』である。

魔法力が高まるのを感じたのか、ドムの顔色が変わる。

「……な、何もそこまで……」

「そこまで、でないでしょ！」

テーブルを叩き、私はドムにまくし立てた。

「何をどうしたら、一年は優に暮らせるお金を散財できるのよ!？」
私は無意識に立ち上がり身を乗り出す。

それに驚いたメイユールとナリール―二人はベッドの端に避難していた―は身を竦ませた。

「ドム、あんた馬鹿じゃないの!？よりによってルターズで一番高い娼館なんか二泊もしておいて言い訳するつもり!？」

「……別に女を抱いたくらいで……」

「女を抱くな、とは言っていないでしょ!なんで馬鹿みたいに散財したのか聞いてんのよ!あんた、何も考えないで高級娼館に入り浸る習性でもあるわけ!？」

ようやく私の怒りを理解したのか、ドムの顔に冷や汗が浮かぶ。路銀が尽きた事を知ったドムは低く唸った。

「……まあ、過ぎた事だし、あなたが散財したお金は稼いでもらうとして……この宿はリリトさんのツテで無料で済むからいいとして、ここを出たらどうするのよ」

溜まった怒りを吐き出して少し落ち着きを取り戻した私は、とりあえず椅子に座りドムを睨みつけた。

「……あ、あの……路銀なら、私も少し持ってますから……何もそんなに怒らなくても……」

横から恐る恐るメイユールが声を掛けてくる。

彼女は神殿を出る時にわずかだが旅の資金を持って来ていた。

だが、それとこれとは話が違う。

冒険者が多少の豪遊をするのは仕方の無い事だが、ドムの散財した額は豪遊程度では済まされなかったのだ。

そして何よりも許せなかったのは、密かに大切にしていた宝石まで売られた事だった。

女を抱くために思い出の品を売ったのが私にはどうしても許せない。

「……そうだ。何もそこまで怒る事ないだろう……」

でも一番許せないのは、このドワーフのまったく悪びれる事の無い態度だ。

「……少しは反省しなさいよ！」

そう言つてテーブルを叩きつけると、私は部屋を飛び出した。慌ててナリールも後を追う。

私は頭に血が昇っているのを自覚していたがとても冷静になる事が出来ず、あてもなく歓楽街の方に向かって黙々と歩き出した。

残されたドムとメイユールは、困った表情でお互いの顔を見合わせていた。

「……ドムさん、謝った方がいいですよ？」

不安げな視線を向けるメイユール。

ドムもさすがにまずいと思ったのか、彼女の言葉に頷くとポツリと呟いた。

「……仕方無いな。しばらく酒を断つて誠意を見せるか……」

ドムはそう言つと席を立ち上がり、自分の部屋に戻つて眠る事にした。

（……どうして、ドムは冒険以外の常識を知らないのよ……）

私は歩きながらひとり愚痴る。

（……ホント、戦闘以外の思考は短絡的なんだから……）

歩いているうちに怒りが萎んでいく。ドムは前からそうだった。根っからの戦士であるドムは、良くも悪くも豪放磊落なのだ。

（……仕方の無い事、か……そうなのかな……）

冒険者となつてから、私は『常識』の尺度があやふやになった様な気がしてならない。

命のやり取りを繰り返していたら、一般的な常識など無くなつていくのだろうか？

「……マギー、ちょっと寄つて行きたいところがあるんだけど、付き合ってもらつてもいいかしら？」

いつの間にか私の腕に自分の腕を絡ませたナリールが突然、耳元で囁きかけてきた。

「……いいわよ」

かすかな吐息を感じて背筋に悪寒が走ったが、それを堪え私は小声で答えた。

ナリールの後を付いていくと『昇天街』に辿り着く。

周りを見れば、ゼクシスを連れた男達がご機嫌な表情で街を歩いている。

時折、その男達から奇異の視線を感じながらも私はナリールの後に続いた。

しばらく歩くとどの建物よりも目立つ豪華な造りの建物の前に着いた。

『夢幻の館』と書かれた看板が入り口の脇に立て掛けられている。

ここからナリールは逃げ出したのか？

私は彼女の方を見た。

「……マギー」

少し弱々しい声で私の名前を言うと、すう、っと深呼吸をする。そして意を決した表情に変わると建物の中に入っていった。

「——夢幻の館へようこ……ナリール！」

ナリールを見たゼクシスが驚きの声をあげる。

後から入った私は、中を見て率直な感想を述べた。

「……ドムの気持ち、なんとなくわかる様な気がする……」

甘美な香りは理性を奪い、彼女等の妖艶な肢体が男達の欲望のタガを外す。

衣装というには、あまりにも淫ら過ぎるその格好は彼女等の妖艶な肢体をより引き立たせていた。

享楽の果てに男を破滅させるものが、たしかにこの場所には存在している。

同性だからか、彼女等の魔力の影響をあまり受けなかった私は比較的冷静にその状況を分析していた。

「……ナリール」

この場にいるどのゼクシスよりも強い波動を放つ女性がナリールの

前に来た。彼女がこの館の主人だろうか？

「……よく帰って来てくれました。あなたがいなくなってから、私達はとても寂しい想いをしたのよ……」

そう言つて彼女はナリールに抱擁する。

「……あ、あの……カデイルナリス様……私、お許しをいただきに戻つたのです……」

ナリールは女主人の体をそつと引き離す。

「……私、この方と旅に出ます……」

不意に私の体にしがみついてナリールは静かにそう言つた。

女主人はナリールの顔を見つめる。その目に宿る妖しげな光がナリールを捉える。

「……お許しを……」

私の腕にまわしたナリールの手が震えていた。

「……ナリール、その娘と……」

女主人は静かに、だが強い口調で問いかける。

ナリールは少し怯えた表情で頷くとはつきりと答えた。

「……はい、寝ました。でも、無理矢理ではありません……だから、掟には背いてません……」

掟？人と寝る事と掟に何の繋がりがあるっていつの？

私はその意味がわからずに訝しんだ。

「……『むやみに精気を摂取する事なかれ』……我らゼクシスの掟を、決して忘れてはなりませんよ……」

女主人の声には、少しだけ優しい響きが含まれていた。

「……ナリール、あなたの決意はわかりました。旅に出る事を許可しましょう……ただし、ゼクシスである事は秘密にしないさい。それがあなたの……そして、その娘のためです。いいですね？」

「……ありがとうございます……」

ナリールは一礼をすると私の方を見た。そして、寄り添う様にくつつくと笑顔で言つた。

「……マギー、これからよろしくね……」

やっぱり……私は、なんとなくそんな予感を感じていたので、あきらめた様に頷くと彼女の体を引き離して女主人の方へ追いやった。
「……私、先に宿に戻ってるから……他の娘にも、別れの挨拶をできなさいよ」

私はそう言つとさつさと店から出て行つた。

この場所は男の樂園。果てしない享樂と墮落で彩られた禁斷の園。私がいつまでも留まつていい場所ではない。

（……すべては、心の向くままに……これが運命なら導かれるままに……私は進んで行くまでよ……）

歩きながら、私は思案する。

あの虚無の空間ともいうべき場所で私は“何らか”に導かれる運命を背負つたのだろう。

私の復活には、意味があるのだから……。

帰り道、そんな事ばかりが頭の中でうごめいていた。

……そこにはすでに、ドムの散財の事も、ナリールが付いて来てしまふ事も、何故か私の思考の中から抜け落ちていた。

最終話『進路は南へ』

……私は夢を見ていた。

（……夢？ いや、これは夢なんかじゃない……）

虚無の空間に漂う私の心……『思念体』といった表現の方が正しいかもしれない。

かつて魔法力を使い切り力尽きた私は、この『場所』へ来ている。死してさまよった私の魂が訪れた虚無の空間。

……私は、ここで……《魔導の守護者》、《深遠なる賢人》、《真理の具現》……と数々の二つ名を持つ伝説の魔導士・ルーン＝マナスと出会っている。

五感のすべてが消失する場所。死後の世界とは違う“無”の空間。

……私は、この虚無の空間に身を委ねている。

消失した感覚を感じようと意識を強く保つ……目に見えず、音も無く、何も感じない空間で、意志の力により“何か”を探す……。

すると、強烈な意志の力を感じた。

（……ルーン＝マナス……）

私を遙かに超越する意志力。私は“それ”を感知する事に成功した。

《……余は、ルーン＝マナスではない……》

“声”が私の心の、いや、魂の中に響く。

（……その超越した意志力を持つあなたは……誰？）

意識を強く保ち、声にならない“声”を出す。

《……余も魔導を極めし者……余の名を知ったところで、意味はあるまい……汝、“魔導の後継”よ……》

“声”は強烈な意志力を発揮し、私の意識に『言葉』を刻んだ。

（……ま、“魔導の後継”……）

意味がわからない。この時代、魔導の力は失われている。

今まで力ある導師達が挑み続け、誰一人辿り着けなかった究極の魔

法原理。

力の一端すら掴む事ができなかったその魔導の後継って……？

《……汝、“魔導の後継”よ……》

“声”が私の思考を遮る。

《……余はもうじき目覚める……答えを知りたくば“ユピト”へ行け……汝を導く、真理の一端を与えよう……》

その言葉が私の魂に刻まれると“声”の意志が“包み込む”様に私の意志を覆った。

《……“魔導の後継”よ……真実は目に見えぬ……真実は、心の眼で捉えよ……さすれば、魔導はその身に宿る……》

(……ああ……)

意識が薄れゆくを感じる。でも私は、これが消滅するのではなく、虚無の空間から現実へ帰還するためのものだと、何故か理解する事ができた……。

目覚めると、全身汗で濡れていた。

目眩にも似た感覚が私の意識を包んでいる。

体は重くてだるい。手はわずかに震えていた。

あの出来事は、ただの夢ではない様だ。

(……あの“意志”は誰？ユピトの街へ行け？私に、何を求めているの？……)

疑問が次々と沸き上がる。

汗でぐっしり濡れてしまった寝間着を脱ぎながら、私は“夢”の中の出来事を繰り返し頭の中で反芻した。

ユピト……なんらかの災害により壊滅状態にある西部の街。その災害はひどらしく、情報すら遮断されているという。

(……そのユピトの街へ行けば、あの“意志”の言葉の意味がわかるかもしれない……)

おそらく、私はあの“意志”の言葉に導かれてゆくのだろう。確信ともいえる思いが、私の魂を震わせている。

「……私に、何の価値があるのかしら……」

ひとり呟くと私は起き上がり、ローブを身に着け部屋を出て行った。

……見れば見るほど頼りないっていうか、あてに出来ないっていうか、つくづく頭が痛くなるっていうか……。

サロンに揃ったパーティー。彼等（男は一人だけだが）を見回して率直に私は思った。

戦力的には及第点をあげられる。だが、問題はその中身だ。

戦士のドム。

その戦闘力は、純粋な肉弾戦なら冒険者の中でも上位とも言えるかもしれない。

だが、惜しむらくは彼には一般常識が希薄だった。

特に彼の金銭感覚の壊滅ぶりは半端ではない。

例えるなら『商人の力モ』もしくは『酒の如く金を喰う男』と言える。少しは伝わるだろうか？……そう、彼には生活能力というものが悲しいほどないのである。

神官戦士メイユール。

彼女は戦士としての技量に加え、神官としての修行により神聖魔法を操るパーティー唯一の回復役である。

後になって知ったが、彼女は神官として神殿に長いこと居たおかげで、人を疑う事を知らなかった。『生まれながらの悪人はいない』

……完璧な性善主義者だったのだ。この時代、そんなに清らかな心を持った者は……残念ながらいらない。悪魔や魔物達が我がもの顔で生きているこの地上界で生きる上で、そのような考えを抱いて旅をするなど狂気の沙汰である。それだけ今の時代は荒んでいるのだ。そして、ナリール。

彼女は冒険者ですらない。

その正体は、サッキュバスや“霧の悪魔”と同様に他の生物の精気を糧として生きる闇に属する魔物、淫魔ゼクススであり、ルターズへ向かう途中、森の中で襲われていた彼女を助けた事で私になつい

てしまったのである。

むろん、戦闘力など無い。

魔物である故に冒険者並の生命力を持つてはいるが、戦う術を知らない彼女は戦力的観点から言えば、ただのお荷物としか表現できない。

……戦うだけなら、十分なメンバーと言えよう。

だが、彼等と行動を共にするには不安材料が多すぎた。

ドムは財布さえ気をつければ大丈夫だろう。

少なくとも、街に入るまでは冒険者としての常識を守ってくれる。

問題はメイユールとナリールだ。

基本的に人の悪意（殺意）を察知するメイユール。

そういった面では信用できる彼女は、悪徳商人などの口車に乗せられる恐れがある。

命には関わらなくとも、パーティーの不利益を抱え込む恐れがある故にとても一人にはできない。

ナリールの場合は問題外で、人間達の尺度を越えた価値感を持っているので何をしでかすか見当もつかない。

故に一人にできない。

かといって、彼女は私の精気を欲するのであまり一緒にいたくもない。

つまり、旅をする上で周りに―そして我々に―被害を及ぼす恐れがあるという事が、私の頭を痛めてくれた。

（……ルーン＝マナスよ、どうか哀れな私をお導き下さい……）

私は虚無の空間で出会った“者”に思わず救いを求めていた。

『ユピトへ行け』

それが“声”の導き。私達の次なる目的の地。

旅の行く先はすべて私に委ねられているので、私はライマー島の西部最大の街・ユピトを目指す事にしたのだ。

何らかの災害に見舞われた街ユピト……その被害や惨状といった一切の情報が遮断された街。

“声”の導きに従い、その街へこれから向かう私達にとって、『戦闘能力以外は欠点だらけ』というこのメンバーは少なからず不安にさせた。

(……まあ、これも『運命』ってやつだったりして……)

私は彼等を見渡し、そんな事を考える。

「……マーガレット、出発準備はとづくに出来てるぞ」

ドワーフの戦士が、ぶっきらぼうに言った。

「……次はユピトですか……何かしらの力になれば良いのですが……」

メイユールはユピトの災害を思い、その表情を曇らせた。

心優しい彼女は、災害に遭ったユピトの住人の安否が気になるようだ。

「……ルターズもいいけど、私は“夜の領域”の外をもっとよく見てみたいわ……」

うつとりする様な表情でゼクシスの美女は呟く。

「……私、マギーと一緒になら、どこでもいいけどね……」

(……はあ……)

彼女には、旅というのが危険な事だという認識が無いみたいだ。

(……見えない事で不安になっても仕方が無いわね……)

この仲間達を見ていると、これからの旅に不安がってる私が滑稽に見える。

……私は、気持ちを切り替えてみんなを見渡し口を開いた。

「……じゃあ、行きましょうか……」

そう言っただけでサロンを出る。みんなもその後についてくる。

受付にはいつもの様にだらけきった態度で本を読んでいるラン・デインがいた。

別れの挨拶をすると、本から目を離して声を掛けてきた。

「……エルフの魔女よ、行くのか……では、健闘を祈ってやるよ……」

……また会おう、“魔導の後継”よ……」

えっ？驚く私の顔を一瞥するとラン・デインは再び本を読み始め

た……。

“魔導の後継”……ラナン・デインも“声”と同じ事を言った。その言葉には、いったい何の意味があるのか？

……魔導の後継者？

答えはまだわからない。だが、ユピトへ行けばその意味がわかるはず。

今は謎の解明よりも目先の旅の方が重要だ。

明ける事の無い闇の中で、私達は新たな冒険を求め、ユピトに続く長い道を歩き出した……。

最終話『進路は南へ』（後書き）

後付けっぽいけど、物語の展開が変わるので一旦区切る事にしました。一部完結、と言えはいいのでしょうか？マギー達の冒険はまだ続きます。

……これまで読んでいただいた方々には感謝のしようがありません！本当にありがとうございましたm（――）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0970a/>

ライマー島放浪記

2010年10月11日18時11分発行